

349  
37

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



25 328

50

349-37

オソツル

録悔懺

譯庵戲川石

篇後

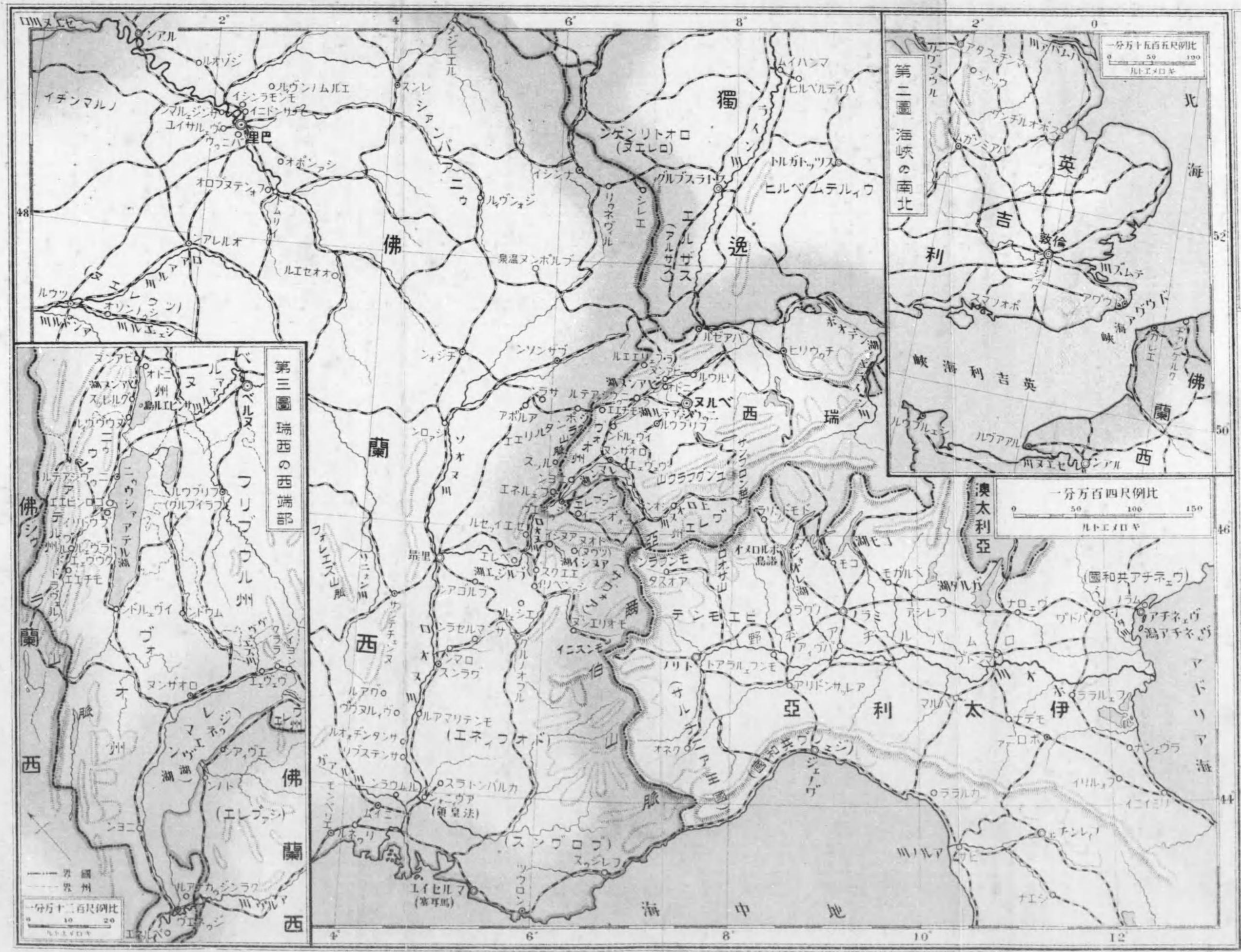
大正  
2. 3. 19  
購求



第一圖 ルソノ才放浪の舞臺

境域は現時の制に従ふ  
當時の境域に就きては本文中の譯者注参照

譯者製圖

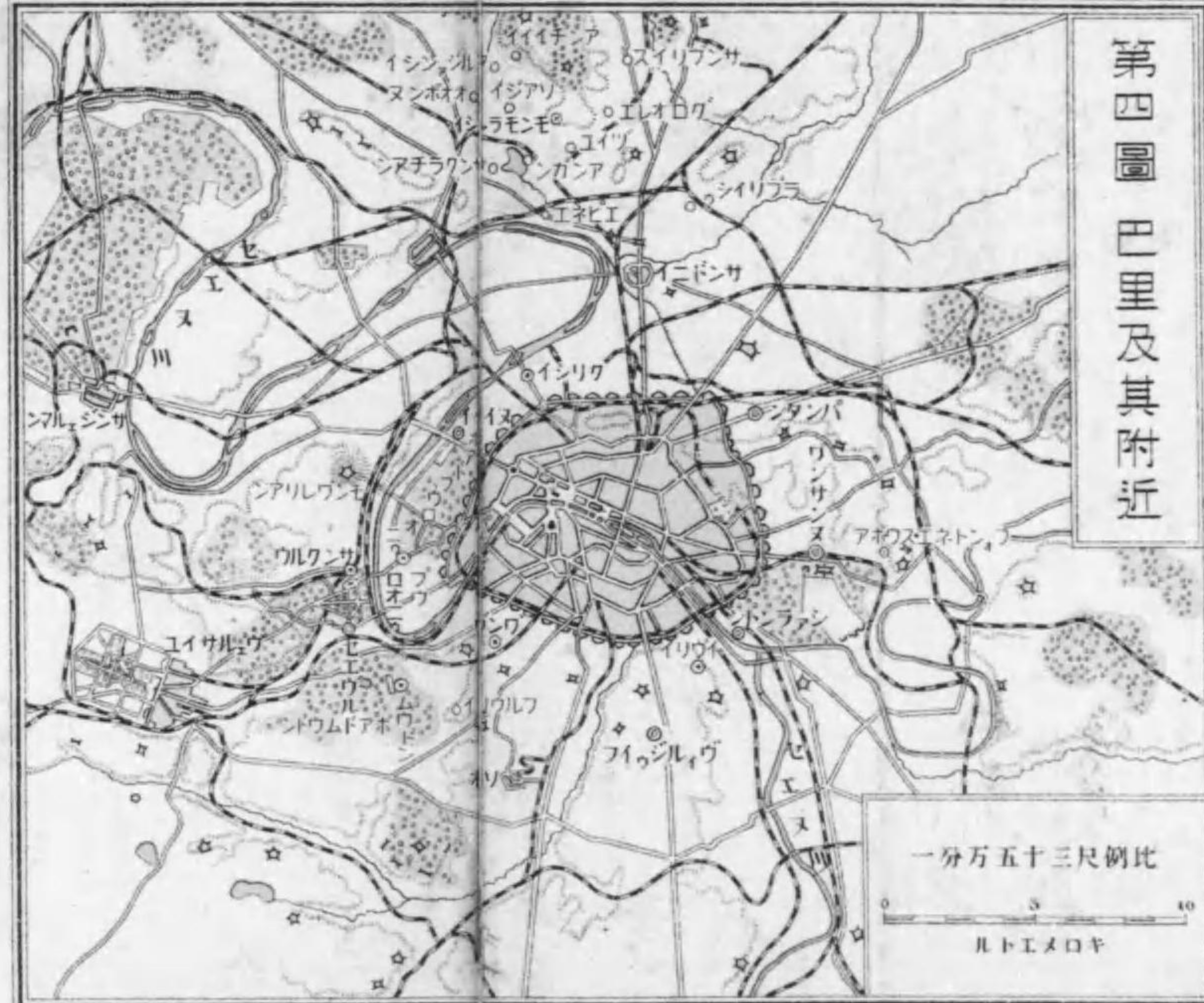


第一圖 ルソノオ放浪の舞臺

境域は現時の制に従ふ 當時の境域に就きては本文中の譯者注参照

譯者製圖

第四圖 巴里及其附近



第五圖 第十八世紀の巴里



1749(38)

一七四九。

前巻の終て一度筆を擱く必要があつた。この巻からは前に播いた不幸の種子が、そろそろ頭を持ち上げて来る。

巴里に時めく邸の、しかも二軒まで私の足を停める場所となつてゐただけに、いかに交際下手な私でも、つひ種々な人と相識になれた。ヂャパン夫人の邸では、

第八卷



第八卷

第四圖 巴里及其附近



第五圖 第十八世紀の巴里



1749(38)

セ・ゴータ Sachsen-Gotha の年若な世子と、その師傅のツウン Thun 男爵と。ラ・ボブ  
 リニエール氏の邸では、ツウン男爵の友人スギイ Seguy 氏と相識になつた。スギイ  
 氏はルッソ(ジャン・パチスト・ルッソ)の美本を出版して、文界にも名を知られてゐた。  
 其のスギイと私は、男爵に招かれて、Fontenay-sous-Bois の世子の  
 別館へ、一日二日遊びに行つたことがあつた。途中ヴンサンヌを通つて行くと、例  
 の牢獄が見えるので、心に激痛が起つた。顔にまで其の色が顯はれて、男爵に怪ま  
 れた。晚餐の時、世子はデドロオ拘禁のことを話し出された。男爵は私に口を開  
 かせようと思つて、デドロオの不謹慎を攻撃した。けれども、私の聲色を勵まして、  
 デドロオの無罪を主張した不謹慎も、決して軽くはなかつた。友の不幸を見るに  
 忍びぬ所から、思はず斯うした激語も發したので、誰も咎める者もなく、話頭は外  
 へ逸れて行つた。世子の傍に二人の獨逸人が隨いてゐた。一人はクルップエル Kuppel  
 Feil 氏と言つて、才智に長けた宮中牧師。後に男爵を遣ぎけて世子師傅となつた。  
 今一人の若い方はグリムと言つて、適當な位置の見つかるまで、講師として用ひら  
 れてゐた人であつた。如何にも見窄しい風采は、速く相應な位置を求めたい意味

を語つてゐた。クルップエルとは當の晩から懇意になり、旋て親友の間柄となつた。  
 グリムとの交際は、その様に速くは成り立たなかつた。後日の得意時代に見た、か  
 れの倨傲な風は、この頃は未だ見せなかつた。なるべく出しやばらない氣味にし  
 てゐた。翌日の食卓の談話に、音樂のことが出た。グリムはなかなか通を言ふ。  
 殊にクラヴサンが弾けるといふことは私を喜ばした。食後には早速音樂が始ま  
 った。終日世子の樂器を借りて、演奏して遊んだ。グリムとの交情は、初めは斯の  
 やうに睦しかつたが、終りに行くと、どんなに可憐しいものになつたか、それは、だんだ  
 んに話をする。

巴里に歸つて來ると、嬉しい消息に接した。デドロオが監獄を出て、その監視中  
 はヴンサンヌ城と、その公園を住居とし、友人に面會することも許されたといふこ  
 とであつた。と聞いたその瞬間に、其處まで一足飛びに行かれぬのが、どんなに齒  
 痒かつたであらう！ 二三日は、デバン夫人の方に退引ならぬ用があつて、その爲  
 に足を停められてゐるのが、三四世紀も經て行く心地であつた。が、到頭思ひ切つ  
 て友の胸に飛び附くことが出來た。その瞬間の心持ちは、彼の傍にダランベ



ルとサント・シヤペル Sainte-Chapelle の會計係が一緒に居合はせた。けれども私の眼に這入つたのは、デドロオだけであつた。私は唯一歩に進み寄つて、呀と言つたきりて、自分の顔を向うの顔にびつたり膠着けたまゝ、一言も口を利かないで轟と抱き著いて、涙と嘆息に物を言はせるばかりであつた。愛情と悦喜で彼の呼吸を窒めて了つた。その私の腕を解いて、何を彼がするかと思ふと、僧侶の方を顧阿いて、恚ういふのであつた。

「見給へ。僕は這麼にまでして友人に愛されるのだ。」

この言葉は、確かに自分の利益になる積りて言つたに違ひない。が、その時は私の胸が一杯になつてゐたから、彼に那樣量見があらうとは思はれやうがなかつた。併し時が経つて段々考へて行く中に、若し自分がデドロオの位置に在つたら、眞最初から這麼考が浮ぶてあらうとは奈何しても思へなかつた。

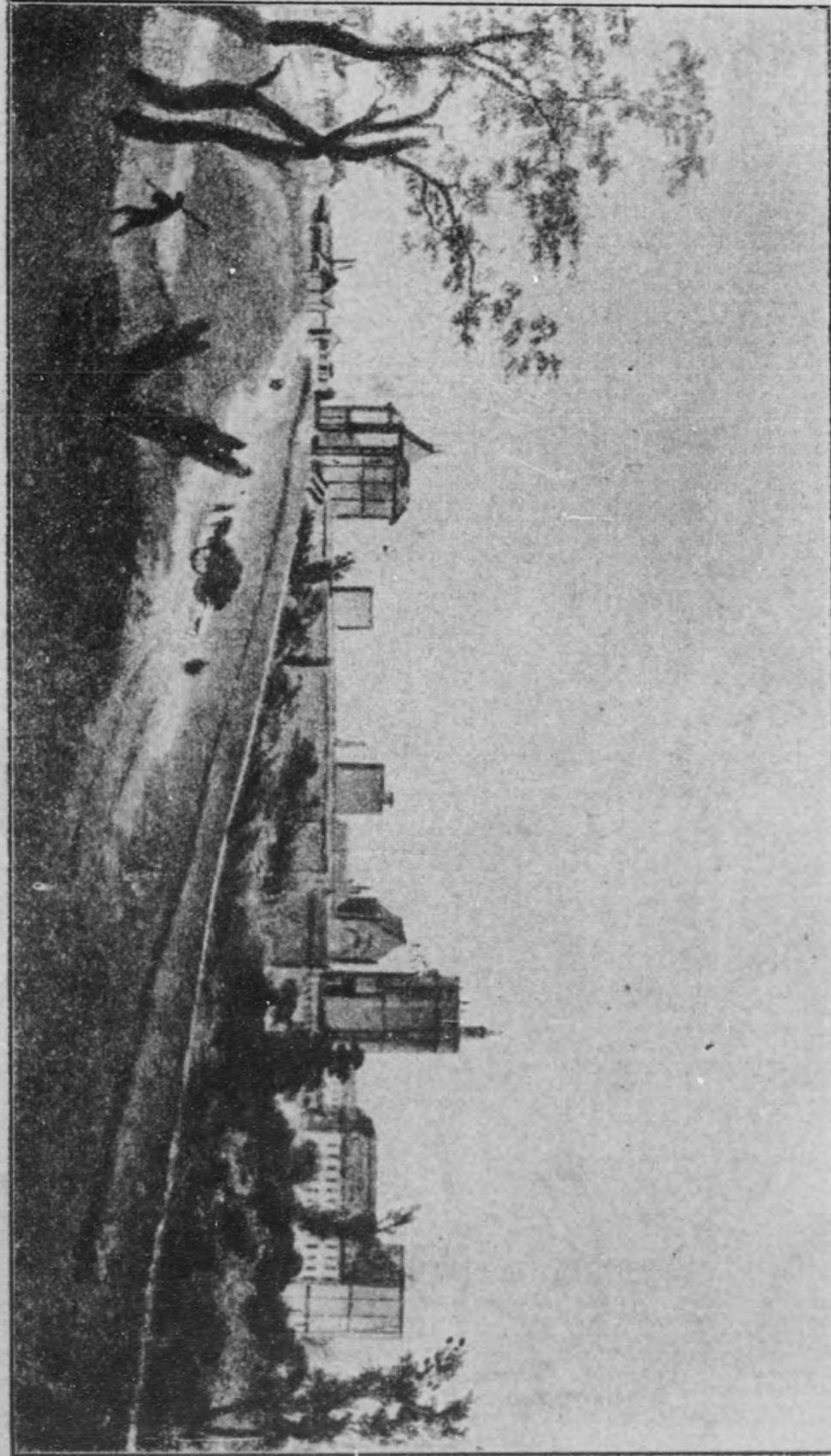
私は彼の容子から、最早幽囚の悲哀に堪へがなくなつてゐるやうに察せられた。牢獄裡の印象は、彼に取つて悚然たるものであつた。だから彼は既うヴンサンヌ城内に心置きなく起臥することが出来、鐵壁さへ取り繞らさぬ公園の中を、思ひの

儘に悠遊することが出来る身となつてゐながらも、鬱悒の生活に疲れ果てて、早く親友知己との社交を樂みたいと、其ばかり渴望してゐた。彼の苦痛を最も切に分たうとする者は私であるから、自分だけはどうしても顔を見せて慰めて遣らなければならぬやうな氣がした。爲事が取り混んでゐて忙しいのも構はず、遅くも二日毎には、自分一人で行くか、彼の妻を伴れて行くかして、それで半日を語り暮らすやうにしてゐた。

此の一七四九年の夏は、暑さが殊に劇しかつた。巴里からヴンサンヌは二リッウ(計二里)の路程としてある。今の私の生活は、馬車にばかり乗ることを許さないから、午後の二時といふ頃に、自分一人の時は、いつも徒歩で息急き歩いた。道傍に並木もあるけれど、それは皆その邊の習はして、枝といふ枝を刈り込んで了つてゐるから、蔭がない。暑熱に責められる息迫しくはなる、一步も進むことが出来ないで、道のまゝ地面に倒れたことも一度二度でなかつた。で、幾らか歩調も緩くする氣で、道道何か讀みながら行くことにした。何日であつたか、メルキ、ウルド、フランス Le Mercure de France を讀みながら歩いてゐる中に、偶と目に觸れたのは、デジンのア

1749(38)

カデミーから出してゐる次年度の懸賞論題で、科學及び文藝の發達が道德上に及ぼす效果如何 *Si le progrès des sciences et des arts a contribué à corrompre ou à épurer les mœurs*、といふのであつた譯者云。「メルキウ・ド・フランス」は一六七二年に巴里の文士、ドノオ・ド・ヴィゼ Donneau de Visé が創刊した文藝新聞で、今日在るもの、前身。是を讀み下した瞬間に、新しい世界が眼前へ展げて來て、全く別な人間のやうになつて了つた。その折に得た印象は、未だ生々しい追憶となつて残つてゐるけれど、マルゼルブ氏へ出した四通の手紙のうちで、既うその委曲の消息を洩らしてからは細かいことは大方忘れて了つた。この事は自分の記憶力に關する一奇談だから、少し書いて置かうと思ふ。私が自分の記憶力を恃みにしてゐる間だけは、その記憶は役に立つが、記えてゐた事を一旦紙へ書き附けて了ふと、もうその記憶が消えて了つて、憶ひ出すさへむづかしくなる。音樂でも尙且其の通りである。樂譜を知らなかつた時分には、いろいろの歌曲を記えてゐたが、譜が讀めるやうになつてからは、先の歌曲は、どれもこれも忘れて了つた。だから、今若し好きな曲を一つ唱つて見ると言はれても、果して出来るか否か、甚だ怪しい。

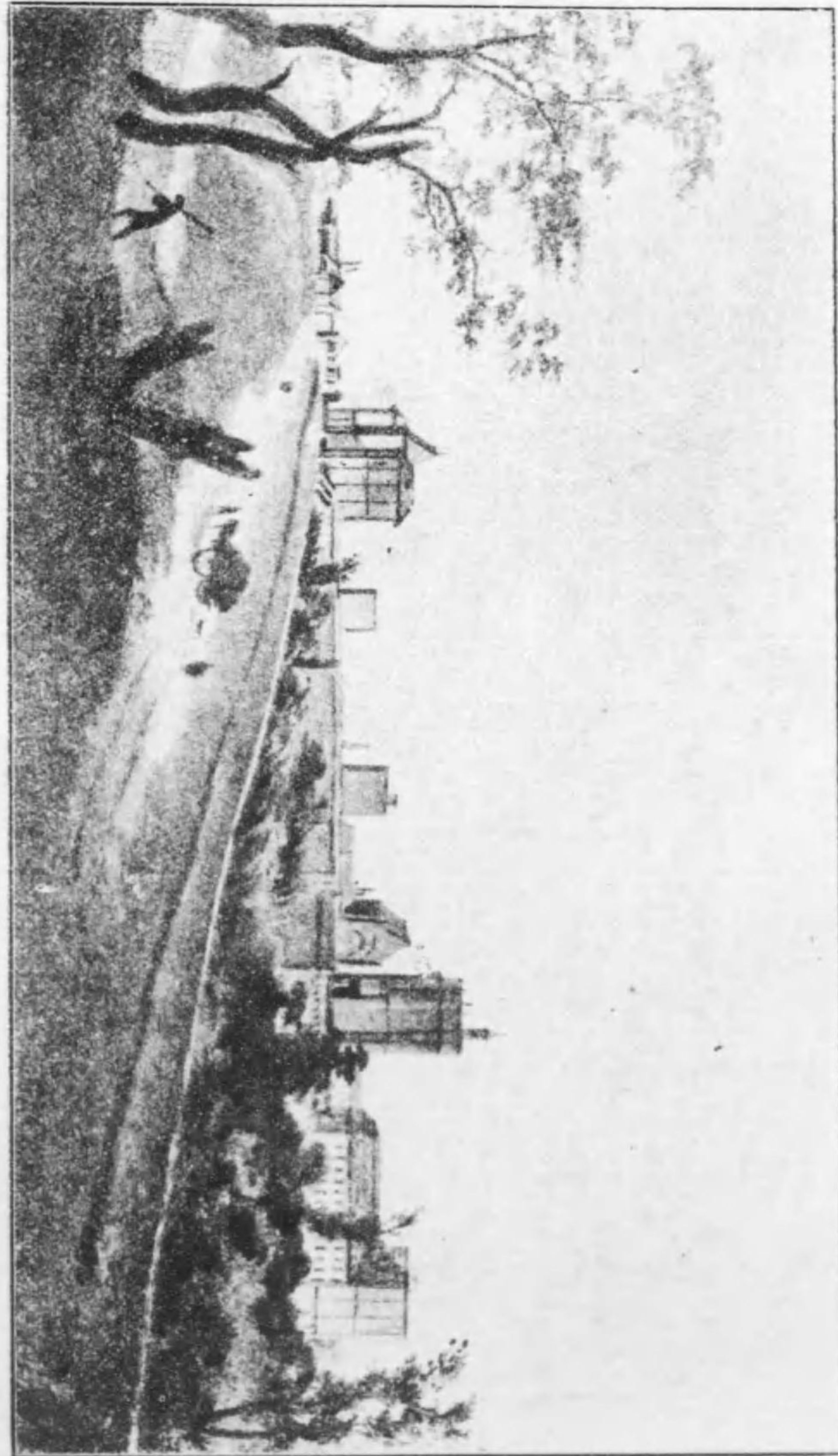


舍獄のヌンサンダ

1749(38)

カデミーから出してゐる次年度の懸賞論題で「科学及び文藝の發達が道德上に及ぼす效果如何」(Le progrès des sciences et des arts a contribué à corrompre ou à épurer les mœurs)といふのであつた譯者云。「メルキッポドフランス」は一六七二年に巴里の文士、ドノオド・ヴィゼ Donneau de Vige が創刊した文藝新聞で、今日在るもの、前身。

是を読み下した瞬間に、新しい世界が眼前へ展けて來て、全く別な人間のやうになつて了つた。その折に得た印象は、未だ生々しい追懐となつて残つてゐるけれど、マルゼルブ氏へ出した四通の手紙のうちで、既うその委曲の消息を洩らしてからは、細かいことは大方忘れて了つた。この事は自分の記憶力に關する一奇談だから、少し書いて置かうと思ふ。私が自分の記憶力を恃みにしてゐる間だけは、その記憶は役に立つが、記えてゐた事を一旦紙へ書き附けて了ふと、もうその記憶が消えて了つて、憶ひ出すさへむづかしくなる。音樂でも尙且其の通りである。樂譜を知らなかつた時分には、いろいろの歌曲を記えてゐたが、譜が讀めるやうになつてからは、先の歌曲は、どれもこれも忘れて了つた。だから今若し好きな曲を一つ唱つて見ろと言はれても、果して出来るか否か、甚だ怪しい。



舍獄のマンサング

此の場合の事で、今もはつきり記憶に残つてゐるのは、ヴンサンヌへ著いた時に、  
 譎妄症に近いほどの苛苛した心の状態に在つたことだけである。デドロオはその  
 れを看抜いた。私は譯を話して、然うして櫛の樹の下で即興的に鉛筆で書き附け  
 た「フアブリウス寓言 Proseropée de Fabrius」を讀み聽かせた(譯者云。これは感激の餘に  
 成つたごく短い美文で、彼の「科學藝術論 Discours sur les sciences et les arts」の中に這入つ  
 てゐる)。この計畫を實行して重賞を目蒐けて見ても、奈何かと言つて、無暗と懲慝  
 め立てた。私はその言葉に従つた。がそれと同時に私は取返し、の附かぬ身とな  
 った。私の後半生に於いて、荐りに不虞に襲はれるやうになつたのは、此の際の迷  
 誤から生じた避くべからざる結果であつた。

私の情熱は料り難いほどの速さで、丁度自分の考想と同じ高度まで昇り詰めた。  
 眞實と、自由と、正義とに對する熱情は、他の有りとある小さい情緒を悉く壓迫して  
 了つた。殊にこの感激が、この後四五年の間、他人の心の經驗には、ためしもあるま  
 いと思はれる位の力で、私の心界に脈脈と動き續けたのは、全く自分にも驚かれる。  
 この論文を書くには、大きに他と異つた方法を探つた。それは、他の著作の時

1749(38)

も尙且同じ事だが、毎晩眠られぬ時間に限つて、それを書くことにしたのである。寢床に這入つて、眼を瞑つては静と考へを凝らして、そして頭の中で幾回となく句節の推敲に血を搾るやうな思ひをした。まづ是で可しと思ふ處まで消ぎ著けると、其を頭の中に蓄へて置いて、紙に蒞む時を待つ。けれども朝床を離れて著物を衣替へるといふ時になると、前晚苦んだ結果は些とも残つてゐない。いよいよ紙を展べて見ても、殆んど何物も浮んで來ぬ。テレエズの母親に筆記させようと思ひ立つて、娘や亭主と一緒に、彼女を自分の傍近く住居させることにした。傭人の代りに、母親は毎朝出掛けて來て、火を拵へたり勝手の手を辨じてくれた。其女が來ると、寢床の中から、昨夜の勞作の結果を書き取らせた。長いこと然ういふ工合にやつて行つて、お蔭で大分物忘れが救かつた。

論文が書き上がったので、デドロオに見せた。彼は満足の體で、唯二三の修正を試みただけであつた。この論文には、熱と力はあるながら、論理が全く立たず、脈絡が通じてゐなかつた。凡そ私の書いた物の中で、この文章ぐらゐ推論の弱い、内容の貧しい、諧調の拙なものはない。併し思つて見れば、天性甚麼才能のある人でも、

1749(38)

文章を書くことばかりは、然う無造作に學び得られるものでない譯者云。この論文には文學、藝術、科學等一切の文明の産物は、畢竟生活状態を敗壞する原因で同時に證左であるといふことを、大膽に雄辯に説破してある。初めグンサンヌでデドロオに相談した時、デドロオが、他の應募者は必と文化に謳歌してその功德を頌へるに極まつてゐるから、君も御多分に洩れぬ流俗の雷同者となつて、肯定的に議論を出して行つたのでは、成功は覺束なからう。一番此處は裏を行つて、文明否定論を書いて見れば、奈何だと言ふので、ルソオもつひその氣になつて、然ういふ論を立てるやうになつたといふ説がある。

その他の人達には誰にも話さずに、原稿を送つた。併しグリュムにだけは何うも私から話したやうに思ふ。彼がフリエズ伯爵の邸内に住むやうになつてからは、私との間が極めて親密であつたから。彼の處にあつた一臺のクラヴサンが、私達の媒介となつた譯で、閑な時には何時でもその傍で遊び暮した。伊太利亞咏嘆調や、權歌などを、朝から晩まで、間斷なく唱ひ續けた。若し私がデパン夫人の内に居ないことがあれば、其の時は必とグリュムの處か、然もなければグリュムと連れて

散歩か観劇に出かけて行つてゐる時であつた。コメディイタリエンヌ Comédie Italienne はグリムの嫌ひな座であつたから、私は其の座の特許票を持つてゐなければ、其座へ行くのは廢して、金は拂つても、彼の好きなコメディイフランセエズ Comédie Française、即ちテアトルフランセエ (Théâtre français) の方へ一緒に行くことにした。と斯く此の青年には力強く牽きつけられて、離れ難いものになつて了つた。其が爲に哀むべき小母さん——私の生涯を通して、何時の時にも疎かに思つたことのない彼女すら、多少忘れられ氣味になるくらゐであつた。

自分とテレエズだけで、一つの家庭を作りた。さういふ希望が以前から私にあつた上に、少ししかない餘暇を、自分の好む方へ充てるのが難しくなつて來たので、彼の希望が前よりは一層熱度を増して來た。併し、テレエズには多勢の家族といふ煩累があり、殊に世帯道具を買ひ調へる第一金が缺乏してゐたために、今までは静と堪へてゐたのであつた。今、その希望が達せられるやうな機會が來た。

1749(38)

1749(38)

フランキウエ氏とデパン夫人が、折好くも斯う考へてくれた。一年に入百や九百フラン(約計三百乃至三百五十圓)の収入では、とても不足は知れてゐると言ふので、自分達の發意で、俸給を一年五十ルイ(約計五百圓)まで昇してくれた。尙だ其の上デパン夫人は、私が家具を調へたい希望を察して、それに就いても幾分の助力をしてくれた。是迄テレエズの方にあつた道具類も一緒に合併して、筋の分つた人達の住んでゐるグルネル・サントノレ Greulle-Saint-Honoré 町のラングドック Langue-doo 館で、小一室を借り受け、此處で自分達の氣に入るやうな生活の準備をした。そして此處で七年間、物靜かにのんびりとした心持になつて暮して來たその七年目に、私は「仙居」の方へ引き移るやうになつた。

テレエズの老父は大分のお人よしとして、ひどく自分の女房を畏れて、其女に、監視總監といふ綽號を附けてゐた。後にグリムがテレエズを冗談に、監視總監と呼ぶやうになつたのも、是から始まつたのである。テレエズの母親は口の旨ひ女であつた。上流社會の風俗、交際振りなども氣取つてゐた。しかし彼女には妙に阿諛の癖があつて、自分の娘にも、私の前だけ取り繕ふやうにと、甚だ不

1749(38)

利益な誠めを與へたり、私の友達の一人一人に對して、私はじめ其處に居合はさぬ他の友達を貶すつもりで、盛んに佞辯をつかつた。それが私には堪らなく可厭に感じられた。然ういふ事さへなければ、特に不都合な母親といふ程のこともなく、また良い母親と言はれた方が自分の利益にもなる道理であつたのであるから、たとへ娘に過失はあつても、それは成るだけ隠すやうにしてゐた。この母親の事に就いては、私も一方ならず氣を配つて、何卒自分を大切にさせるやうにと、種種な附け届も怠らずして來たけれど、どうも思ふ通りに行かないのが、此の私の小家庭の唯一つの懸念となつて残つた。その外には別には是と言つて、この六七年間の家庭の和樂を傷けるやうなこともなく、弱い人間に相應はしい其の享樂を肆にしたといふことが言ひ得られる。

テレエズの心情は正に天使のそれであつた。住み馴れて來るままに、私との心の結びつきは彌増に強くなつて、二人は初めから斯うなるべき運命を持つて生れて來たのだといふ感じが、日毎に高まつて行つた。其の間の享樂と言つたやうなものを書き立てて見たところ、單純極まることばかりだから、唯笑ひ種になるば

1749(38)

からだらうと思ふ。郊外の散歩なら、何處かの懸茶屋へ腰掛けて、大枚十ヌウばかりの散財でもするとか。小晚餐會といふ譯で、窓口一杯の大靴の上へ、小い腰掛を二脚列べて、二人が差し向ひて樂むとか。この場合には窓が即ち食卓の代用になる。其處から新しい風を通し、眼の前の光景や、道行く人の羣を眺め入つてゐた。實はこの旅館の四階に住んでゐるのであつたが、それでも物を喰ひながら、町を瞰下すに差間はなかつた。食卓に陳ぶ物は、四つ切の麴包が一片、櫻實が少許、乾酪の小片、それに二人して飲んで、葡萄酒がたつた半ステエPoirier、約一升二合。これだけの晚餐がどのくらゐ味の深いものであつたかといふことは、書くことも出來ず、想像することも難しい。隔てなく暴露して、打ち解け切つた心と心の柔かな結び付き！斯うした藥味があるのだもの、甚麼晚餐だつて旨いのは當然である。斯うして私達は其處に靜と据わつたまま、内の家婦が知らしてでもくれないと、時の経つことを些とも知らずに、夜を更かすことも度度であつた。もう這麼細かい話は罷めにしよう。面白くもなく、嗤はれるばかりだ。何時も私が言つた通り、享樂の眞の味は、到底書き現されるものでない。

丁度この時分の事であつた。野卑な快樂に復た手を出した。しかし是がもう心に咎められるやうなこの種の行爲の最後のものではあつた。クルップエル牧師は好きな人であつたといふことは前にも出た。この人との交情も、グリムと同じやうに終にはやはり隔意なくなつて、二人でよく私の處へ飯を喰ひに来た。響應は粗末であつたが、クルップエルは剽軽な面白い事を立て續けに喋るし、グリムは又未だその時分は練語家てなかつたから、彼一流の可笑しな獨逸訛りを振り廻して、食事の外の愉快を付け加へた。この遊食會では、肉慾が幅を利かすやうなことはなかつた。その代りに清らかな歡娛が吾儕の間に交換されて、何時まで経つても、離れともない氣がした。クルップエルは一人の若い女を圍つて置いた。けれどもその女を、クルップエル一人では世話し兼ねてゐて、畢竟は誰の慰み物にてもなるといふ状態であつた。偶とした夕方、私達が行きつけのカフェエへ這入つて行かうとする、入れ違ひにクルップエルが女を連れて夕飯を喰ひに行かうとするのと額合せをした。私達は彼に調戲つてやつた。すると彼は、そんなら僕達と一緒に跟いて來給へといふやうなことになつて、同じ食卓へ私達をも引つ張つて行つて、そして正反に體

1749(38)

1749(38)

よく私達を愚弄り散らした。その哀れな女は、無邪氣で溫柔しさうで、決して那樣商賣なんぞ好んでする者とも思はれなかつたけれど、抱への、惡婆の仕込みで、那樣者に爲上げて了つたのであつた。どうせお定りの話の上に、酒が手傳つて、つひ有頂天に前後を忘れて了つた。正直なクルップエルは、自分の饗りを半分で廢しては、客に濟まぬと思つて皆替りばんこに次の部屋へ行つてくれと勧めた。グリムは、この娘には決して手出しをしなかつたといふことを、その後絶えず廣言してゐた。何故それでは那の部屋からもつと速く出て來なかつたのだと言ふと、あれはあゝして此方の部屋に居る連中に氣を揉ませて、陰で舌を出してゐるためであつたのだと言ふのであつた。て、縦し其の時は彼自分の言ふとほり、潔白は潔白であつたにしても、それは彼の謹直からであつたとはどうしても思へない。何故と言つて、フリエエズ伯の邸内に住み込むやうになるすぐ前までは、その同じサン・ロウクのSaint-Roch區内の白粉臭い家に宿を借りてゐたからであつたものを。

此の娘の住んでゐるモアノオ Moineaux 町を出た時は、丁度サン・ブルウ(前篇二二頁が爛醉させられた家を出て來た時と同じ位、自分の羞恥心は傷められてゐた。



1749(38)

だから私がサンブルウの物語を書いた時には、自分の閱歴が、丁度眼の前へ浮び出るやうに想はれた。テレエズは私の素振から、殊に私が心に咎められてそはそはしてゐたのを見て、それと看破いた。私は早速心の重荷を卸すために、有つた儘を正直に彼女に自白した。この自白を早くして了つたのは、寔に都合よかつた。といふのは、其の次の朝、グリムがさも勝利を獲たといつた風に私の處へ乗り込んで来て、昨夜の私の所業に輪を懸けてテレエズに話をした。其から後といへども、彼は折に觸れてこの時の事を意地わるく話し出しては、忘れて了つてゐるテレエズに、由ない記憶を新たにさせるのであつた。グリムには何の隔意もなく、一切の祕密を打ち明けてゐたのだから、彼も當然の義務として、私の信頼に負かぬやうにすべき筈だ。それを反つて裏切したのであるから、今度のことでは私よりも一層罪は重いとせねばならぬ。それに引き換へてテレエズの心の鷹揚さは、この時ぐらゐの際立つて私の心に映つたことはなかつた。私の不貞操を責めるよりも、グリムの不信用を憎んで、私には唯しつとりと物優しい怨みの言葉を述べたばかり、少しも憤激したやうな容子は見せなかつた。

1749(38)

心情の鷹揚であると同時に、彼女の知識の單純なことも太甚しい。と言つて了へばそれ迄であるが、一つ話して見たい例話が茲にある。クルップエルといふ人は宣教師で、又、ザクセンゴオタの世子に仕へる宮中牧師であるといふことを彼女に話した。牧師と聞いて彼女は特別な人と思つたらしく、まるで不釣合な想像を描いて、滑稽にもクルップエルを羅馬法皇のことと信じて了つた。私が或るとき家へ這入つて來ると、彼女が私に、先刻法皇様が訪ねて見えましたと言ふから、氣でも違つたのかと思つた。譯を聞いて初めて解つたから、すぐその足で引つ返して、グリムとクルップエルにこの話をしに行つた。法皇といふ綽號は其の時からクルップエルの有になつて了つた。それと一緒に私達は、モアノオ町の女にも法皇妃ジャンヌ Joanne の名を奉つた。これが永久に笑ひの種になつて、みんなは轉げまはつた。私の名を籍りて偽手紙を拵へて、その中に生涯の中で私の笑つたことは、二度しかないといふやうな事を書いた人達は、此の頃なり、私の若い時分のことをよく知らなかつたのである。てなければ、那樣ことがどうしても頭に浮んで來るわががない(譯者云、偽手紙の一件は、第十二卷の末、ルソオ晩年の記事に出る)。

翌くる一七五〇年になつて、今まで悉皆忘れてゐたデジョンへ提出の論文が當選したといふことを聞き知つた。この報知は最初その論文を提出すべく唆かされたすべての考想を目醒した。その考想にいきいきとした生氣を興へた。そして終には、亡き父や、わが祖國や、さてはブルウタルコスなどに養成された酵母——偉いなる者、力ある者といふ意味の酵母を、一時に私の心の中で醗酵させた。厚利の上に、又世論の上に超然と立つて、自由に、大膽に、自己の行く道に猛進する、然ういつた態度ぐらゐ、勇ましく、美しいものは、又あるまいといふ氣になつた。でも初めの間は、女々しい怯懦と非難の虞れとに礙げられて、すぐにその考想を實行し、當代人の主義に對して戰を挑むといふまでの決心はし兼ねたけれど、その折から屹と心の内に覺悟する所が出来た。その實行を遅れさせたのは、反對意見の盛んに起つて來るのを待つて、自分の考想に一層の刺撃を受けさせ、それて立派に勝利者となり果せようといふ心があつたからだ。

人類の責務などといふ空疎な考想に耽つてゐる間に、まづ私自身の本務を考へ

1750(39)-1752(41)

させるやうな事件が起つて來た。テレエズが是で三度目の妊娠をしたのである。餘りに自己に忠な餘りに標置の高い私は、自分の行爲で自分の主義を破ることは出来ぬ。自然や、正義や、理性や、又はその創造者と倅しく純真で、神聖で、永遠な宗教や、——然ういふものの法則に依つて、子供等の前途と、母と自分との關係を思ひまはした。宗教などといふものも、人間の手に發達させようとしては墮落させるばかり、煩瑣き信條や教理で絡み附けて唯言葉の宗教に引き落して了つた。不可能の註文ばかり、聒しいけれど、さてそれを實踐しようといふ考のない人に取つては、註文だけするのは何の骨折にも當らぬからであらう。

縦し私の下した結論が誤つてゐたにしろ、私が從容としてその結論の命ずる所に従つたのは異とせねばならぬ。若し私が不幸にして柔かな自然の聲の耳に通じない、そして惻隱の情の心に萌さないやうな人と生れ合はせたのならば、かくまての沒情漢となつたところで當然のことと謂はねばならぬ。それに實際は奈何か。燃えるやうな心情、きびきびした敏感當對を求めて已まぬ力強い愛著心、その愛著を斷たねばならぬ時の言ひ知れぬ悲痛な感じ、目下のものに對する哀憐の情

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

偉大や眞善美の熱愛、一切の惡に對する畏怖心、憎惡や殘害は勿論、他を殘害しようと思ふことすら出來ぬ性格、あらゆる道徳的な寛裕な、可憐なものを觀た時に熾んに起る可憐しい感激——然う言つたやうなものを兼具してゐる此の心の中へ、有らうことか、無上の懐しみある人間の義務を、何の容赦もなく蹂躪せざるやうな淺ましい量見が喰ひ入らうとは思ひがけぬことではないか？ 實に有り得べからざることと謂はねばならぬ。このジ・ジ・ジは、生涯いづれの時といへども、決して無神經な人間、非人情な父となるに忍びなかつた。どんなに間違つたところで、決して酷薄な人間になる氣づかひはなかつたのである。私が如彼いふ處置をしたについて、強ひて言へば相當な理由もないではない。然し然ういふ理由のためには、私が誤られたのであるから、その理由を明かに示すのは、とりも直さず他人をも誤らしめる所以であらう。年若なわが讀者たちをして、また更に私の轍を履んで、同じ過ちを繰り返させることは私の望まぬ所である。て、今は唯是だけの事を言ふに留めて置かう。テレエズと私との關係は、縦しその中に自由な、放逸な分子が混つてゐるにしても、とにかく清淨な、神聖なものだ。私が彼女を信ずることは、

1750(39)-1752(41)

それが續かむ限り、當然の義務といふものだ。唯一度彼女の不信を買ふやうなことをしたのすら、眞正の姦通罪でも犯したやうな氣がしてならなかつた。子供等のことに就いても、その養育費に手詰つたがために、育兒院へ投り込んで了つて、行末は冒険家だの、山師などになつてくれるよりも、職工か百姓でもよいから、然うした種類の人間に仕上げて貰はうと思つたのは、市民たり父たる自分の義務を果した譯であり、而も自分はこれでこそプラトオン Platon の共和國中の一員となり得る理窟だ。と慥ういふ風に考へたのが、そもそも過ちであつたのだ。それから後、一度ならず悔恨の情は、その考の間違つてゐたことを、しみじみ私に諭すのであつたが、理性は尙且それと反對で、然うは言はなかつた。如彼いふ風に子供等の處置をつけたために、父と同じ運命に陥る虞もなくなり、一朝私が切迫詰まつて、彼等を路傍に遺棄するやうな、可怖しい目に遭はされる心配もなくなつたのだから、此の點から、時をり心の中で天に向つて感謝することを禁じなかつた。エビネエ夫人や、リクサンブル夫人も、友情から、雅量から、乃至その他の動機から、然ういふ事をなさる程なら、私共の方で、お子さん達の世話ぐらゐ何時でも引き受けてして上げ

ますのにと言つてはくれたけれど、然うして貰つた所で、それで子供等は果してより以上幸福な者になれたであらうか？ 少くとも、より以上律義な人間になれたであらうか？ 其はどうか知らぬけれど、若し彼女達の手に渡つた時には、必と双親を怨みのあまり、復讐でもするやうな者に育て上げられたことは、眼に観えてゐた。それから見ると、全く雙親の顔を見ず知らずで終はつたのは、どの位優してゐたか知れぬ。

然ういふ譯で三番目の子供も、初めの二人のやうに育兒院に入れて了つた。その次に出来た二人の子供もやはり同じ様な處置をした。私は皆で子供が五人あつた。自分ではこれを理にかなひ、法にもかなつた大出来な處置と思つてゐたが、その子供等の母の思はくを兼ねて、餘り大きな聲で自慢をして廻らなかつた。けれども、懇意な人達にだけは、その話をした。デドロオにグリム、少ししてからエビネエ夫人、また少ししてからリクサンブル夫人などに此の話をした。廻られて話した譯でなく、澹泊に自分から打ち明けたのである。グアンといふ産婆は正直な謹み深い十分信用の出来る女であつたから、此の女の口から世間へ噂を立て

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

られる心配はなかつた。唯打ち明けて話をするに少し心の置かれたのは、テレエズが一度難産で惱んだ時に手術をして貰つた、チエリイTheryといふ醫者だけであつた。一言で言へば、私の行爲には、些し陰翳はなかつた。これは私が何事も友人には裏み隠さないためばかりでなく、眞實その事に何の害も認めなかつたからでもある。いろいろ思案を爲抜いた末子供等に取つて最上の方法——少くとも自分で最上と信じた道を選んだわけである。私も實はこの子供等と同じ風に養育してもらひたかつたと、そればかり残念に思つてゐる。

斯うした内證話を他にしてみると、一方ではテレエズの母親も、一向斟酌なしに内輪の事を話してまはつた。私が母親とテレエズを、デッパン夫人の處へ伴れて行つて紹介したときには、夫人は私との關係から、二女にも限りなく目をかけた。母親は娘の秘密をすつかり夫人に打ち明けて喋つた。それに母親は、碌に収入も無いこの私が、一生懸命になつて不自由をさせまいと、精精と仕送りをしてゐる義理も忘れて、夫人に私の心盡しを話さなかつたために、もとより優しく慈愛に富んだ夫人のことで、惜し氣もなくいろいろな物を施して遣つた。それを母親がテレエズ

1750(39)-1752(41)

に口止めをして置いたものか、私が巴里に居る間は、テレエズから一言もその話は聴かなかつた。ところが「仙居」の方へ引き移つてから、外の種々な打明け話をする序でに始めてそれを聞き知つた。デッパン夫人の何も知らぬらしい顔色から推察すると、果して私の身の上に起つた事を、母親から篤と聴かされたのかどうか疑はしくも思はれた。夫人の息子の細君、シノンソオ Chenonceaux 夫人も、やはり同じ容子に見えた。唯フランキエ夫人だけは、確かに詳しい事を聴いてゐて、しかも黙つてゐることが出来なかつた。翌年私が既うその邸を出て了つた時に、その事を彼女から聴いた。そこで私はこの件に就いて彼女に手紙を書いて、言つて差間のない限り、子供等の處置法に對する理由を擧げた。但しその理由の最も主要なものといへば、テレエズの母親とその家族に在るのだから、それを書き立てるのも殺生と思つてそれだけは廢して置いた(譯者云。「理由の最も主要なものは、ルソオの『靜思錄 Réveries du promeneur solitaire』に據ると、斯う書いてある。「自分をして茲に至らしめたのは、全く子供等の運命の如何に慘憺たるべきかに念到し、そして之を極はうにも、他に求むべき途に盡き果てたからである。」)わが手盥に掛けて育て

1750(39)-1752(41)

ることのならぬ身分の悲しさは、誰かに頼んで養育させるより爲方もあるまいが、彼等の母の手に懸ければ落ちぶれの憂さ目を見るばかり、母の外家に預ければ碌でなしに仕あげられることは極まつてゐる。然ら思ふと今でも身の毛が竦立つやうである。

デッパン夫人は用心深い人、シノンソオ夫人は友誼に篤い人で、私は安心してゐられた。フランキエ夫人も同じ様に信じてゐたが此の人は私の秘密が世間に知れる餘程前に世を去つた。その秘密の暴露も、直接に私から話した人達の口から起つたことで、しかもそれは私とその人達との間に不和が生じて後の事であつた。此の單なる出來事では私を斯う判断した。自分で招いた不名譽を辯解しないで、彼等の惡意から生み出した不名譽を被せられることを恥としてゐると。私の過失は小さくないが、要するに一個の過失に過ぎぬ。私は義務を懈つたが決して惡意があつてしたことではない。未だ見ぬ子供等に對する愛情は、世間一般の父よりもずつと深かつた。然し、友誼に背き、神聖な契約を踏併し、打ち明けた秘密を洩らし、欺かれた友——彼等の仲間を脱けて出てからも、尙且私は敬意を失はなかつ

た——其の友を面白さうに侮辱することはこれは過失とは言へまい。品性の卑しい大不徳漢のすることでないか。

私は自己を懺悔するとは約束したが、決して自己をジャスチファイしようとは思はなかつた。だから、この話はもうこれだけで廢す。私は眞を偽りさへしななければそれでよい。公平な判断は讀者の方の義務である。其以上を讀者に望まうと思つてゐない。

シノンソオ氏が結婚してからは、其の母の邸も年若な可愛らしい花嫁の藝能と伶俐として一層愉快になつて來た。デッパン氏の書記の中で、特に私に眼をかけてくれたのは、この新夫人であつた。新夫人はロオシ、シリアル Footleehouat 子爵夫人の一人娘で、子爵夫人がフリーエズ伯と懇意であつたところから、グリムも亦懇意になり、尋常ならず彼女に傾倒してゐた。しかしグリムを新夫人の處へ案内したのは私であつた。ところが、グリムと新夫人とは氣質が合はなくて、間もなく交際は破れて了つた。その頃から自分を引き立ててくれるやうな人ばかり探してゐたグリムは、娘よりも母の方へ靡いて行つた。娘夫人の求める友人は、何等の野心も

750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

ない、富豪から利益を吸取るなどの魂膽も持たない、手堅い一方の人間をといふ註文であつたが、母夫人はそれと異つて交際界の立者になつてゐたからであつた。

新夫人は姑が豫期したと同じやうな心の傾向を持つてゐなかつた。然うした姑のある邸が彼女には面白くなつて了つた。併し彼女には優れた才能がある上に、外家の良い所から幾らか氣位も高くなり、自分の柄にもない勤めをする。りはと思つて、楽しい社交仲間を避けて、唯獨り一室の中に引き籠るやうになつた。不幸な人に同情を禁ぜぬのは私の天性で、新夫人が流竄のやうな境遇に居るのを見ては、可憐さが嵩じずにゐなかつた。彼女の心意は哲學的若しくは思索的ともいふべき、そして時には詭辯的な分子を交へたものであつた。對話の練れてゐることはなかなか修道院をぼつと出たばかりの、生若い女達の眞似も出來ないくらゐであつた。それであつた。未だ二十歳に届かなかつた。私が牽きつけられたのも無理でないと思ふ。色は人の眼を眩すほどに透きとほつて、少し自分で氣をつけて取り繕へば、あの佳い恰好に娉婷とした立姿といふものは又とあるものではない。心もち灰がかつたブロードの髪的光澤の善さに、思はず我が哀むべき母の

1750(39)-7550(41)

妙齡のそれを胸に描いて、時ならぬ鼓動を急くした。併し、私は丁度この頃自分で厳格な主義を立てて、如何なる場合でもそれに戻るやうな所業はすまいと決心してゐたので、彼女と其の魅力とは、私に何の危険をも及ぼさなかつた。ずつと一夏を通して日に三四時間づつも差し向ひて、算術を教へると言つて、巨多彼女を困らせたこともあつたが、其の時なぞも厳格一點張りて、一語でも生やさしいやうなことは言はず、秋波を送るやうなことも決してしなかつた。これが五六年も後であつたら、這麼莫迦莫迦しい分別をする迄もなかつたであらうが、何しろ生涯に唯一度より戀をしてはならぬ、その外の女は、その場限りで見放して、了はねばならぬ、といふことが、其の時の主義となつてゐたのであつた。

ヂッパン夫人の邸内に住み込むやうになつてからは、常も自分の位置に安んじて、決して其以上良い身分になることを望まなかつた。夫人がフランキウ氏と相談して、私の俸給を上げてくれたのも、單にその人達自身の腹から出たことであつた。フランキウ氏が日増しに私を信用するやうになつた折から、丁度今年になつて、現在よりももつと餘裕のあり、もつと安心な位置に引き立てることを考へて

1750(39)-1752(41)

くれた。彼は大藏省の理財局長であつた。その下に使はれてゐた出納吏のヂッドアイエ Dudoyer 氏が、齡も取り金も溜つて、もう退職したいと言つてゐる時であつた。フランキウ氏はこの位置を私に與へようと言ふのであつた。て、其の方の勤務に必要な資格を作るために、數週間老人の家へ心得方を教はりに通つた。其はよかつたけれど、もともと柄にない職務であつたか、或はヂッドアイエ氏には、別に心當りの候補者が出来てゐた様子で、其ゆゑ餘り深切に教へてくれなかつたからか、どちらにしても、抄抄しく、完全に教はることが出来なかつた。會計法の事なども、態と企んで難解しく説いたものと見えて、どうしても私の頭へ這入らなかつた。那樣事で全斑の知識を習得することは出来なかつたけれど、日日の執務に差間を感ぜぬ程度で、一通りの事は學び得た。それだけで私は新しい爲事を始めた。現金出納簿や、金庫を保管し、現金と領收證を受け渡しすることになつた。斯ういふ方には、技倆もなければ、趣味もない私であつたが、年の功で段段眞面目になつて來て、氣儘を言はずに一生懸命職務に盡す覺悟になつた。少し爲事に慣れて來たと思つた時、生憎フランキウ氏が旅行に出たので、不在中は私一人て金庫を監督せ

ねばならぬことになつた。金庫の金は僅か二萬五千か三萬フラン(約計一萬乃至一萬二千圓)しかなかつたが、それが私には堪へられぬほどの重荷になつた。とても出納吏などの勤まる柄でないといふことが、熱熱感じられた。彼が歸つて來ると、すぐ病床の人になつたのも、全く不在中に氣を遣ひ過ぎたからであつたに違ひない。

この本の始めの方に、自分が生れた時は半死人のやうであつたといふことを言つた。膀胱に異狀があつて、少年の頃は絶えず尿閉に悩まされ、養育に劬勞した小母のシッポンが、その爲にどの位心配をしたか知れなかつた。しかし小母の心盡しも無効にはならないで、強壯な體格は、到頭凱歌を揚げた。前に話した様に一時神經衰弱に罹つたのと、少しでも熱が出ると併發する持病の膀胱加答兒がある外は、青年期を通して健康を害したことはまづなかつた。三十臺になるまでも、性來の虛弱はすつかり忘れて了つてゐた。それが久しぶりて再發したのは、ヴェネチアへ著いた時であつた。旅行の疲れと、嚴しい暑さの中てられたのとて、又膀胱に熱が差し、腰部が痛み出して、冬の初まで痊らなかつた。かのバドワ女郎に引つ繋つて

1750(39)-1752(41)

からは、生命は無いものと思つてゐたところ、不思議に何の病氣も喚び出さなかつた。又ヅリエッタについて、肉體よりも一倍精神を悩ました後は、前よりもすつと氣分がよくなつた。その内チドロオが拘禁されるといふ騒ぎになつて、その夏の炎暑をも厭はず、ヴンサンヌ下りへ幾度となく往復したために、その途中で追ひ込んだ熱が、到頭劇しい腎炎を誘ひ出して、それからもう舊の通りの健康體に回復する折がなかつた。

今度は、多分その呪ふべき金庫の番人といふ、氣の滅入るやうな爲事が障つた。是迄よりも一層重い容體に陥つて、五六週間は想像に堪へた沈衰の状態であつた。ヂッパン夫人から國手モラン Morand 氏を寄越してくれたが、老練にも似合はず、譬へやうもない疼痛を感じさせられるばかりで、消息子で検査することも出来なかつた。彼の勸告で、ダラン Darran にも診察してもらつた。今度は軟かな探石消息子がやつと這入つた。しかしモランは私の容體を診て、到底半年以上持つ見込がないといふことを、ヂッパン夫人の耳に入れた。

其の警告は亦私の耳へも這入つた。其處から私は自分の境涯に就いて眞面目

1750(39)-1752(41)



1750(39)-1752(41)

に考へて見た。あの嫌ひで嫌ひでしやうのない爲事のために、幾許もない餘生の安息と慰藉とを犠牲にして丁ぶぐらゐ思ふことはない。加旃自分の決めた厳格な主義を、何の關係もないやうな位置に適應させるといふことが、奈何して出来ようか？ 理財局の金庫番人が、無慾と貧乏の宣傳者となつて、職務を辱かしめるやうなことはなからうか？ 斯ういふ考が、非常な熱と力とで頭の中に沸騰し始めてその後は何物もこれを鎮靜させることが出来なかつた。それほど早く根を卸した。病氣が幾らか快くなつてからも、當時決心した事は十分冷靜に考へてみて、尙且そのまゝ固く守つた。私は末遠く幸運や發展の計畫をうち棄てて了つた。しばらくの餘命を、獨立と、貧困の間で過ごさうと決心した。凡俗の間に行はれる輿論の鐵鎖を切斷し、わが目の正善と認むる道に猛進して、他人の事に累はされまいために、心の力の限りを喚び起した。無数の障礙と闘ひ、無限の努力を費して、勝利者とならねばならなかつた。自分でも意外と思ふ程の成功が得られた。これ若し俗論の鐵鎖を斷切るとともに、交友の羈絆をも脱れることが出来たならば、もうそれで自分の目的は遂げられたわけになるのであつた。その通りになれば、そ

1750(39)-1752(41)

れこそ人類あつて以來、眞道德に對する最大の貢獻をした者と謂ふべきであつたかも知れぬ。それなのに私は、一方で自稱大家、自稱名士どもの牧羣から出て來る、不透明な愚論を土足にかけて蹂躙しながら、他の一方では意氣地なくも自稱親友達の言ふがままに爲るがままに屈從してゐた。私が唯獨りて新しい道を行くのが、何ぞや幸運を掴む算段でもしてゐると想つたものか、所謂親友達は妬みの餘り、寄つて聚つて私を嗤ひ者にし、しまひには名譽まで剥ぎ取る魂膽から、そろそろ輕蔑するやうな手段を採り始めた。彼等の嫉視の的になつた物は、私の文藝上の才名よりも、寧ろ茲に言ふところの自己革命の方であつた。何爲なれば、私が文章の方で才名を馳せたところで、それは彼等とても黙つて見てゐられぬこともないが、行爲の上で、彼等にも影響を與へるほどの異常な實例を見せつけられては、決して堪つたものでなかつたからである。友情を生命として生れた私の、人懐かしい優しい氣質は、容易にその情を培養することが出来た。未だ廣く世間に名を知られなかつた時分、私は、周圍の人達の誰からも愛されて、一人の敵人をも持たなかつた。それが幾らか名が賣れ出すと同時に、もう一人も親友といふものの無い身になつ

た。太甚しい損害と謂はねばならぬ。が、それにも勝る大損害は、親友といふ假名の下に多勢で私の周圍に集まつて来て、親友といふ名に附帯した特權を濫用して、只管私の困るやうな位置に牽きずり込ませうとする、然ういふ人間が澤山つき纏つてゐたことである。此の懺悔録の後の方へ行くと、然うした臭氣に堪へない隠謀が明かに解つて來よう。此處ではその起因だけを話して置くが、その手始めの奸計は聽てお目に懸ける。

獨立てやつて行くにしても、口を糊らさぬ譯にはゆかぬ。そこで私の考へ附いた生活法は、例の樂譜を寫して、一枚でも餘計仕上げようといふ、ごく簡單なものであつた。外に確かな爲事さへあれば、無論それにしたのだが、此の方が自分の好きな道でもあり、手足を縛られずに毎日の麪包も獲られると思つて、然う極めて了つた。未來に對する疑懼もなく、現金出納吏の虛榮心をも拋棄つて、いよいよ眞物の樂譜かきになつた。斯う極めてから、勢からぬ利益が得られた。そればかりでなく、事情已むを得ぬ時でなければ、この爲事を廢したことはなかつた。それ程に満足してゐた。縦し一時中止することはあつても、ぢきまた舊へ復るやうになつた。

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

第一回の論文の成功は、この決心の實行を一層容易ならしめた。賞與が出ると同時に、デドロオはそれを印刷することに盡力した。私が病床に臥てゐる時、書物の出版と其の評判に就いて言つて寄越した中に、實に天翔る勢とも申さむか、まづは空前の成功と存じ申し候と言つたやうな文句が書いてあつた。一般の好評、それも決して此方から買収してさせたといふ譯でもないのに、無名の一評論家に對して、これ程の推稱を吝まぬ所から見ると、實際自分には其に値するだけの伎倆があつたのかと、今迄は半信半疑でゐた自己の眞價といふことに、初めて想ひ到つた。斯うなつて來ると、是から始めようとする爲事の上にも、意外な便宜を得るに違ひない。文壇知名の人が樂譜を寫してゐるといへば、必と大流行に流行することは極まつてゐる。斯う私は思つた。

愈、決心が動かぬと極まるや否や、まづフランキ、イエ氏に手紙を出して、決心の次第を通知し、ヂッパン夫人と二人で、是迄に一方ならぬ世話をしてくれた禮を言つて、今度始める爲事の方でも役を勤めませうといふことを書き添へた。フランキ、イエ氏はこの通知書を讀んだが、要領を得ない。相かはらず熱に浮かされてゐると

1750(39)-1752(41)

でも思つたと見えて、早速様子を見に來た。其處で始めて私の決心の顛しがたい事を知つて、奈何することも出来なかつた。彼はすぐ、デッパン夫人や、其の外の人達の處へ行つて、私が一種の狂者になつたといふことを吹聴した。何と言はれても私は無貪著で唯自分の行くべき道を歩いた。自己革命の第一著手は、邊幅に向つて行つた。金びかの服装、白の長靴下、帶劍、然ういふ物は一切棄てた。鬘も圓形の冠を冠ることにして、懷中時計まで賣り飛ばして了つた。私は壓へ難い歡びの聲を揚げて、もう俺には時間なぞ見る必要がなくなつたのだ。這麼有りがたい事はありやあしなないと言つた。出納吏の方の後任は、長いことフランキウ氏の好意で空けて置いてくれたけれど、到頭私に復職の意志がないことを見済まして、その位置をアリバアル Ailbard 氏に譲つて了つた。これは以前年若なシッソンの家庭教師となつたこともあり、「巴里植物 Flora Parisiensis」といふ著書で、植物家としても知られた人であつた原註。此處に言つたことは、今頃では大方フランキウ氏なり、又その一味の人達の口から至て異なつた風に傳へられてゐるに相違ないと思ふ。けれども私はその當時からかけて、彼の隱謀が計畫されるまでの長い間、彼がいろ

1750(39)-1752(41)

いろの人達に話したその事實に基いて言ふのであるから、常識に缺けてゐるか、惡意のある人でない限りは、克くその事は承知してゐる筈である。

奢侈を禁ずる目的で、随分手嚴しい改革を自分でやり出しはしたものの、初めは自分で著てゐる襯衣にまでも、それを持つて行かうとはしなかつた。この襯衣はヴェネチア時代の記念物で、品質もよく、皆自分の氣に入つたのばかりであつた。數も多かつた。元來が清潔を目的として使ひ始めたのが、何時となく贅澤に流れるやうになつて、夥しく金が費つた。ところが偶然或る男のお蔭で、この道樂が止んで了つた話がある。聖誕祭の前後、家の「お傳」さんたち（後文で解る）は皆晚拜式に出で了ひ、私はまた聖歌練習會へ行つた留守の間に、誰か知らぬが屋根部屋の扉を掘じ開けて中へ忍び入つた者があつた。その部屋には丁度洗濯したばかりの襯衣が干してあつたので、それを悉皆盗まれた。その中に極上等の麻の襯衣が四十と二枚あつたのも、残らず盗られて了つた。これ私私の筆筒の底を拂いた譯になつた。近所の人の話で、一人の男が何か幾包も引つ背負つて出て行くのを見たといふことを聽いて、テレエズも私も、すぐとそれはテレエズの兄弟に當るあの碌てな

1750(39)-1752(41)

しの所業に違ひあるまいと察した。母親だけは決して那樣事はないと打ち消してゐたけれど、いろいろ動かぬ證據があつたから、母親が甚麼に申し開きをしたところ、到底この嫌疑は霧らすことが出来なかつた。しかしそれを調べ出すと、今度の事よりも、それ以外の罪まで發覺しさうな憂もあつたので、餘り聒しく言ひ立てずに済ました。此の兄弟はそれぎり家へは顔を出さず、到頭行き方が知れずにしまつた。テレエズと言ひ、私と言ひ、慙う纏れ合つた家族に累はされるのは、何たる不運だと怨めしくなつた。這麼危険な係累は早く縁を切つて了はなければならぬといふことを、一層強く彼女に言つて聽かした。この盜難以來、襪衣道樂はふつつり止まつて、それから極粗末な外の衣物と釣り合ふやうなものでなければ、著ないことにした。

斯うして自己の改造は一通り仕上がつたから、此の上は唯これを鞏固にし、永續させるばかりであつた。それには第一有らゆる習慣や定説といふやうなものから自己を解放し、世の後言を顧みないで、物それ自體の本具する、至善と純理とを摺ひやうにせねばならぬ。著書が好評であつたところから、今度の決心までが世間

1750(39)-1752(41)

に響いて、爲事の申込がどつさり來たので、思ひの外有望な職業と想はれた。けれども其處には又いろいろの理由があつて、當りまへ程も成功は得られなかつた。第一には健康が十分でなかつた。丁度この時にまた病氣が劇しく發つて、それから以前の様に回復する機會がなかつたので、或は自分のかかつた醫者たちが、この病氣の上塗をしたのであるまいかとさへ思へた。診療を乞うた醫者は、モランに、ダランに、エルヴシユス Helvécus に、マルウアン Malouin に、チェリイなどといふ、づれも私の友人なり名醫で、各、獨得の療法を施したけれど、輕快どころでなくて、反つて甚だしい衰弱を起さした。醫者達の言ふとほりにすればする程、益、皮膚に黄色を呈して、瘦せもし弱りもして來た。藥の效驗から段段自分の容體を推測して見て、自分が息を引き取る迄は、尿閉や砂や、結石のために、絶え間なき苦痛に責められる外はないのであらうと、掻き亂された妄想が斯う思ふのであつた。煎劑とか、溫浴とか、刺絡とか、外の人に試みれば、病氣を緩める效力のあるものも、私には唯病勢を増させるばかりであつた。其の中にもダランの消息子だけは、幾分か效驗があつたと見えて、せめて一時なりとも安靜で居ることが出来た嬉しさに、これが無

くは些との間も生きてゐられぬやうな氣がした。折から丁度ダランの死に際であつたのかもかまはず、一生使用するだけの分を寄越して置いてくれと頼んで消息子ばかりうんと貯へ込んだ。八年乃至十年間は缺かさずにこの消息子を使つたから後に残つたのも合して悉皆で何でも五十ルイ約計五百圓は費つたらうと思ふ。斯う金が費つて而も情ない、不自由千萬な治療法を試みてゐるのだから、爲事の方は休まぬ譯には行かなかつた。それに今にも縮切れようかと言つてゐる重患者が、その日その日の麪包を儲けるために、一生懸命になつて稼いでゐる氣にもなれなかつた。

一方で文藝上の爲事がまた毎日の爲事の上に尠からず妨げをした。論文が世に出るとすぐ、文藝上の辯護人たちが、申し合せたやうに私に突つ蒐つて來た。碌に題意も咀嚼けないうて、高飛車に斷案を下すやうな小慧しいジヨス「Joss」君たちが、彼處にも此處にもと言つた風に、頭を擡げるのが癪てたまらなかつたから、早速筆を把つて其の餘黨までも塵にするほどの勢で回ませ了つた譯者云。ジヨス君はモリエールの「戀の醫者」[Amour médecin]に出る貴金屬商人の名。戀の病は奈何

1750(39)-1752(41)

すれば癒るかと言はれると、それは寶石を宛行ふに限ると勸める。その實自分の利益を考へてゐることになる。私の筆鋒にかかつて眞先に僵れたのは、ナンシイ Nanci のゴォチエ Gauthier といふ人で、これはグリム氏に與ふる書といふ中で散々な目に遭はせてやつた。其の次に引つ繋つたのは、誰あらうスタニスラフ王御自身で、快く私と論壇上に相見えるといふ思召してあつた譯者云。波蘭土王スタニスラフ・レスチンスキイ Stanislaw Leszczyński) 一七六六年歿。元は同國の貴族の出であつたのを、瑞典王カール Karl 十二世が波蘭土國會をして選立させたのである。其の後一度位を奪はれて諸方に漂浪したが、その女マリア Maria を當代の佛蘭西王路易十五世に納れて后としたので、その後援で再び立つことを得たところ、波蘭土王位繼承の役後維因の和約で讓位を餘儀なくせられて同時にロオトリンゲン公となり、且終生波蘭土國王の稱號と待遇を受けることになつた。リッネヴィル Lunéville やナンシイに隠栖して學藝を奨勵し、自らも哲學政治上の述作に耽つた。Œuvres du philosophe bienfaisant がこの王の全集である。Le bienfaisant は文藝の擁護者といふ所から獲た綽號であつた。その志に感じて、彼に對する答辯の調子も十分莊重に

1750(39)-1752(41)

と注意したが、論鋒はやはり鋭くて、其の説を根柢から破つて了つた。神父ムヌウ Menou といふエスイタ僧が、王の論文に手を貸した形蹟があるのを知つて、何處までが王の直筆で、何處までが僧の加筆であるかを看破つた。そしてエスイタ僧の言ひさうな、陰險な文句を遠慮會釋なく片端から攻撃して、ところどころ、僧の意見だらうと思はれる時代錯誤を指摘した。この論文は、とにかく今日まで唯一の解嘲文となつて残つた。しかし何ういふものか、他の作物ほどに一般の注意を惹かずには了つた。真理のためとなれば、一賤民といへども如何に王者と筆戦を交へることが出来るものであるかといふことを俗衆に示すには、寔に好い機會を自分は捉へたと思つた。私が王に答へたやうに、些しも自尊を傷けないで、それと一面對手に對する敬意をも全うするといふことは、決して容易に出来るものではない。幸ひにも論敵になつた王は、私が滿腔の尊敬を感じてゐた人で、諂諛に墮ちぬ程度で、十分にそれを發表することが出来た。それがために品位を下げずに成功した。友人達は私の身の上を氣遣つて、差し詰めバステイユ Bastille ものであらうぐらゐに思つてゐた。けれども私自身は一向平氣だ。那樣疑懼を懐いたことは少しも

1750(39)-1752(41)

なかつた。それが當然であつた。私の駁論を讀んで、王が何と言はれたかといへば、

「もうこれで十分だ。この上争ふことはない。」

實に大腹な王様ではないか。それが縁となつて、この後王から尊重と眷顧を受けたことは數度あつた。この事はいづれ後に行けば話す折があらう。そして私の論説は、佛蘭西から歐羅巴各國をかけて、いと靜かに弘まつて行つた。これには誰も非難を試みる者がなかつた。

少し經つと又一人の敵が、意ひもかけぬ方面から現れて來た。それは今から十年も前に、厚い志を注いで私を世話したことのある、里昂のポルド氏其人であつた。忘れるともなくつひ手紙を出す機會がなかつたので、その儘になつてゐたのである。其處に私の方に一つの弱味があるところへ、彼の方から挑戰的に出かけて來た。けれども其の態度が鄭重であつたから、私も同じ様に答へた。それに對して彼は一層突つ込んだ反駁を試みた。更に私の方から最後の答辯が行つた。それきり向うは口を噤んで了つた。けれども後には、一番猛烈な敵になつて、私の

悲境を目覚めて盛んに悪罵を浴せかけ、わざ／＼中傷の目的で倫敦まで押し出すほどになつた。

いろいろ斯ういふ論戦ばかりにかまけて了つたが、それで眞理が発見されたのでもなければ、自分の財布が暖まつたといふ譯でもなく、畢竟樂譜を書く時間をそれだけ奪られただけであつた。當時私の著作物を引き受けてやつて居たのは、ピソト Pissot といふ書店であつたが、是も碌に原稿料を寄越さぬのみか、時には全て何も與れないことさへある。懸賞論文を出版した時でも、私は一リアルルの金すら貰はなかつた。これはデドロオが無償で本屋の手へ遣つて了つたのだ。だから長いこと待ちに待つて、幾許金つちびり／＼引き出すより爲方がなかつた。樂譜の方と言つてもなかなか思ふやうには行かない。つまり二つの爲事を同時にしてゐるのが、虻蜂取らずに了る原因となつた。

其の二つの爲事は反對の方向を取り、反對の結果を持ち來した。初めて書いた物が當つて、私の名が賣れ出して來た。又自分で極めた生活法は、世間の好奇心を揺かすやうになつた。——成るだけ他人に知られることを避けて、自分で制限した

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

境涯で、自由な、安穩な生活をする外に、何の希望も持たぬといふその異り者に會つて見たい、といふことになつて來た。それが私の希望を實現させないことになつた。いろんな事に假託して、いろんな人間が私の室へ押し寄せて來ては、能くもない事に時間を浪費して行つて了つた。女連はまた様様な手管をめぐらして、私を自分達の食卓へ引つ張り出さうとして承知せぬ。對手にせねばせぬで、段段執拗く附けあがつて來る。然う誰も彼も勿ねつけることもならぬ、謝絶を言ふにつては皆感情を害して行く、それを又あとから跟けて行つて申し譯をする。そんな事にかかつて了つて、一日の中に、一時間でも本當に自分の身體になるといふ折がなかつた。

そこで私は考へた。貧寒と獨行、それはちよつと想像したほど容易に兩立出来るものでない。自分の手仕事で生計を立てて行かうとしても、傍が然うはさせないではないか。時間を潰させて濟まぬと言つては、種種な贈り物を返禮に持ち付けて來る。この儘で行くと終には人形芝居の道化のやうに、出來るだけ多くの役に早替りしなければならぬやうになるかも知れぬ。これほど見送られた齒擦い

1750(39)-1752(41)

束縛といふのがあるものでない。此のわづらひを避けようと思へば、誰から寄越しても一切贈り物を謝絶するより外によい分別がない。すると又意固地に遣ひ物を届けて来て、物堅い私を無理に自分達の意に従はせたいと云ふ事を、一廉の名譽と心得るやうな手合がますます殖えて来た。此方が欲しくて頼むときには、一エキウも與れる氣の無さうな人たちが、引つ切なしに煩く種々なものを押し附けに來た。斷られたと言つては、尊大な見得坊だなどと、可い加減な事を言つてゐた。今度の私の決心、今から私が歩かうとする生活の途は、テレエズの母親に取つて面白くないものであつたことは、言ふまでもない。テレエズは無慾一方の人間でも、母様の指圖することには否を言ふことが出来ぬ。それにお傳さんたち——これはゴオフクウルの命名で——は孰れも例の贈り物を斷るのに、私ほど手厳しくなかつた。種々な物を黙つて納つてゐるやうな人達であつた。それでも随分私に見つかつたところから想像すると、餘程來たにちがひない。こんな有様では、黙過してさせてゐるもののやうに、世間の攻撃が眼に見えて、心苦しさいふものはない。未だそれよりも一家の主人として主人がひもなく、我が身に對しても自走

1750(39)-1752(41)

を失つてゐる。然う考へて見た時の心の痛みは、幾倍劇しかつたか知れぬ。願懸けをしてみても、惡魔祓をしてみても、懐れてみても、何の效もなかつた。永久の不平家氣むづかしや、そんな者に私が見られて了つたのは、皆母親の所業であつた。のみならず、私の友人達を捉へて、何時に限らず密話の絶え間がなかつた。一家の事はすべて私には秘密の園地であつた。私も甚麼事が始まつてゐようとい切知らぬ貌で、出来るだけ騷擾の仲間入りをせぬやうにしてゐた。家内の悶着に關係せぬためには、腰が固くなくては出来ないので、私には然うは出来なかつた。愁き訴へる術は知つてゐても、斷行の智と勇氣がなかつた。言ふことは何でも私に言はせて置くが、爲る事は皆彼等の思ふとほりにしてゐた。無間斷の縫れあひやら、毎日の取り込みで、萎頓して了つた私は、到頭今の巴里の住居が不愉快で堪らなくなつて來た。静として暮してゐる空はしなかつた。餘り鬱悶して散歩でもして見ようと思ふやうな時、知友の誰彼に彼方此方と引つ張り廻されない時、然ういふ時には、唯一人てぶらぶら出掛けることがあつた。衣兜にはいつも手帳と鉛筆を入れて置いて、思想の系統を纏める積りにした。考に浮



んだことはそれに書きつけることにした。ゆくりなく引き寄せた新しい境界の不快を紛らせる方便に、文藝といふものが全く私を吸ひ込んで了つた。私の初期の作物には、どれを見ても憂憤と不平の色を帯びてゐないことはない。其の原因は其處に在つた。

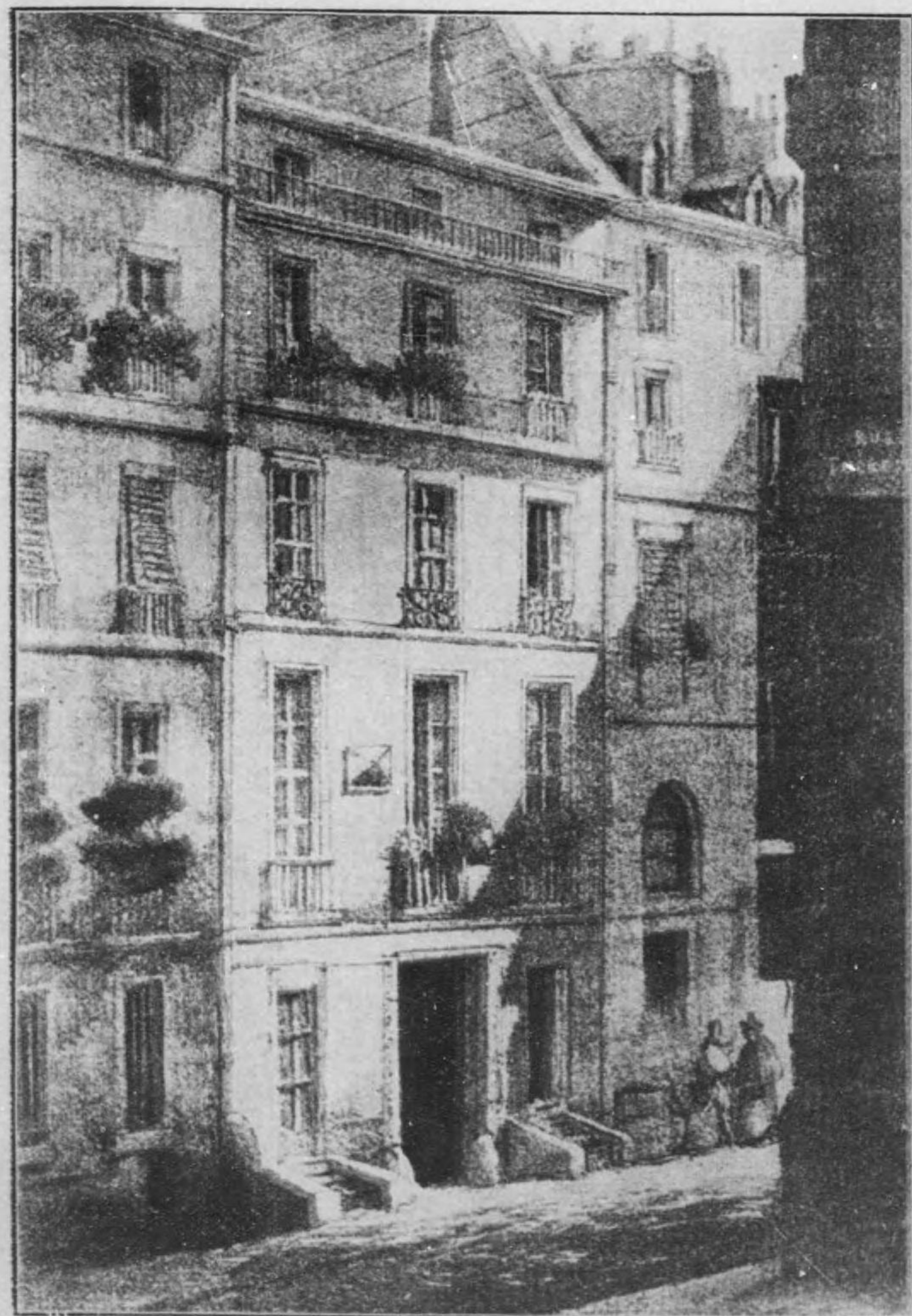
尙一つその原因になつたことがある。今私は社會の表面の人になつて了つたが、それは固より自分の本意でないから、社會の習慣といふものが解らない。またそれを自分の身に引き附けることのならぬ境界にゐたから、自分は自分流儀で押し通して、一般世間の慣例は構はないでゐよう、と然らば腹を決めた。何時まで經つても瘡らないのは、愚にもつかぬ臆病心であつた。自分は人並の交際法も知らないといふ心配が、病み著きになつて抜けない。そこで空威張りに威張つて、寧ろ那樣面倒なものは踐み碎いて了つてやる氣になつた。羞恥さが因て、犬儒的な、破壊的な人間に私はなつた。自分に禮節が守れないといふ心の瘦せ我慢からそれを輕しめた。この態度は、今の自分の新主義とも一致するものだつたから、如何にも立派な事をした、壯烈な道德を完うした。然らう言つた感じが實際にした。私は

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

斷言したい。斯ういふ根本觀念があつたからこそ私の道德感情は、ともかくも見るに足るべき状態で續くことが出来たのだ。若し自分の天稟に背くやうなことをして努力したのは、決して然らば行かなかつたのである。何處から見ても人好きのする風でもなし、言葉つきでも大抵わかる通り、誰言ふとなく私を非社交家と呼ぶやうになつた。それでも内輪では動もすると、その本領に背くやうなこともないではなかつた。友達や知人たちにかかつては、この手に終へぬ荒熊も、まるで羔の如くに持ちなぶられてゐた。皮肉を言ふといつても、多くは一般の事實に關して際鋭いことを吐くだけで、誰に對しても失敬な言葉などを使ふことは出来なかつたのである。

「村の卜者 Devin du village」が出る、私の名が一時に賣れ出して、廣い巴里中に私ほど持て囃された者はないくらいであつた。此の曲は私の生涯に一つの時期を畫るものだ。この話をする、と勢ひ當時關係した人達のこととも言はねばならぬ。以



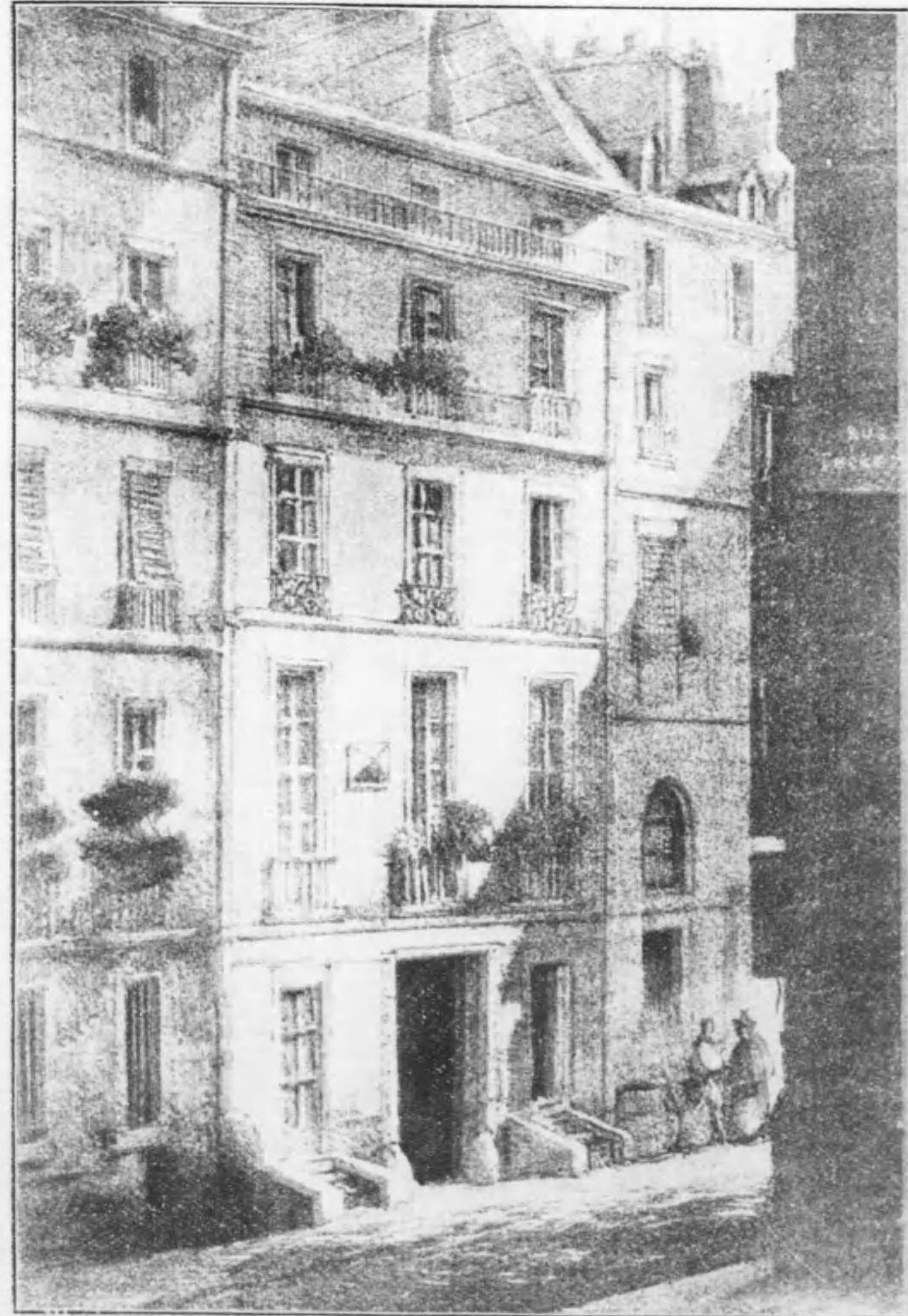
址邸クッバルオ

1750(39)-1752(41)

第八卷

後のことを明瞭にするために、少し詳しく説いて行かう。

知人は随分澤山あつたけれど、眞箇の親友と言つては、チドロオとグリムの二人しかない。自分と親しい人達は、互ひに一緒にしてやりたいといふ希望があつたから、彼等二人を親しくさせずに置くといふことは、私が間に立つてゐる以上は効がなかつた。で、この二人を結び附けた。二人は意氣が合つて、反つて私との間よりも一層親密になつた。チドロオには無数の知己があつたけれど、グリムは外國人と言ひ殊に新參で、これから知己を捜し出さなければならぬ。私はグリムを取り立ててやる事ばかり考へてゐた。チドロオを與つてから、又ゴオフクウルも與つた。シノンソオ夫人や、エビネエ夫人や、オルバック男爵の邸へも紹介した。この男爵と交ることは私に取つては本意でなかつた(譯者云。Paul-Henri, baron d'Holbach, 一七二三—八九。獨逸ニアデン Baden のハイデルシウム Heidelberg に生れ、巴里で歿した。獨逸音はホルバハであるが、巴里ではオルバックと通つた。佛蘭西當時の懷疑哲學者の一人。その著書に「自然法 Le système de la nature」がある。「百科辭典」中に寄稿したものも多くある。第十八世紀の交際社會は、客室生活とクラブ生活



址邸クッバルオ

1750(39)-1752(41)

第八卷

後のことを明瞭にするために、少し詳しく説いて行かう。

知人は随分澤山あつたけれど、眞箇の親友と言つては、ヂドロオとグリムの二人しかない。自分と親しい人達は、互ひに一緒にしてやりたいといふ希望があつたから、彼等二人を親しくさせずに置くといふことは、私が間に立つてゐる以上は効がなかつた。で、この二人を結び附けた。二人は意氣が合つて、反つて私との間よりも一層親密になつた。ヂドロオには無数の知己があつたけれど、グリムは外國人と言ひ、殊に新參で、これから知己を捜し出さなければならぬ。私はグリムを取り立ててやる事ばかり考へてゐた。ヂドロオを興つてから、又ゴオフクウルも興つた。シノンソオ夫人や、エビネエ夫人や、オルバック男爵の邸へも紹介した。この男爵と交ることは私に取つては本意でなかつた譯者云。Paul-Henri, baron d'Holbach. 一七二三—八九。獨逸バアデン Baden のハイデルシウム Heildelshelm に生れ、巴里で歿した。獨逸音はホルバハであるが、巴里ではオルバックで通つた。佛蘭西當時の懷疑哲學者の一人。その著書に「自然法 Le système de la nature」がある。「百科辭典」中に寄稿したのも多くある。第十八世紀の交際社會は、客室生活とクラブ生活

とて日を送つた。殊にこの頃はサロンの全盛期で、これには饗宴と女が必ず伴つて、歡娛を盡し極めた。本書の中には到る處にこのサロン生活の片影が窺はれる。今迄にもそれがたびたび出た。そして此のロアヤアル・サン・ロワック Royal-Saint-Roch 町に在つたオルバックの邸宅は、殊に有名なものの一つで、此處をば當時の自由思索家等が、好個のソシエテとして犇々と詰め掛けた。Le Salon d'Holbach——この一語には、當時の立物を以て自任したあまたの才人達に、楽しい血潮を波打たせる程の好い響が籠つてゐた。デドロオ、ダランベール以下の Encyclopédistes が始終入り浸りて、木曜日毎には辭典編纂上の協議會を開く。連中ではこれを le jour de synagogue と呼びかした。日曜日には屹度盛んな宴會が張られる。或る者がオルバックを Le premier maître d'hôtel de la philosophie と綽號したのは、然ういふところからであつた。ルッソがこの連中と隙を生じてからは、Coterie holbachique 或は holbachiens と連りに呼び棄てにしたことは本文で分る。此處の會の時には、談笑放言の間に、主人夫妻も交つて盛んに花を咲かせる習はしてあつた。當代の懷疑家、無神論者、實證學者、革新文藝家——すべてに舊い型を翻さうと教團いてゐる連中のみ集團であるか



者纂編典辭

1750(39)-1752(41)

第八卷

ら、勢儀の熾んであつた事は想像に餘る。その中で唯一人よく言へば異色だが、皆からは執拗陰険と見られてゐたのが、ルソオであつた。口かずも利かず、偶に言葉が唇に上ると、すぐ衝突の種になる。Diderot et le curé de Montchanet といふ書物に斯ういふ話が出てゐる。ノルマンディのモンシオウゼエといふ田舎に自惚の強い僧があつて、稗氣に満ちた自作の劇を、デドロオに頼み籠つて、其の紹介でオルベックのサロンに持ち出して朗讀することになつた。室は調度裝飾に眼を眩す程の主人の書齋、會員はルソオ、デドロオ、ダランベエル、チックロオ、Duelos、マルモンタル、Marmontel、ド・ヘルツ、シユヌス、Hervéius、ド・シユヌク、ウール、De Jaucourt、ラモナル、Raynal、ド・ラ・コンダモイヌ、La Condaminie、モレ、レ、エ、Morellet、ド・マルサン、シイ、De Margeuoy、その外録をたる顔觸れ。其處へ心は高鳴りしつゝも、外形の甚だ振はぬ一寒僧が、あづあづ這入つて來たので、傍の者等は、蔭てくすくす笑つてゐる。獨りルソオは他を見て、嗤ふなぞといふがあるものかと言つて、苦り切つた眞顔である。彼の僧の詩才、文才を試みるやうな滑稽な問答が一順濟んで、彌よ劇が朗讀される。實際話にもならぬ程の愚作なので、冷評が雨のやうに下る。終には莫迦にして、了つて、大した手腕だ



者纂編典辭

1750(39)-1752(41)

第八卷

ら、勢儀の熾んであつた事は想像に餘る。その中で唯一人よく言へば異色だが、昔からは執拗陰険と見られてゐたのが、ルッソであつた。口かずも利かず、偶に言葉が唇に上ると、すぐ衝突の種になる。Diderot et le curé de Montcharvet といふ書物に斯ういふ話が出てゐる。ノルマンディのモンシオウゼエといふ田舎に自惚の強い僧があつて、稗氣に満ちた自作の劇を、デドロオに頼み絶つて、其の紹介でオルバックのサロンに持ち出して朗讀することになつた。室は調度裝飾に眼を眩す程の主人の書齋、會員はルッソ、デドロオ、ダランベエル、チックロオ、Duelos、マルモンテ、Marmontel、エルツシニス、Horvélus、ド・シオクウル、De Jaucourt、レナナル、Raynal、ド・ラ・コンダミヌ、La Condaminie、モレ、Morellet、ド・マルシイ、De Marenzy、その外録々たる顔觸れ。其處へ心は高鳴りしつゝも、外形の甚だ振はぬ一寒僧が、あつちあつち這入つて來たので、傍の者等は、蔭てくすくす笑つてゐる。獨りルッソは他を見て嗤ふなぞといふがあるものかと言つて、苦り切つた眞顔でゐる。彼の僧の詩才、文才を試みるやうな滑稽な問答が一順濟んで、彌よ劇が朗讀される。實際話しにもならぬ程の愚作なので、冷評が雨のやうに下る。終には莫迦にして、了つて、大した手腕だ

……ラシイヌより優れてゐる……コルネイエより大膽だ……ヴォルテエル以上の天才だ……全巴里市をして此の神祕劇の前に叩頭せしめんやらならん……なぞと言ひ囃す。ルッソは初から黙つてゐたが、この時衝と僧の前へ出て来て、君の悲劇は滅茶苦茶だ。ああして皆が讚めるのは、君を莫迦にしてゐるのだと知らないのか？ さつさと村の寺へ歸つて行き給へ。僧は眞赤になつて突如ルッソに武者ぶり附く。どたんばたんと取つ組み合が始まる。多勢してやつとの事て二人を引き分けた。

私の友人といふ友人は皆グリの友人になつた。それは觀易い道理であるが、彼の友人は一人として私の友人になつた者がなかつたのは、反對の現象ではないか。彼がフリエズ伯邸にゐた時分は、よくその邸の會食に招かれて行つた。フリエズ伯は固より、特にグリムと親懇であつた伯爵の一族シオンベエル Schomberg 伯や、その外グリムと關係のある男女誰からも、私は恩恵を受けたやうなことは會てなかつた。唯一人、グリの友人でレエナル師といふのが、進んで私の友人だとして名乗つて出て時には世に稀な特志から、莫大な金を恵んでくれたことはある。し

かし私がレエナル師を知つたのは、グリムが未だ交際を始めない前からの事で、或る事件があつて以來始終私はこの人に傾倒してゐたのである。それは些とした機に起つたことだつたが、その細心なこと、雅量に富んでゐたこと、それを私は決して忘れることが出来ぬ。

レエナル師は確かに温かな友人であつた。その證據は、今話をしかけてゐる頃に彼の親しくしてゐるグリムへ世話の爲振りて解つてゐた。グリムにはフルツといふ親しい女の友があつた。しばらくは二人の間に何の事もなかつたが、總てグリムは烈しい戀に襲はれて、カユザック Calusac の後釜にこの女を据ゑようとした。美貌の友は貞潔を誇りとして、この新たな崇拜者を無下に斥けた。グリムは悲劇的な境涯に陥つて、死なぬばかりの心地になつた。それが間もなく、われわれの聞いたこともない奇態な病に變じた。晝も夜もうつらうつらと昏睡の状態、眼はばつちりと睜つて、脈搏にも異状がないのに、口も利かず、物も食はず、身動きもせぬ。他が何か言へば聴き耳を立ててゐるやうでもあるが、口ではもとより身ぶりでもへ返辭をしようともしない。氣が立つてゐるでもなく、悲哀に包まれてゐるでも

1750(39)-1752(41)

1750(39)-1752(41)

なく、熱があるでもなしに、唯斯う静と死人のやうに、其處へ横になつた儘てゐた。レエナル師と私が二人で看護の勞を分つた。師の方が私よりも身體が丈夫であつたから、夜の番に膺り、私は晝間付き切りで、二人が同時に不在にすることはなかつた。フリエエズ伯は愕いてセナク Senac を伴つて來た。この醫者は篤とグリムの容態を診たが、別に何でもないやうに言つて、處方も與れなかつた。友の身に關する私の憂慮は、醫者の顔色に深い注意を向けさせた。思ひがけずも醫者は満面に笑ひを漲らして出て行つた。けれども病人は幾日も尙且寢込んだまま、糞汁も何も口にしようとはせず、唯私が掛かつて櫻實を口の中に入れてやるのを、旨さうにして喰つてゐた。ところが彼は、或る朝偶と病褥を離れて衣物を著替へ、不斷のとほりに何喰はぬ貌をしてゐた。レエナル師や、外の人達に向つても同じことだつたらうと思ふが、私などにはあの奇態な昏睡病のこと、また病中に二人が盡した看護のことに就いて、彼は一語も言ひ出さなかつた。

この騒ぎは世間の取沙汰を惹き起さずに済まなかつた。オペラ座の歌女が強面くしたばかりに、男一匹絶望の極死なうとまでした、と言へば、これほどの珍談は



1750(39)-1752(41)

なかつたのである。此の意氣な情のために、グリムは世間の呼び物になつた。グ  
リムと言へば、戀愛、友情、その外廣い意味の愛情といふものの權化と見られた。こ  
の世評の結果として、彼は上流の交際社會での流行兒となり、その持てかたはずば  
らしいものであつた。それが因て私との間は遠くなつて行つた。彼に取つては、  
私といふものは最初から厄介物であつた。私とは全然別れて了はうとしてゐる  
やうに見えた。彼自分では暖い情を持つてゐるらしく見せてゐたけれど、それは  
唯表面だけであつた。私のやうに、口へは出さずに心で深く思つてゐるのと、實  
違つた。彼が社會で成功することは、私の望む所だ。けれども、彼自己の親友のこ  
とまで忘れて然うなことは私とて好まぬ。或る時私は斯う言つたことがある。  
「君は僕を疎外するね。それもまあ可しとするさ。だが今君が然うやつて大評  
判に酔はされてるのが、一朝醒めたとして見給へ、それや君その後は寂しい感じが  
するものだよ。その時にはどうかまた僕に復つてくれたまへ。僕は何時だつて  
同じなんだから。今はまあ束縛なしに何處へでも自由に行つた方がよからう。  
僕は君を待つてゐるぜ。」

1750(39)-1752(41)

この言葉に彼は頷いた。私の言つたとほりに準備して、自分の思ふやうに活動を  
始めた。て私達に共通の友人の仲間でもなければ、もう彼と出會すことはなかつ  
た。

後には彼もエビネエ夫人と親しくなつたが、その前は大抵オルバック男爵の邸を  
吾儕の會合場所にしてゐた。この男爵といふ人は、或る成りあがりの者の息子で、  
なかなかの金満家であつた。が、その金は多く善い方の事に使つて、邸へは文學者  
や材藝ある人たちを請待した。自分も才學のある人で、然ういふ人達の間立ち  
交つても、遜色はなかつた。以前からチドロオとは關係があつたので、未だ私の名  
が世間へ出ない頃の事ではあつたが、彼を介して私に交際を求めて來た。私の性  
來の人を毛嫌ひするところから、此の好意に酬ふことを久しく棄てて置いた。  
何故交際してくれないかといふ訊ねが彼から來た。私は、大へんな富豪でゐらつ  
しやるからといふ答をした。それでも強ひてといふので、到頭此方が根負けをし  
た。私の最大の不幸は、常も他の媚を斥けることの出來ないところから始まつた。  
私はそれに降伏して了つたことを、何時とて口惜しく思はぬことはなかつた。

1750(39)-1752(41)

もう一人デックロオ氏をも知つてゐた。私の方に、相當な資格が出来るとすぐ友人といふことになつた。數年前ラ・シャレットのエビネエ夫人の邸で初めて會つたことがある。彼と夫人は親密であつた。その時は唯一緒に食卓に著いだだけで、すぐ彼は其の日の中に歸つて行つた。その間にちよつと話をした時に、夫人は私の身分や、粹詩神のオペラのことなどを彼に話した。彼くらゐ立派な蘊蓄があれば、彼に愛されるのも當然だが、それが私のやうなものをも見棄てないで、家へ話しに来るやうにと言つて、招んでくれた。知己が欲しいと思ふ舊の私の傾向に加へて、既に相識の間となつたのだから、行けば譯もなく行けたのであつた。が、其處に臆病と疎懶とが付き纏つてゐて、彼は好意があるといふ外に、是ぞといふ橋渡しをする者がないといふので、その儘引つ込んでゐた。ところが今度自分の作が大當りて、それをデックロオ氏が感賞したといふ噂を何處からとなく聞き込んだので、いそいそ遇ひに行つた。向うからも出掛けて來た。斯うして私達の間始めて將來頼もしさうな結合が成り立つた。嚴正、誠實——然ういふものは、決して文藝と兩立の出来ないものでない、といふことは、私の心がそれを實證するばかりでなく、

1750(39)-1752(41)

この人との結合に依つて一層明かに學び得た(譯者云。Charles Pinot Duclos は文士、歴史家、道德學者。初期の作は多く物語類であつた。その中……伯の懺悔錄(一七四二)といふのが名高い。前第一七四二年の條に此名が出た。その他の著書には、『當世紀風俗の研究』(Considérations sur les mœurs de ce siècle)、『路易第十四、五世朝の秘密文書』(Mémoires secrets des régnes de Louis XIV. et de Louis XV.)などがある。一七〇四—一七七二)。

この外にも、餘り親しくない交友を挙げれば、随分澤山ある。が、一言ふにも足らぬ。それらは私の名が賣れ出した結果で出來た。彼等の好奇心が満足させられる間だけは續いた。私といふものは、一度遇つて見れば、底の底まで知れて了ふやうな人であつた。翌日見ると、もう何も新奇な物を見出すことの出來ないやうな人であつた。けれども當時私を慕つた多勢の中で、婦人が一人だけ私を離れなかつた。それはクレキイ (Requi) 侯爵夫人といつて、マルタ Malta の大使、大法官フルウレエ Froulay 氏の姪であつた。フルウレエ氏の弟は、かのヴェネチア大使モンテエグ氏の前任者であつて、私がヴェネチア共和國から歸つて來るときにも遇ひに行つ

1750(39)-1752(41)

たことがある。クレキイ夫人から案内状があつて、その邸へ行つた。夫人は私を親友と見做して、食卓を共にしたこともある。その時會つた文學者連中では、スバルタクスのparticus、やバルネフェルト Barneveldt などの作者として知られたソオラン氏が目立つた。この人は後に奈何いふ譯からか、酷い仇を爲向けるやうになつた。ソオランの父が曾て卑劣な手段で或る人を惱ましたことがある、其の或る人と私とが同名であつたといふところからかも知れぬ(譯者云。Joseph Savin は巴里の悲劇詩人。一七〇六一一七八一。父は Elie Savin と言つて新教の神學者であつた。一六三九一一七〇三。ルソオと同名の人といふは、ジャン・パチスト・ルソオのこと。此の條の注は第十卷一七五九年の條を看よ)。

本職の方から言へば、朝から晩まで稼ぎ通しにせねばならぬ樂譜書きの私がいゝろの事に妨げられて、毎日の儲けにも影響した。そればかりでは無い、十分立派に仕上げようと思つて書いてゐるのが、根づから注意が集まらぬやうな事になつて來た。那樣事で、折角自分の物と思つた時間の過半は、書き損ひを消したり削つたり、親規に書き直しをしたりすることと費えて了つた。斯うした煩累は一

1750(39)-1752(41)

日一日巴里の住居を堪へられなく思はせた。そして心から田舎に移つて見たいと思はせた。私はマルク・シイ Marcoussis で幾日かを過ごすために何度も出かけた。其處の助祭をテレエズの母親が知つてゐたので、あまり厄介を懸けぬやうにしてその家で滞在した。グリュムも一度私と其處へ行つた(原注。此處で或る瑣細な、しかし忘れられぬ事件が彼との間に起つた。それはサン・ヴンドロイ Saint-Vandrilie の噴水館へ食事をしに行く時であつた。つひ忘れて話さなかつたから、もうそれは言はぬことにするが、しかし、後になつてよく考へて見ると、グリュムの心の奥底には、其の時分から隠謀を蓄へてゐて、遂にあれだけのことになつたのだと思つた。助祭は美しい喉を持つてゐて唄が巧かつた。深くも樂理は知らなかつたけれど、自分の役は早呑み込みに、しかも間違なく覚えて了つた。私がシノンソオで作つた三部合唱曲を唱つて樂んだこともあつた。グリュムと助祭が、良いなり悪いなり歌詞を作つて、それに私が曲を附けて、それとまた二三曲は殖えた。是等の合唱曲は、いづれも斯うした清らかな遊樂の折ごとに作つて唱つたものであつたのに、外の譜本と一緒に、残らずウットンへ抛棄つて來たのが残念でならぬ。おほかたその紙

1750(39)-1752(41)

はダヴェンボット嬢が頭髪でも捲くのに使つて了つたであらう譯者云。英吉利ウ、トんでルッソが世話になつた人の娘。大切に保存して置きたかつた。その中には非常にすぐれた對譜法から出來てゐるのさへあつた。斯ういつた遊山の時には、小母さんも上機嫌でにこにしてゐるので、それが私には何より嬉しく、自分も調子づいて何がなし面白くてたまらなかつた。その中の或る機會に、大急ぎで不出來ながら、助祭に與ふる書といふのを韻語で書いてみたことがあつた。それは草稿の中に在る筈だ。

もつと巴里に近い處で、もう一つ酷く氣に入つた集會所があつた。私と同郷人で、親戚なり友人のミッサアルが、バツシイに瀟洒な隱宅を構へてゐたのがそれであつた。此處でも緩乎と遊び暮したことがある。ミッサアルは寶玉商であつた。分別に長けた人で、商賣の方では賑と金儲が出來たし、一人娘は仲買人の息子で、大膳職のブルマレット氏へ嫁入らせて了つたし、もう好い時分と見て取つて、齡の寄り際に、頗る商賣上の懸引を廢して、奮闘期と臨終との中間に、安息、享樂の一時期を作らうといふ、うまい考を立てた。純朴なミッサアルこそ、眞に實際的の哲學者と謂ふべき

1750(39)-1752(41)

であつた。自分の拵へた住み心地のよい家の内に、我が手で造つた趣の深い庭の内に、長閑な殘年の生を樂んでゐた。庭の臺地を深く掘り下げると、非常に澤山な貝殻が出て來た。それから彼の空想が爛れ出して、此の自然の中に、貝殻の外は何物も考に這入らなくなつた。終には、宇宙は貝殻のみから成り立つて、地殻も唯其の沙礫の堆積に過ぎぬ物だなどと眞面目に信じて了つた。此の問題、この新奇な發見で、心は全く占領されて了つた。今にも彼の頭の中に新説、寧ろ妄論が組み立てられさうな風に見えた。ところが彼の推論に取つては幸福であつたかも知れぬが、彼と親密な、そして彼の隱宅を無上の樂地として慕ひ寄つた友に取つては甚だ不幸な死が、奇態な、殘忍な病氣の力で彼を奪ひ去つた。腹部に腫瘍が出來て食物は通らず、だんだん重くなる一方であつた。長い間原因も知れずに、幾年か苦み抜いて、到頭飢渴のために死亡して了つた。私はこの哀むべき、而も尊むべき人の最期を思つて、心の痛みを感じずに居られぬ。臨終の苦痛を見るに忍びないと言つて誰も彼も逃げ出したその後に残つて、傍を去らずに看護をしてゐたのは、ルニエ Leniops と私と二人切であつた。それをさも嬉しさうな容子を見せて響應しな

1750(39)-1752(41)

がら、自分はごく薄めた茶を一掬も咽へ通すことのならぬ——呑み下すが最後、忽ち咽せ返さねばならぬほどの身で、前に並んだ下物をばいにかにも好もしさうに瞻りと眺めてゐた。その心持を思ひやると惨らしくてならぬ。然し、この悲哀の日々に到着する迄には、擇り抜きの氣に入つた友達ばかりと、どのくらゐ楽しい日を送らして貰つたか知れぬ。私はその友達の筆頭に、ブレヴォオ師を掲げたい。可憐な、素朴なこの人の感情は、彼の不朽な作品を飾るに足るものであつた。彼の作は孰れを見ても陰鬱な色彩が漂うてゐるにもかかはらず、其の自身の氣質、社交上の調子に毫しもさういふ形跡の見えなかつたのも意外であつた(譯者云。L'Abbé Prévost d'Exiles は當代の佛蘭西小説家。宗教、社會、軍隊、漂浪、様様の生活を経て來た人で、作は甚だ多し。その中 Histoire de M. Cleveland は前篇第五卷未に出た。傑作として知られてゐるのは Histoire du chevalier Des Grieux et de Manon Lescaut (一七三三)。又ドライデン Dryden エッセム Humme リチャードソン Richardson キケロ Cicero 等を佛譯した。一六九七—一七六三)。次に醫者のプロコップ Procopis これは小伊蘇保ともいふべき、婦人連の御味方黨。ブウランジェエは名高い東洋專制政治 L'espotisme ori-

1750(39)-1752(41)

ental]を死後に出した人で、ミッサアルの新哲學を、この人は宇宙の生命といふことにまで擴充したやうに思はれる(譯者云。Nicolas-Antoine Boulanger は巴里の文學者、兼哲學者。一七二二—一七五九)。婦人ではヴォルテールの姪のドニイ Denis 夫人、未だその頃は只の女子で、才を銜ふところまで行かなかつた。ヴンロオ Vanloo 夫人は美人とはいはれなかつたが、愛嬌があつて、歌を唱ふ聲音は天使のやうであつた(譯者云。夫人の夫は Carle Vanloo で、その兄と共に有名な畫家であつた)。ヴルマレ、ト夫人ももとより唄は巧かつた。身體は瘦せてゐたけれど、あれで餘り氣取り過ぎなかつたら、もつと愛嬌のある質であつたかも知れぬ。ミッサアル氏を中心とする社交界は、雑と這麼有様であつた。貝殼の研究で夢中になつてゐたことは、私を喜ばせなかつたにしても、あの友達だけで、十分己を慰めることは出來た。そして六箇月の餘、私も彼と共にその書齋に入つて、同じ程度の興味で、その研究を續けてゐたのであつた。

彼は始終斯ういふことを言つて私に勧めてゐた。それは、このバッシイの水は、君などの身體には大へん藥になるから、何時でも來て飲んでゐるのが可からうとい

1750(39)-1752(41)

ふことであつた。都會の雜沓は豫ねて避けたいと考へてゐた折柄で、戀てその言葉に従つて一週間か十日其處へ行つて見た。思ひがけぬ利益が其處で得られた。單だ水を飲みに行つたといふことのためよりも、田舎へ移つたといふことがそれであつた。ミッサアルはセロが弾けて、伊太利亞音樂といへば譯もなく嬉しがつてゐた。或る晩私達は寢床に就く前に、連りとこの話に身が入つた。中にも滑稽歌劇のことが出て來た。それは二人が前に見物して、非常に面白く思つたものであつた。その晩は遂に眠ることが出来なくて、奈何すれば佛蘭西へも、この種の劇の味を吹き込むことが出来るであらうかといふことを考へ通した。アムウル・ドラゴンド *Les Amours de Ragonde* のやうな歌劇もないことはないが、それとても、今いふのとは似もつかぬものである譯者云。この歌劇はデッウシ・Destouches の作歌、ムウレエ Monret の作曲に係る。デッウシは當世紀佛蘭西に於ける喜劇作家として最も有名な一人。その作十七篇に上つて、傑作には *Le Glorieux* がある。一六八〇—一七五四。朝になつて散歩をしたり、水を飲んでゐる間に、偶と私は唄の文句を口誦んで、丁度その時浮んだ曲節をそれに合はして見た。庭の片隅に離れて建つた

1750(39)-1752(41)

圓天井の乾淨房めいた處で、なぐり書きにそれを書き下した。茶の時にミッサアルや、家へ手傳に來てゐるデッメルノア Duvinois 娘に見せた。彼女は可愛い氣質のよい女であつた。私の走りかきしたといふその歌詞を抜き出してみれば、第一獨白が、

*J'ai perdu mon serviteur;*

わが忠僕は失せにき。

ト者の咏嘆調が、

*L'amour croit s'il s'inquiète,*

悶ふるにこそ戀は増され。

それから最終の二部曲が、

*A jamais, Colin, je t'engage.*

永遠に離れじ、わがコラン。

などといふのであつた。若しこの二人が寝め立てなかつたら、自分では書き續けるだけの値打もないと思つてゐた。今までもあつたとほり、書きかけの紙屑を

火の中に燻べて了つて、残念にも思はなかつたかも知れぬ。が、彼等の編り方はあまり強かつた。若干の詩句を除いて、六日目にはもう一通り此の劇作を完成して了つたほどであつた。曲譜の方も大かた出来上つて、巴里に歸つてからは、唯宣敘調の一部を作曲して、全體の修正をすればよい所までになつた。それは非常な速力で、三週間の中に、清書を済まして、何時でも、舞臺に掛けられるやうになつた。中て不足なところは、間曲デザエルクスタヴだけで、こればかりは、迥と後になるまで手を著けなかつた。

1752(41)

## 一七五二。

この作曲で私は急に熱立つて来て、一度實演がしてみたいといふ希望が壓へられなくなつた。こゝが若し自分の思慮どほりに、——丁度ルルリイが、自分の作つたアルミイド Armitide の曲を、自分一人だけが見物となつて演らせたやうに——誰にも見せないで試演が出来る事なら、私は甚だしく惜しくないと思つた。  
(譯者云。Giovanni Battista Lulli (Jean-Baptiste Lulli) はフランスに生れ、巴里に来て路易

— 68 —

1752(41)

十四世朝に歌劇作者として盛名を博した人。巴里のオペラ座は即ちこの人の創設に係る。名作には、アルミイドの外に Psyche, Proserpine 等がある。一六三三—一六八七。が私の場合では、多勢の看客と一緒でなくては、自分も看ることは出来ない。奈何してもオペラ座で此の曲を採用して貰つて、其處で演奏させるより外に途がない。生憎この曲は新奇に過ぎて、一般の耳は未だ斯ういふものに慣らされてゐない。それに此の前粹詩神に失敗した後で、今度若し同じ私の名前で出したところ、人氣の立たぬことは眼に見えてゐる。この憂ひを救つてくれたのは、デクロオであつた。彼は作者名を現さずに舞臺に掛けることを引き受けた。作者が私といふことを見露されなため、練習場へ私が出なかつたので、二人の、ヴィオロン弾手(原注。ルベルと、フランクウルの二人は、若い時分にヴィオロンを提げて、家家を流して歩いたから、Les petits Violons といふ綽號を取つた)も、自分たちがその曲の指揮者になつてゐながら、——一般の感賞が竟にこの作の真相を證據立てるまでは——作者が誰であるかを知らなかつた。聴衆は孰れも酔つたやうになつて歸つて行つた。その翌日から、何處の社交團體でも、談はずべてこの曲のことで持

— 69 —

1752(41)

ちきりの有様であつた。稽古の時に來て手傳つてくれた宮内官のキッライ Curly 氏は、宮中で演奏させて見ようと言ひ出した。私の意中を知つてゐるデックロオは、宮廷ではどうしても束縛を受けるから、とても市中で興行するやうな譯には行くまいといふので、キッライ氏に斷つた。キッライ氏の方からは折り返して、權威を笠に被てまた申込んで來た。デックロオはやはり動く氣色がない。二人の間に喧嘩が始まつた。或る時オペラ座で、兩方とも烈しくこの事を言ひ争つた末、席を離れて表へ出ようとしたのを、纒と他に止められて濟んだことさへあつた。其のうち私の方へ直接に勧めに來た。私はデックロオに委してあるから、と言つて取り合はなかつた。またデックロオの方へ取つて還さなければならぬことになつた。其處へ丁度オオモン Arnaud 公爵が這入つて口を利くやうになつた。到頭デックロオも權威には敵はぬことを曉つて、私の劇をフォンテヌブロー Fontainebleau で開演することを承知した。

この劇曲全篇の中で、一番力の這入つた、そして舊い型から抜けて出ようとしたのは宣敍調であつた。強聲の工合などは、至て新しいもので、臺詞の朗詠に伴つて

1752(41)

進動するのであつた。これほど思ひ切つた新物は、とても無事に通してくれぬ。第一、因襲に囚はれてゐる多くの耳が承知する氣づかひはない。フランキエとジェリョットが、別に一種の宣敍調を作つては、奈何かと言ふので、私も同意したが、私自身にその中へ喙を容れることは避けた。

一切の準備が出來て、開演の日も極まつた。せめて本稽古だけでも看に、フォンテヌブローへ出掛けないかと勧められた。私はフェル嬢にグラム、それからたしかレエナル師と一緒に、王家の馬車に乗つて其處へ行つて見た。本稽古は先上出來の方で、豫想外の満足を感じた。管絃樂部は、オペラ座附のもの、宮内省の音樂隊とて組織した大團體であつた。ジェリョットがコランの役、フェル嬢がコレット Collette の役、キッライ Curly が卜者の役と極つて、合唱班は、これもオペラ座一まきの連中を招んで來た。私は些とも口を出さなかつた。舞臺の監督はすべてジェリョットに一任して置いたから、それに對してとやかく干涉することは好まなかつた。私は宛て羅馬人然と鷹揚に構へ込んでゐたけれど、多勢の看客が立て込んだ中では、何となく氣恥かしくて、心の中を言へば學校の兒童のやうであつた。



1752(41)

翌くる開演當日の朝私はグラン・コンモン Grand Commun のカフェエへ朝飯を喰ひに行つた。多勢の人が來合はしてゐた。人人の話は昨夜の本稽古のこと、入場が容易に出來なかつたといふやうなことで持ち切つた。其の中に陸軍士官が一人居て、入場は那樣に困難でもなかつたといふ事から説き出して、その當夜のいろい로운物語を始めた。作者は斯うくいふ人て、甚麼事をした、這麼事を言つた、なぞと話した。その長い話をことごとく眞面目に、如何にも眞らしくしたのはよかつたが、話の中に唯の一言も眞實なところはなかつた。現に彼が穴のあくほど見て來たといつてゐる、その眞の作者が今眼の前に居るのに、一向知らぬらしいところから考へてみても、知つた風に話した彼は、實は入場したのではなかつたのだ。此の話は不思議な影響を私に及ぼした。その士官は相當年輩の人で、厭味な氣取つたやうな風は少しも見えなかつた。容貌を見ても、音ならぬ動功のある人といふことは争はれなかつた。聖路易十字章を佩びてゐるところから見ても、一個の元老將校たることは知れた。厚顔な話をした、私の氣質とは相容れぬ筈の此の士官が、妙に私の注意を惹いたのである。彼が連りと嘘を吐いてゐるその間に、私の

— 72 —

1752(41)

顔はぼつと上氣して、眼はあのづと倦き氣味になり、身は針の上に居るやうな心持がし出した。彼の嘘を無邪氣な過ちと見做すには、奈何すればよからう。然う考へて、少時は心の中で、思ひ惱んでゐた。斯うしてゐる中にも、誰かが私を見つけて、その士官に面皮を失はせるやうなことになるはせぬかと、急に心配で堪らなくなつた。物も言はずにシヨアラをぐい呑みにしてしまつて、その人の前を顔を背向けてすつと通り抜けた。大急ぎで表へ飛び出すと、後には彼の話に又花が咲いて、賑かに談り合ふ氣勢であつた。町の真中まで來て、自分とは見ると、ぐつしより汗塗れになつてゐる。若し私とそのカフェエを出ない前に誰かに見附かつて、名を呼び掛けられてもしたら、私は必と罪人のやうな羞恥さと窮困とを露したにちがひない。何爲なれば、士官の出鱈目がそのために化けの皮を引きめくられて、嘸かしの苦しき思ひをしなければなるまいと思ふ同情が、其處へ湧き出るからである。さて是からが生涯で、大事な潮界へ向つて行くのである。これに就いては唯ありのままを話すより外に爲方はない。その記實といふことさへ、とかく毀譽いづれかの色彩を帯びたがるのは、免れられないことであるからだ。とにかく私は奈

— 73 —

何いふ風に、また奈何いふ動機で行動したかといふことを、讀めも誹りもしないで、眞直に報告するとしよう。

其の當日の私の服装と言へば、尙且不斷の著のみ著の儘で、鬚は蓬蓬と延び切つたところへ、櫛目も入れない鬘を冠けてゐた。この方が磊落でよいなどと自分の不作法に言草を附けて、其の儘國王、王后、王族やその外宮廷を舉げて、程なく臨場せられるといふ劇場の中へのつそりと這入つて行つた。キッライ氏は自分の觀棚へ私を案内して席を取つてくれた。舞臺の上の當る場席で、餘程廣闊した。向ひ合つて少し狭いが、ずつと高くなつた一區劃の觀棚には、國王が例のボンバツウル夫人と列んで座を占めてゐた。私の居る周圍は皆婦人連ばかり、男といふのは私だけ、而もその席の極端に据ゑられてゐたのであるから、多勢の前へ廣告に出して置くのだらうといふ風に信じられた。燈火が這入ると、自分一人如何にも見窄しい扮装をして、いづれも綺羅靚装した士女の中に、挟まつて居るといふことが、今更のやうに際立つて見られたので、心の中に不安の浪が立ち騒いで、是は自分の坐るべき場所か、またそれに相應した扮装だらうか、奈何かといふことを思つてみた。

1752(41)

しばらく取つ追ひつ迷つた末に、なに、これで可いんだと自ら答へた。これは全く最初に如彼言つた廣言に對して行き懸り上、捨撥氣味で言つたので、決して理性の語ではなかつた。斯う私は言つた。

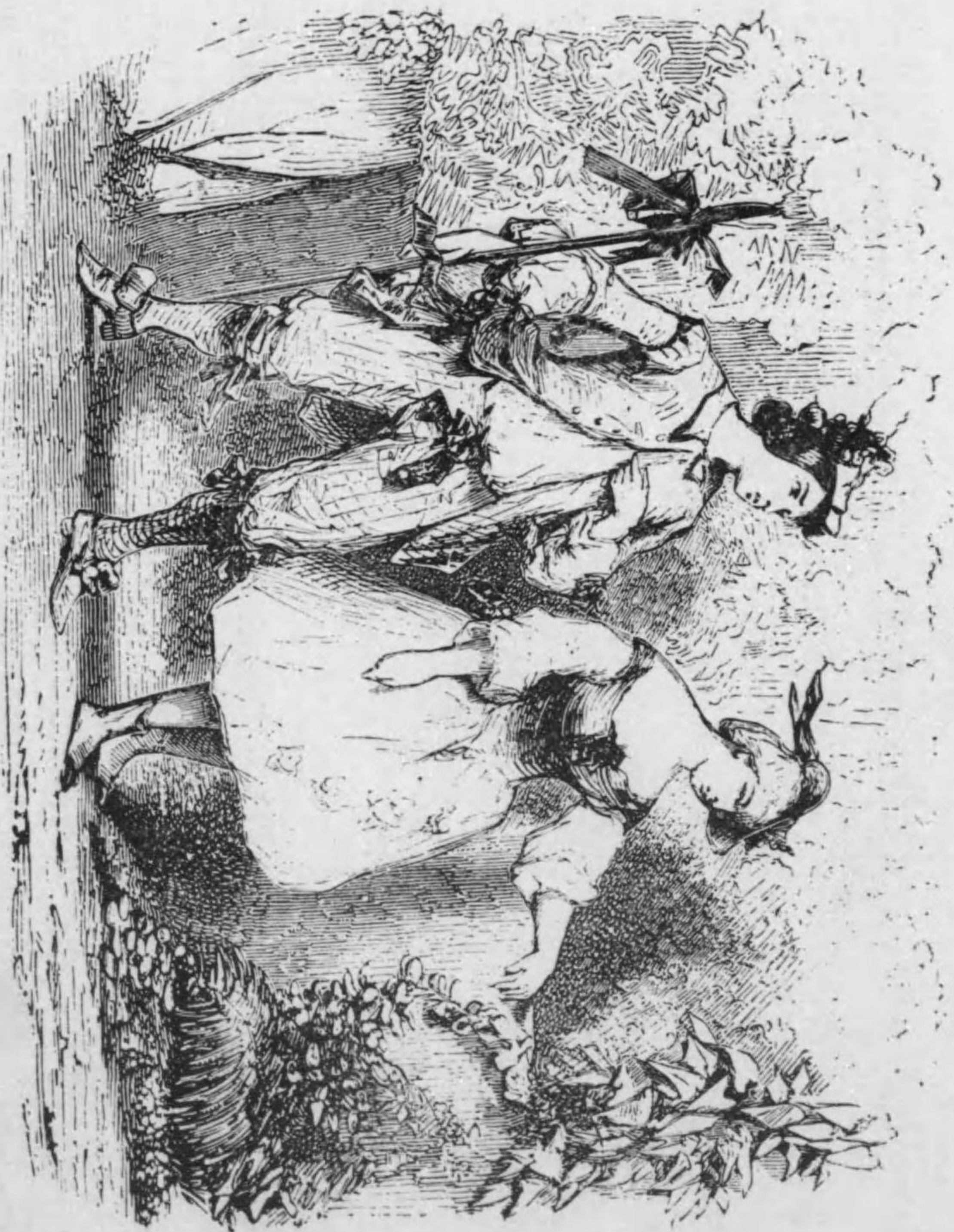
「俺はこれで正當な場所に陣取つてゐるんだ。今觀ようとしてゐるのは自作の戯曲ぢやないか。それを看せようと言つて招待する人があつたから、此處へ來てゐるんだ。自分の努力と技能の果實を、俺が自分で翫賞しようといふ、是以上の特權を持つてる者が外に誰がある？ 衣物だつて是が俺の通常著てゐる衣物だ。特別に艶飾もしないし、故と穢くして來た譯でもない。ちよつとでも凡俗どもの考を酌み始めると、もう何事もみんなその言ふなりにしななければならないことになる。何時までも自主の心を失ふまいと思へば、甚麼場所へ出ようとも、自分が可いと思つた扮装をしてゐる以上は、決して赤面などするには當らないことだ。容貌だつて然うだ。随分平凡な上に、根つから構はない方だけれど、垢も着いてなければ、不潔くて堪らないといふのでもない。鬚なども、これで天から授かつただけに、決して元から見苦しいのではない。時と品によつては、一廉の裝飾にもならうといふ

1752(41)

のだ。俺の姿を見て、滑稽だとか無禮だとか言ふ奴があるかも知れないが、有つたつて何だ！ 此方が然うてなけれや、輕蔑でも侮辱でも、静と我慢するだけの度胸を据えてさへすればいい譯ぢやないか。

斯う獨りて氣餒を吐いて、若し然ういふ風に我慢を張り通す必要があつたら、十分張り通せるまでの覺悟をした。然し現在國王陛下が臨場されてゐると思つた故か、感情の自然の傾向に由つてか、今私といふものが、入場客の好奇心の當對となつてゐることを思つて見ると、そこに深切好意などといふものの含まれてゐることを奈何しても見逃がすことは出来なかつた。然う考へ出すと、折角喝采を吝まぬらしい一般聴衆の好意を斥けるやうな感じがした。自身から延いては作品まで累を及ぼすやうなことになるはせぬかと、復も不安の情が萌すほどに心を撲たれた。私は嘲笑に對する警戒を怠らなかつた。案外にも人人の態度は深切であつた。私はたゞ縮み上つて、幕が開いた時にはまるで子供を見るやうにうち顫へた。

すぐと元氣を取り直すだけの種を見つけた。優技の方は話にならぬほど拙か



面臺舞の「若」の村

つたけれど、音楽の方は、唱歌も奏法も孰方も旨かつた。ナイイッな、そして人を憐れむやうな第一幕の初頃から、観棚毎に驚嘆の囁きが蒸し昇るやうに聞え出して来た。この種の曲に對しては、曾てなかつたことである。その沸騰は、廳で小屋中に聞え渡るほどになつて来た。モンテスキウの筆法で言ふと、影響が影響を生み出す (augmenter son effet par son effet même) といふ状態であつた。二人の仇氣ない男女の出場になると、もうその影響は絶頂に達した。國王が居るから手は拍けない。それが爲に、聴衆の話し聲は残らず手に取るやうに聞えて、それが反つて其の曲のため、即ち私の利益になつた。私の周圍には天使とも疑はれるやうな美しい女が多勢見物してゐて、口口に何をか囁き合つてゐた。低聲で話し合ふのを聴いてゐると、美しい音ですることね、恍惚するやうだわ。しみじみと胸の處で囁くやうぢやありませんか、などと言つてゐる。斯う澤山な可愛い女客達に、これ程の情緒を嘘さ込むことが出来たかと思ふと、歡びが涙に變る程に感動させられた。其の時眼に涙を有つてゐる者は、自分ばかりでもない、氣が注ぐと同時に、第一二部曲の始まるまで、どうしても抑へ切れなかつた。と、偶と昔トレットラン氏の家で、演奏會を

1752(41)

開いた時の事を憶ひ出して、少時自分を回顧して見た前篇一七三二。この回顧には、勝利者の頭上に桂冠を捧げた奴隷ぐらゐの効力があつた。しかしそれはほんの瞬間の事で、すぐ又何の懸念もなく、十二分に、自分の榮譽を樂み樂み味ふことに取り掛かつた。が、私は斷つて置く。その時の享樂の中には、作者としての名聞心よりも、異性から受ける實感の方が、より強く活いた。であるから、若し聽衆が男ばかりであつたら、搾り出す甘い涙の露を、一生懸命唇で受け込むやうなことはしなかつたに相違ない。今度のよりも、もつと烈しい嘆美を博した種種の曲を自分は觀て知つてゐる。然し、生き生きとした刺撃から來る酣醉が、演技の關ねるまで、而も王家の面前で、初日早速遍く漂ひ満ちたといふことは未だ知らぬ。當時、この芝居へ這入つた人たちは、然う言はれば皆憶ひ出すことがあらう。その成績は全くめづらしいぐらゐのものであつた。

其の夜オオモン公爵から使が來て、明日十一時に宮中へ伺候しろ、その時陛下に拜謁させるからと言ふことであつた。この傳言を齎らしたキッリ氏は、更に斯う附け加へた。多分それは年金を給與される話に違ひあるまい。而もその辭令を、

1752(41)

陛下が御手づから下賜遊ばさうといふのであらうと。

榮光の降り濺ぐにも似たこの日の夜、それが私に取つては苦痛と懊惱の一夜であつた。と言つても誰が眞箇にしよう？ 拜謁といふことから引き續いて浮んだのは、私の退隱が妨げられるといふ考であつた。この考のためには、演技の最中ですら、甚だに惱まされたか知れなかつた。況して明日また畫廊や、至尊の御座所、數ある縉紳と並び立つて、陛下の出御を奉迎するとなつたら、其の時の苦痛は想像にも餘る。上流の社交界に飛び込みもせず、貴婦人達の包圍を脱れたのも、全く斯ういふ病氣が私にあつたからである。そんな要求に曳かれて行つたとして、その境を考へて見ただけでも、もう病氣になりさうになる。然もなければ死に勝る程の惡評を被らなければならぬことと思はれる。この境界を知つてゐる人でなくては、此の冒險の可怕しさを判ずることは出來ぬ。

つづいて拜謁に出掛けた時の事を假想して見た。陛下は私の前に足を駐められて、何か言葉が出る。この場合には、言語を謹んで、十分氣を張つてお答しなければならぬ。私の因業な臆病心は、少しでも見慣れぬ人の前へ出るとすぐに騒ぎ

1752(41)

出すのだから、果して佛蘭西王の御前で平然としてゐられるであらうか。霎時の間でも適當な用語を選択する餘裕があるであらうか。自分の嚴肅なる主義を放擲せずにかかる大君主の優渥な思召に感激してゐるといふ心持を表し得るであらうか。慰勞の賞詞の中には、必と大層な有りがたい意味が含まれてゐるに極まつてゐる。豫め旨い答辭を用意して行かうと思へば、陛下の賜はる言葉が前以つて確かに知れてゐないと都合がわるい。縦し折角考へて置いた所で彌よ御前へ出たとすると、其の言葉が、一つも慥ひ出せないことは知れてゐる。その場合、滿廷の朝臣達の眼の前で、苦しまぎれに若しいつもの粗雑な言葉を口走つたとしたら、甚麼事になるであらう？ その危さに駭き、怖れ顫いた。もう甚麼ことがあらうと、然ういふ場所へは決して出まい。この覺悟をしつかり極めた。

疑ひもなく受けられた年金を私は失つた。が、それと共に、身の上に墜ち來る筈の軛をも脱れることが出來た。眞理、自由、勇敢、永遠にそれらと訣別を告げたなら、何の顔提げてこの後不偏無私の宣傳者になることが出來ようぞ。若しその年金を受けるとなれば、唯胡麻を摺つてゐるか、然もなければ口を噤んで居るより

1752(41)

爲方がなかつたのである。それで尙だ其の年金の支給に就いては、保障をしてくれる人があるとも無いとも解らぬ。見苦しい摹似をしなくてはならず、種種の人に頭も下げて行かずばなるまい。一圖にその恩典を取り逃がすまいために、寧ろそれに關係せぬよりも、どの位無駄な心づかひをして、どの位餘計な、可厭な思ひをしなくてはならなかつたか知れぬ。であるから、この恩典を斥けるのは、つまり自分の主義と一致する行爲で、眞理のために形式を犠牲にするのであると信じた。この話をグリュムにしたが、別に反對するらしくもなかつた。外の人達には病氣と言ひ觸らして、其の翌朝すぐと此處を去つた。

私が抜け出したと聞いて、それは噂が出た。一般からは惡し様に罵られた。私の心持は到底外の人達に解される道理がない。莫迦な思知らずもあつたものだ。然ういふ後言を利く者があつたのも無理はない。俺なら然うはすまい、などと考へてゐたやうな人達には、是がために別に嫉妬を燃させることがなくて済んだ。

翌日ジュリョットから報知が來た。私の作品の成功に就いて細細と書いたうへに、陛下御自身が盛んにそれに熱狂せてゐられるといふことを附け加へてあつた。

その一節に、陛下には終日吟聲を絶ちたまはず、しかも廣き國中に、二人とはあるまじき濁みたる御聲高らかに、*J'ai perdu mon serviteur ; j'ai perdu tout mon bonheur.* などと物せさせ給ひ候。そして最後に二週ぐらゐ経てば「卜者」の曲をもう一度興行する。今度は第一回目の十分な成功を、一般公衆の眼に翹へるつもりだと書き添へてあつた。

それから二日経つて、午後の九時頃、いつもの様に夕飯を喰ひにエビネエ夫人のところへ行かうとすると、丁度その戸口で一臺の貸馬車と摺れ違つた。馬車の主が手招ぎして私を呼ぶやうであるから、傍へ寄つて行つて見ると、デドロオであつた。例の年金の事を哲學者にしては不似合なほどの熱心を見せて話し出した。王の拜謁を辞退したことに就いては、彼も強ひて責める氣はなかつた。しかし、年金まで棄てて顧みないのは、冷澹も太甚しいではないかと言つて、おそろしく詰責した。そして言ふには、幾ら君自身が無私無慾を招牌にしてゐるからと言つても、テレエズ母子の者の身になつて見たら、君だと言つてそれでは濟むまい。二人の者に麪包を供給するためには、差間のない限り、所有機會を捉へるのが君の義務だ。

1752(41)

1752(41)

而も、今なら未だ斷乎年金を拒絶して了つたと言ふところまで行つてゐないのであり、向うの方は今でも其の氣がないでもない容子だから、何とか方法を考へて、とにかく此方から願ひ出て、金が下賜されるやうに一つ乗り出して見ては奈何だ。と、餘り熱心に勧めるので、私も心は動いたが、とても此の教訓には届することが出来なかつた。で、この問題から、到頭私達の間に一場の争論が始まつた。是がそもそもデドロオとの喧嘩の最初であつた。私達の喧嘩は、何時でも斯うした種類の事に極まつてゐた。斯う斯うするのが、君の義務ではないかと向うが猛り出すと、私は、那樣事が何て義務な事があるものか、と言つて反對をするといふ風であつた。物別れになつた時分は大分遅かつた。私の方では一緒にエビネエ夫人の食卓へ伴れ込まうとしたのであつたが、彼は可厭がつた。自分と懇意な人達は、また互ひに懇意にさせたいといふ私の希望から、デドロオを夫人に遇はせようとして毎度どのくらゐ骨を折つたか知れぬ。或る時などは、夫人を伴れてデドロオの處まで行つたことさへあるのに、彼は扉を閉め切つて、私達に門前拂を喰はすやうなことをした。彼はどうしても夫人に遇ふと言はない。而已ならず、口を極めて夫人

の事を罵つてゐた。でも私が夫人との間に、またデドロオとの間に、不和を生じてからは、その二人は自然と親密になつて行つて、夫人のことを噂するにも、彼は實に讚めちぎつた物言ひをした。

その時からデドロオとグラムが、お傳さん達を私から引き離さうと圖つてゐた。彼女達が樂な身になれないのは私の無責任から、何時までも一緒にゐては末の見込みの立つ氣づかひはあるまいと諷したらしい。私と別になるなら、鹽の小賣店でも煙草店でも出させてやると言つて、頻りに奔走してゐた。その資金は皆エビネエ夫人の手から出させようとするのであつたが、私は未だにその人達の考が解らぬ。未だその上に二人は、デックロオとオルバクをも味方に引き込まうとした。が、デックロオだけは奈何しても肯かなかつた。その時でも、私は然ういふ同盟の出来かかつてゐるといふことは微と耳にした。けれども、明かにそれを知つたのは、大分経つて後のことであつた。友人達が盲目にも無考にも、身體の健れない私をば、無理に寄る邊ない孤獨境に押し遣つて、可傷しい状態に沈ませるやうな手段を、反つて私に幸福を與へるものとても想つて、精々と働いてゐるのが、實に悲しかつ

1752(41)

た。

## 一七五三。

次の謝肉祭に、下者は巴里で興行された。それまでの間に序樂も間曲も十分に爲上げることが出来た。版になつて出たあの間曲は、もとは初から終まで、所作のある續き物で、自分だけはごく面白い畫様になると信じてゐたものであつた。ところが、その考をオペラ座へ持ち出してみると、誰もなる程と言ふ者が無い。爲方がないから、樂譜も舞踏も、通り一遍の物に壞して了つた。著想は面白いが、然ういふ譯で舞臺の美を損せぬ範圍で、つひ一通りの出来に止つた。ジェリョットの宣敎調を削つて、そのかはりに最初自分で作つたのを嵌め込んだ。版になつたのは、即ちそれである。この宣敎調は實のところ多少佛國風があつて、俳優の口から溢りしぶり出て來るのだが、別に聽衆に不快を覺えさせるほどでもなく、咏嘆調と同じく無事に行つて、一般人の耳には、相當によく聽かれたやうであつた。この曲を愛護

1753(42)



してくれたデククロオにこれを獻呈して、同時に是が自分の唯一の獻呈であるといふことを發表した。けれども彼の同意を得て、第二回の獻呈をした。しかし、誰にも獻呈しなかつたより、然うした例外のために一層私から尊重されたやうに彼は思つたらう。

この作曲に就いては、いろいろの逸話がある。が、それよりもつと重大な事件が控へてゐるから、緩りと細かいことを話す暇がない。それは又何時か補遺の中で言ふとしよう。唯次の事だけは、後の事件との關係が少くないから、言はぬ譯に行かぬ。私は或る日オルバック男爵の室で、樂譜を檢べてゐた。いろいろな曲を見て了つた時、男爵は一冊のクラヴサン曲集を出して來て、

「これは皆我が輩が作曲させたものばかりで、樂趣のすぐれた、しかも唱つて面白いのが大へんにある。我が輩の外には誰もこれを知つてゐる者がなし、見せようともしないんだ。君は孰れでも佳ささうなのを抜いて行つて、間曲の中へ嵌め込んではどうだね。」

と言つた。私の頭の中には、咏嘆調や交響體の主題が、捌し切れぬほど澤山溜つて

1753(42)

1753(42)

ゐたから、其の本の中から何か貰ひ受けたいなどは、些とも考へなかつた。けれど、強ひてと言はれて見ると、爲方なし御機嫌取りに、牧歌を一曲擇り出して、それを節畧したのを三部曲に改して、コレットの夥伴の登場に使うことにした。幾月か経つて、卜者がまだ演じてゐる頃に、グリムのところへ這入つて行くと、多勢がクラヴサンの周圍に集まつてゐた。その中からグリムが起つて迎へに出た。何心なく譜面臺の上を見ると、オルバック男爵が所持の、あの同じ曲譜集が其處に載つてゐて、而も開けたところには、丁度この間男爵が、この本は決して我が輩の手から外へは出さぬと誓つて、無理に私に抜き取らしたその同じ牧歌が出てゐるのだつた。それから又後に、エビネエ氏の宅で音樂會のあつた時も、夫人のクラヴサンの上に、やはり其の本が開いて載せてあつた。グリムも其の外の人、この唄の事は何とも私に言はなかつた。今私が自分の口から、こと更に茲で斯ういふことを言ふのも、實は迥と後になつてから、村の卜者は私の作でないといふやうな風評が一時世間に傳はつて來たからである。私は世に在る如き惡達者の作曲家とは異ふから、若し私に「音樂辭典 Dictionnaire de musique」の著作がなかつたら、他は必と私を作曲など

の出来る人間でないと思つたに相違ない。

「ト者」が興行される少し前の事であつた。折ふし伊太利亞滑稽歌劇の一連が巴里へ乗り込んで來た。早速オペラ座を貸すことになつたがその結果に就いては、誰も豫想するものがなかつた。それらの曲は多く野卑で、殊にまだ鍛鍊の足りない管絃樂部は恣まに演奏の曲を壞して行くのであつたけれども、それが到頭佛蘭西のオペラに向つて、永久に償へない打撃を加へるやうな事になつて了つた。兩國の異なつた曲趣を、斯うして同じ日に、同じ劇場で聽いて比較するといふことが、佛蘭西人の耳を開けた。生き生きとした印象の鋭い、この伊太利亞の曲を聽いたあとでは、誰も佛蘭西曲の倦怠い、疲れたやうな旋律に耳を貸すことが出来なくなつた。伊太利亞のが濟むともう我々と看客は歸つて了つた。それゆゑ座の方では餘義なく番組を變へて、伊太利亞のを切へ廻すことにした。「エグレ Egre」、「ピグマリオン Pygmalion」、「シムルン Le Sylphes」と取り替へ引きかへ突著けて見たけれども、なかなか敵手にもなりかねた。唯一つ「村」のト者だけが、ともかく踏みこたへることが出來た。而も「女中頭」*La Serva Padrona*の演ぜられた後でさへ好評を得た譯者云。

1753(42)

1753(42)

此の曲は伊太利亞の名匠ジョヴァンニ・バッチスタ・ペルゴレシ Giovanni Battista Pergolesi の傑作曲。伊太利亞歌劇史の上では、エボック・メイキングのものと稱せられる。私が自分の間奏を作曲してゐた時には、實際如彼いふ曲の印象が頭に一ぱい有つて、言はば其處から暗示を得たのであつた。そして私のと一緒に、然うした伊太利亞曲を並べて演ずることにならうとは、實に意外であつた。若し私が剽竊したのだつたら、その時直に檻樓を出して、どんなに赤恥を掻かされたか知れぬところであつた。ところが那樣虞れは些ともなかつた。私の曲の中には、是ばかりも摸倣の痕跡が見つからなかつたから、人人の失點捜しも徒勞になつた。而已ならず、渾べて私の歌曲は、其の原據と想像された曲と比べて見ても、全然新しい、——例の私の發明した音符と同様、前例のないものであるといふことが判つた。若しモンドンザルなり、ラモオが、私が受けたやうな試験に遇はされたならば、二人ながら散散な痛傷を負うて遁げ出したところだ。

滑稽歌劇の優人連は、伊太利亞音樂のために、熱心な歸依者を得るやうになつた。巴里全市は眞二つに分離して、何か國政か宗教上の大問題にても出逢つたといふ

1753(42)

風に激烈な競争を見せた。片方は貴族や富豪や婦人達が組織して、頭数も多く、殊に優勢な位置に立つて、佛國固有の音楽を擔いでゐた。片方は活氣に満ちて鼻息の荒い熱心な組で、これは眞の鑑賞家、黒人筋といふやうな側であつた。この小人數の一隊は、オペラ座で王后の御座の丁度眞下に陣取つた。もう一つの大きな部隊の方は、士間から棧敷にかけて布置されて、本部は王の玉座の眞下にあつた。此の二派に名をつけて、一つを王黨、一つを王妃黨と言つて當時話しかつたのは、斯ういふ事から始まつたのだ。兩黨の軋轢が烈しくなつた時には、いろいろの冊子が配られた。王黨の方から擲楯ひに來ると、「小預言者 *Le petit Prophète de Boemischbroda*」を出して、それを捻ぢ伏せて了つた。また小理窟を列べ立てて來ると、今度は佛蘭西音楽に就いて *Lettre sur la musique française* でそれを粉微塵に打碎いて了つた。この二小篇、一つはグリュムの手になり、あとの方は私の書いたもので、それだけが當時の激戦の記念として残つた。その外の成行は全くわからぬ譯者云。論戦が久しく結んで解けなかつた間に、斯ういふ類の小冊子が六十部以上も世に出た。

「小預言者も、長いこと私の書いた物だと言つて、何と言つても世間ではそれに極

1753(42)

めて了つてゐた。けれども、彼等はその説を冗談に看て了つたから、書物の筆者には何の禍も落ちなかつた。ところが、佛蘭西音楽に就いての方は大分話しくなつて、正しく自國の音楽を侮辱するものだと言ふので、全國民が蜂起した。この一小篇が喚び起した不測の影響は、タキツス Tacitus を煩して書いてもらふほどの價値があつた。折から議會と僧侶の間に争端の開けた時であつた。議會は丁度解散になつて騒擾さは沸騰點に達した。何事も來るべき暴動を語らぬものはなかつた。其處へ私の小冊子が出た。と、外の一切の紛争はばつたり熄んで了つて、人人は唯佛蘭西の音楽が存亡の秋に落んだといふことばかりを思つた。であるから、國民が暴動を起せば、それは私に對してである。その怨みの餘波が、今でも尙消え残つてゐるくらゐ、私は皆から目敵にされたのである。バスチイユへ投り込まうか、流刑にしようかと、その審議で政府は取り込んでゐた。此處で若しもヴオアイエエ氏譯者云。 *Marc-Pierre de Voyer, comte d'Argenson*. 一六九六—一七六四。當時の首相アルジャンソン侯の兄弟で政客。藝術のアマツウルとしては常に衆に先んじたが、那樣大人氣ないことがあるかと言つて押し退めなかつたら、逮捕狀が私の頭上に

1758(42)

落ちて来たかも知れなかつた。起るべき國內の暴動も起らずに済んだのは確かに私の小冊子の所爲であつた。と聞いても、人々は皆私が夢でも見てゐるやうに思ふだらう。けれども、事實は事實だ。この事があつてから今日まで、未だ十五年と経つてゐないのだから、今でも巴里中の人たちは、皆證人になることが出来る。自由は束縛されなかつたけれど、容赦なく恥辱を被せられた。生命さへ危かつた。オペラ座の管絃樂部の連中は、芝居の歸途に私を暗殺しようといふ、可憐しい企を起した。その事が私に聞えた。しかし、それがために私は反つて前よりも繁く其の座へ顔を出すやうにした。私に好意を寄せてゐる彼の銃兵の士官アンスレエ氏が、彼等の隠謀の裏を掻いて、私には知らせずに、護衛の士卒を見えがくれに跟けてゐたといふことを、餘程経つて聞き知つた。丁度オペラ座が市有になつた時であつた。巴里市長が手はじめの功績に、無法な爲方で無料入場の私の特権を褫ぎ取らうとした。それは奈何したかと言ふに、私が芝居へ出掛けて行く處を待ち受けて、人の多勢集つた中で、無料の入場は許されないと、言つて逐ひ返さうとするのであつた。悄悄引き返すのは、侮辱を全うさせるわけと思つて、面白くはな

1753(42)

かつたが、わざわざ切符を一枚買つて這入つた。最初私が自分の作を此の芝居の管理者に譲つた時の契約では、外に報酬としては何も要らぬ、唯永代無料入場が出来ればよいと言ふのであつたから、斯ういふ仕打は、實に黙止すべからざる非曲と謂はねばならぬ。何故といへば、無料入場は一般作者の特権であり、且私は然ういふわけで、二重の資格でそれを持つてゐた上に、尙特にデククロオに立會をさせて、て約定を取りかはしてゐたのだもの。座の方からは報酬として、請求もしない五十ルイ(約計五百圓)といふ金を送つて来たのは事實である。が、それとても、規定の報酬額から見れば、言ふにも足らぬほどのものであることは固より、正式に約定書を取り替はして得た、それとは全く無關係な入場權とは、何等の類似點もないものであつた。この仕打の底には、偏頗と殘暴とが雜居してゐることは明かであつた。世間ではをりふし私に對する惡感情が極度に達してゐたにも拘らず、皆それを餘りな爲方だと言つて、申し合せたやうに憤慨した。前の晩には、さんざん私に侮辱を與へた人達も、今日は芝居の中で大聲出して、この作者には十分の資格があり、しかも二人分をも要求し得べき權利があるのに、それを奪り上げるとは汚辱だ、と言

つて吹鳴り立てた。 *Ognuniama in giustizia in casa d'altrui* (他人の事となると、人は正義を重んずるものである)といふ伊太利亞の諺があるが、なる程と思つた。

契約を履行しないといふのなら、私の探るべき手段は、自分の著作物を取り戻すより外になかつた。その件に就いて、オペラ座の當事者たるアルジャンソン Aragoni son氏へ手紙を書いて、囁の音も出せぬ程の辯難をも添へて送つたところが、兩方もその儘返事も効果もなしに終つた。この不正漢の無言で居る小面憎さが、ぐつと癢に觸つて、今まではアルジャンソンと言へば、人物も増しな、一とほりは腕も利く人間と思つてゐたのが、もう何でもなにもになつて了つた。斯ういふわけ、オペラ座は、私へ當然の報酬を横奪つて置きながら、私の作をぢつと握り込んで放さなかつたのである。弱者が強者に向つて斯ういふことをすれば、直ちに竊盜罪を構成するのだが、強者が弱者に向つてする時には、唯、他人の所有物を私用したといふぐらゐることと濟むものと見える。

此の作物が生み出した金錢上の收得は、他の作者の手に這入る物から較べて見ると、その四分の一にも當らぬほどのものであつた。それでも私に取つては數年

1753(42)

1753(42)

間の生活を支へて、不景氣つづきの樂譜謄寫の理合せをするには十分であつた。王からは百ルイ(約計一千圓)の下賜金があつた。ベル・ヴェウ Belle-Vue での開演は、ボンバヅウル夫人自身が、コランの役に扮した時で、其の折同夫人から五十ルイ下がつた(譯者云。ベル・ヴェウは美觀の義。巴里の南西セエツル *Sèvres* に近く、ボンバヅウル夫人の造營に係る美しい城の名。その城は革命の禍難に没びた)。オペラ座から來た五十ルイ、それに刻版料として、ビッソオから受け取つた五百フラン(約計二百圓)もある。勞作の時間から言へば、纔と五六週間に過ぎなかつたのであるが、種々な災難に出遭つたり、自分の愚鈍に邪魔されたこともあつたのに、斯うして貰ひ集めた金額は、この後私が沈思の二十年間、勞作の三年間を犠牲にして作りあげた「エミール」から得たものと大した差はなかつた(譯者云。「エミール」の原稿料のことは後の第十一卷、一七六一年の條に出る)。それはともかく、この曲から得た金錢上の慰安も、一方では、端なき苦惱が私を捉へるやうになつたため、結局餘ほど高價のものについた。これがために陰密な嫉妬心が私の上に懸かつて來て、遂か後まで消えなかつた。

此の作が成功した後は、グリムにも、デドロオにも、その外相識の文藝家の何人にも、今まで自分の期待してゐた懇親と、快活と、會合の情味とを再び見出すことが出来なくなつた。オルバック男爵の邸へ這入つて行くと、すぐ會話が壞れて了つて、彼處此處へ小さい組が分れわかれに割據の狀態互ひに窺窃と私語き合ふばかりで、私一人は話相手もなく、手持無沙汰に兀然としてゐた。私は長いこと此の可憤しい除外を堪へ忍んだ。それに男爵夫人が、いつにかはらず優しく可愛く私を待遇すのにつひ牽かされて、堪へ得られるかぎりその良人の不作法を我慢した。が、或る日彼は何の理由も口實もなしに、突如私に衝つ蒐つて來て、狂妄の餘り私を叩き出すやうにした。私も二度と此の邸に足を入れない決心で出て行つた。其の場にはデドロオも居合したけれど、一言も口を利かなかつた。もう一人居たのがマルジャンシイ Marganey、この人はそれから後しばしば此の時の私の出かたが穩かて優しくて、敬服したといふことを話してゐた。然ういふ目に遭はされは遭はされたが、それがために、男爵や、男爵家のことを話すのに、決して尊重した態度を忘れることはなかつた。でも男爵の方は、何時でも私を辱しめるやうな蔑むやうな調子で、

1753(42)



人夫クッパルオ

名を呼ぶのでも唯、*oe petit enistre* (學僕)とより言つたことはなかつた。併し私が男爵や、男爵と關係の深い人々に向つて、聊かでも失敬な事をしかけたと言つて誣ひる事ばかりは出来なかつたらしい。此處で初めて私の預言が適中して、杞憂が杞憂でなかつたことを確めた。考へて見ると、私が本を書く、——立派なよい本を書くといふやうなことは謂はゆる私の友人たちに取つて見ても、彼等も始終やつてゐる事であるから、私を咎める材料にはならぬ。だから私がさういふことさへしてゐれば、文句はなかつたのかも知れぬ。がしかし、私がオペラの作をした、しかもそのオペラが華々しい成功を収めたと聽いては、到底静としてゐられなかつた。それも其の筈で、彼等の中には誰とて那樣隠し藝の出来さうな人物もなし、又那樣名譽を擱まうとするほどの技師のある者もなかつたからである。斯うして友人達が熾んに嫉妬の煽を揚げてゐる最中に唯ひとり超然と取り済ましてゐたのは、デウクロオで、しかもますます私の方へ心を傾けて來るやうに見えた。彼は私をキノオ *Quinault* 嬢のところへ案内した。其處ではオルバック家に無かつた、尊敬、鄭重、親愛などといふものをしたたか見出して、前の口なほしをした。

1753(42)

「村のト者」がオペラ座で興行されてゐる間に、コメディ・フランセエズの方にも作者に取つて有望な問題が起つた。七八年もかかつて私の「ナルシス」の曲が、まだ伊太利亞座で實演の運びにならなかつたので、その座の俳優の拙い佛蘭西語で演られるのも業腹だし、寧ろ佛蘭西座で引き受けてくれればと思つて、その事を新しい知己のラヌウ La Noue といふ嬉劇俳優に話した。ラヌウは誰も知る俳優としても、作者としても立派な人であつた。彼は「ナルシス」を読んで見て、是ならよいといふので、早速作者名を匿したまゝ舞臺に掛けようとした。その間に此の座へ無料入場の特許権を取つてくれた。他の二座にも増してテアートル・フランセエは私の格別所好な劇場で、甚だにか嬉しく思つたらう。「ナルシス」の人氣は良かつた。作者は無名氏にして置いたけれど、俳優やその外の人達にも、随分私といふことを知り抜いてゐる人は少くなかつたやうである。ゴオサン Gausin 嬢とグランヴァル Grandval 嬢とが若女形を勤めた。私自身は何處となくこの曲の演法に喰ひ足

1753(42)

らぬところがあるやうに感じたけれど、まるで物にならぬといふほどのこともなかつた。それにしても驚くほどの看客の義侠には、私も大きに撲たれた。何にしる初から終まで、耳を澄まして静肅に聽いてゐたは愚か、二回も繰り返して演ずるのを、些とも怠屈らしい容子を見せず、我慢してゐた。肝腎の私は、初の一回で閉口して了つて終まで辛抱が出来なくなつたから、小屋を出てプロコオプ Procope のカフェへ飛び込んでみると、やはり怠屈凌ぎに、ポアシイ Poissin はじめ、いろいろの人達が來合してゐた。その店で私は、ペ、カウイ Peccati (我過矣) を叫んで、作者の無名氏は自分であつたことを、恐縮した體で、むしろ得意の體で、自己白した。これは誰にでもある例だといふやうなことを附け足した。失敗に終つた歌作の作者が、自分から名を名乗つたといふことは、人人を感嘆させた。私もそれ程苦痛を感じなかつた。しかもそれを自己白するに至つた勇氣を思ふと、幾らか自愛心に傷のついたのも痊癒する心地がした。そして此の場合、若し私が沈黙してゐれば、くだらなく羞恥んでゐなければならなかつたのを、匿さずに言つて了つたので、却つて自我が一層擴大されたやうな氣がする。けれども、舞臺に載せるとあまりぞつとしない作であ



つたが、読んで見ればさほどでもないと思つたから、それを印刷させることにした。その序文は、自分でもよく出来たと思ふほどのものであつた。その中で、是までよりももう少し深く、自分の持論を述べて置いた。

1753(42)

その持論を限なく吐露するために、最も大切な論文を書く機会が来た。それはこの一七五三年といふ年に、デジヨンのアカデミーが「人類間の不均等の原因 L'Origine de l'inégalité parmi les hommes」といふ題を出して、又論文を募集したからである。立派な問題と思ふにつけても、克くアカデミーがこれまでに思ひ切つたものが出せたと内内驚かされた。しかし、アカデミーに此の問題を出すだけの勇氣がある以上は、私にもこれを論ずる勇氣がない道理はない。後た應募と決心した。緩りこの大問題を研究するために、一週間ばかりサン・ジェルマンへ遊びに出掛けた。同行はテレエズと、宿の主婦と、もう一人友達のと、斯う三人であつた。主婦は氣爽者であつた。今度の遠足も、私の生涯中の最も愉快なものの一つに數へら

1753(42)

れる。毎日晴天續きであつた。三人の氣爽な女達は、一切の面倒から入費まで忠實に取り賄つてくれた。テレエズは二人の女友と樂し氣に暮してゐる。私も心に榮る憂のないままに、食事の度ごとに羽目をはずして笑ひさざめてゐた。その餘の時間には森の中に彷徨ひ入つて、其處で人類原始の状態といふものは、彼か是かと探りつ求めつしてゐる間に、心は縦まに歴史の流れを漂うてゐた。人間が作り設けた儼い虚偽の皮を引き剥いてみた。彼等の本然性を赤裸に曝け出して見た。「時」と物が進むに従つて、その本然性の顔れ出す有様を思つた見た。人間の禍の眞の源は、彼等の謂ふ「進歩」といふものの中に潛み隠れてゐるのであることを教へてやりたくなつた。自然人 (l'homme naturel) と人間人 (矯飾を加へた人間の意) l'homme de l'homme とを對照して考へても見た。斯うして考に耽つてゐる中に、私の靈は何時しか高調して、終には神明の座に迫り行くやうに覺えた。そしてその位置から遙かに下界を瞰わたすと、自分の同輩は誰も誰も、偏執か、過誤か、不幸か、罪惡か、いづれかの邪徑の上を迂路つてゐる様子がまざまざと眼に映るので、聲を揚げて斯う叫んだ。しかしそれは幽微な聲であつたから、彼等の耳には達かなかつ

たてあらう。

Insensés, qui vous plaignez sans cesse de la nature, apprenez que tous vos maux vous viennent de vous! (心の麻痺したる者よ、罪を自然に嫁することを罷めて、一切の悪は皆汝等の自ら招き寄せたるものなることを思へ!)

斯ういふ感想が集まつて、遂に「不均等論 Discours sur l'inégalité」となつた。この論文は他の孰の作よりも一ばんデドロオに好かれたもので、またこの作に對する彼の助言は、一ばん私に取つて有用なものであつた原注。私がこの論文を書いてゐた時分には、デドロオとグリムの大隠謀を未だ毫も疑ぐるやうなことはなかつた。さもなかつたら、いかにデドロオが私の書く物にあれ程酷辣な調子、あれほど陰險な氣分を吹き込んで、私の信頼に背いたかを見破ることは造作もなかつたのである。現に彼の指導を離れてからは、然ういふ調子や氣分は、もう跡方もなくなつたのでも解る。デドロオといふ哲學者は、逆境に居る者の愁訴に對して耳を掩ふほど酷薄な人間であるから、然ういふ人の勝手な議論には、彼一流の偏癖がある。未だその外にも、もつと調子はづれの酷い奴を寄越したけれど、それを私は採用す

1753(42)

1753(42)

る氣になれなかつた。しかも然ういふ陰險な氣質は、全くヴンサンヌの牢獄の裡から得來つたのであらう。彼のクレエルヴァル(Chival)にもその痕跡は少からず見えてゐる。斯う私はよい意味に解釋して、彼の氣質に惡意が含まれてゐるなどとは、間違ひにも思つたことはなかつた。しかしこの論文を讀んで、正當に理解し得る者は、廣い歐羅巴に一人もなかつた。萬一理解し得る者はあつても、それを口にするには、誰も憚つたらしい。これを書いたのは、懸賞募集に當選の榮を望んであつたから、送ることは送つたけれど、固より萬一を僥倖するに過ぎぬ事ではあり、且アカデミーの懸賞論文といふからは、こんな風の書き方をして無事に通過することは、まづ見込のない方であつた。

今度の轉地と爲事とは、氣分を安め、健康を進める上に莫大の效果があつた。幾年前尿閉をわづらつて、醫者の手に我が身を捨て果てて了つたときは、病氣が快くなりどころでなくて、體力體質ともにめちやめちやに破壊された。サン・ジェルマンから歸つて來た時には、その體力が大ぶ恢復して、氣分がぐつと良くなつたやうに感じた。この暗示に力を獲て、このまま全快すれば可し、縦し死んでも醫藥は決し

1753(42)

て用ひまいとの覺悟から、醫者や藥に永久の訣別を告げて、氣分のすぐれぬ時は静と家に籠城と構へ、元氣のよい時はすぐと外へ飛び出すやうにして、その日その日を過してゐた。巴里人と一緒になつて、詐術の多い空気を呼吸することは、私の屑しとせぬところであつた。文藝家連の陰險手段、大人氣ない唾み合、作品に誠實の氣の關如してゐること、氣位の悪く高いこと、——いづれも胸を悪くさせ、反情を喚び起すものばかりであつた。友人間の交際でさへ、柔和しみといふものもなく、腹の底をうち割つて見せるといふこともなく、唯、齟齬と亂雜な生活を追うて行くことは私には堪らなく不快で、それがために田園の生活がして見たいと、そればかりを焦れ慕ふやうになつて了つた。けれども職業の關係から、然う出来ぬと諦めはあきらめても、せめて爲事の餘暇だけなりとも、その眞似をする量見て、幾月かの間晝飯が濟むと唯一人ブウロオニエ、Boulogneの森の中へと迷ひ入つて、いろいろ書いて見たいと思つてゐる本の筋などを考へながら、夜に入る頃まで家へ歸らなかつた。

1754(43)-1756(45)

## 一七五四—一七五六。

當時嘗ならぬ關係のあつたゴオフクウルが、爲事の都合で餘儀なくジッネエツへ旅行をせねばならぬことになつて、私にも誘つてくれたので、それに同意した。未だ身體の工合が眞箇でなかつたから、世話する女が一人是非必要であつた。で、テレエズが私と一緒に出て、母親だけ留守番をすることに極め、すべて支度が出来て三人で出發したのは一七五四年の六月であつた。

今度の旅行には特に注意せねばならぬ譯がある。私の持前として、四十二歳の今日まで少しも隔てなく、また何等の障害もなしに、縋つて來た信頼の上に、始めて打撃を受けるやうな場合に出會したからである。私達は一臺の安馬車を瘦馬に牽かせて、そろそろと旅行を始めた。私だけは折とすると、馬車を降りて、一人徒歩で歩いて行くことがあつた。その中、半分ほどの處まで來たかと思つた時、テレエズが急にゴオフクウルと二人きり馬車の中に残されるのは可厭だと言ひ出した。然う言つても私は平氣で、相渝らず自分だけ徒歩を續けて行くと、彼女もつひには

1754(43)-1756(45)

降りて来て、私と連れて歩き始めた。そんな氣儘があるものと叱りつづけて、容易に私は承知しなかつたが、到頭彼女は言ひにくさうにして、氣儘の理由をうち明した。それを聞いた私は夢の中にゐる心地がした。もう早六十といふ歳を越して、足腰も立ちかねるほど、歡樂の贊となり放れた親友のゴオフクウルが出發の初から私の所有の女、それも美しい若若しいのもあることか、少少費の入りかかつてゐる女を、一生懸命墮落させようと企んでゐたと聽いては、呀と言ふ外はなかつた。或は自分の持つてゐる財布を出して、テレエズの鼻の尖で誇示すとか、猥褻な本を讀んで聽かせたり、その中の畫を見せつけたりとか、いろいろ然ういふ風の下等な恥づべき所作をして、どうにかして彼女の心を動搖させようとしたものである。その内に一度などは、テレエズが口惜し紛れにその本を馬車の戸口から取つて投つたことさへあつた。それに出發の最初の日に私が劇しい頭痛がして、夕食もせずに寢床に這入つた間に、彼は精一杯猥褻な惑はしをテレエズに見せた。妻をも自分をも安心して任せて置いたその人らしい容子は些しもなく、宛ら人面獸身の動物としか思はれぬやうな舉動を見せたといふことまで知れた。驚かさ

1754(43)-1756(45)

るを得ぬではないか！ 私に取つて全然新しい苦惱でなからうか！ 今まで私は友情といへば、必と可懐しい、尊い感情が随伴となつて、その魅力を造り上げてゐるのだとばかり思つてゐた。その私が、斯ういふ經驗をおぼえて、餘儀なく友情と厭惡とを結びつけた。愛し愛されたその人から、自分の尊信を引き剝さなければならぬことを、生れてはじめて知つた。因業な老人は、私には何喰はぬ貌をしてゐる。テレエズを庇ふためには、苦い貌を老人にして見せるわけにも行かず、ただ自分の心の奥に、是迄おぼえの無い、面白からぬ感情を藏して置くより爲方がなかつた。友情のイリ、ジョンは、優しい、聖いものであつた！ そのまぼろしの面帕を私の兩眼から始めて剝して取つた者は、ゴオフクウルであつた。それから以後再びその面帕を懸けようとしても、多くの殘忍な手は、決して然うはさせなかつた！

里昂でゴオフクウルと別れた。母の住居のぢき傍を通るのに、顔も見ずには奈何しても行きかねたから、サヴァアの方へ這入つて見ようとしたからで。さて彼女に遇ふことは遇つたけれども……噫！ 何たるその境涯ぞ。何たる淪落ぞ！

ひかしの彼女の美點が、どのくらゐ残つてゐたらう？ ポンヴェル師に紹介しても

1754(43)-1756(45)

らつた時分、あれほど花やいてゐたワレンヌ夫人と、この女とは、そもそも同一人なのか？ 私の胸はどのやうに痛手を負はされたらう？ 彼女の執るべき唯一の手段は此の土地を去るより外に爲方がなかつた。今までも幾度となく、私から手紙が行くたび毎に、私もテレエズも、お母さんの利益になることならば、生涯を犠牲にしても厭はぬ心であるから、どうか私の方へ一緒に來て欲しいといふことを言はぬ時はなかつた。それを今又言葉強くして、繰り返し繰りかへし勧めたけれど、何の效もなかつた。例の年金は几帳面に支給されてゐたけれど、久しい間そればかりに依頼して、何等の利益をも收め得なかつた彼女は、私の勧めをも肯かなかつた。私は自分の財布から、僅かの金を出して渡した。其の金は一スツでも彼女の所有になるのではないといふことを知り抜いてゐたから、應分の義務と思ふ額よりも、ずつと少くなつて了つたのである。私がジッネエツで滞在中に、彼女はシンプレエ Chablais へ旅行をして、私に遇ひにグランジ、カナアル Grange-Canal まで來た。彼女は其の旅行を續けるだけの費用に窮した。私の衣兜に這入つてゐる金だけでは、其の目的に不足であつたけれど、ともかくテレエズに持たせて遣つ

1754(43)-1756(45)

た。みじめな母だ！ それでも彼女の心に斯ういふ有りがたい處があつたことを言はねばならぬ。彼女の最後の寶物として、指環が一つ残つてゐた。それを自分の指から抜き取つて、テレエズの指に嵌めてくれようとするのを、テレエズは押し戻して、また舊のと同じに彼女の指に差した。そして、その尊びべき手に直と吻を接けて、溢れ落ちる涙を其の上に漉ぎかけた。ああ！ 私の負債を彼女に償還するには、この場合を外にして何時また出會す時があらう！ 渾べてを抛つて彼女に隨ひ、最終の日まで彼女を擁護し、如何なる運命をも彼女と共にすることは、私の義務であつた。が、その執れをも私は盡さなかつた。私には他に一つの結びつきがあつて、その方への注意が彼女に對する執著の念を甚だ薄くしたかの感じがした。況して然うしたところ、それが彼女の利益になるともならぬとも知れなかつたのであるから。彼女の身の上については、私は只管悲んだ。がしかし、彼女に隨はなかつた。私の一生の間に残して來た悔恨は數多あるが、是こそ殊に痛痛しく、永久に消ゆまじいものであらうと思ふ。その時を始として、その可怕しい無間斷の呵責に身を苦められたことは、私に取つては至當な罰であると觀念した。そ

れてこそ、忘恩の罪が贖はれるのであらう。これで見ると、如何にも私は思知らずであつたやうに思はれるけれど、眞實さういふ人間であつたら、斯うまで心の惱亂する筈もなささうなものだ。

巴里を發つ前に、不均等論の獻呈文を大略書きかけて置いた。それをシャンペリイで書き上げて、日附も其處からのにした。これはいろ／＼の攻撃を避けるためには、佛蘭西や、ジッネエツからの日附にせぬ方がよからうと思つたからである。

ジッネエツに著いてからは、共和的の熱誠な精神の中へ、夢中になつて没り込んだ。實は私が此處へ來たのもそれがためであつた。この熱情は、この土地で受けた待遇の結果として一段高まつた。到る處で大もてにちやほやされたので、全く國粹感情のために、心魂を奪はれて了つた。そして、私が我が祖先のと異つた宗教を奉じてゐるばかりに、此の土地の公民となることの出來ぬのが可恥しくなつて、急に復た舊のとほりに改宗しようと思つた。私は斯う考へた。福音書はあらゆる

基督教徒に共通なものであり、教理の根柢といふものも、末派の徒輩が自分に解りもせぬことを彼是と穿鑿し始めなかつたら、何も多岐多端となる筈の物ではなかつたのである。であるから、何れの國家に於いても、一定の教派を立て、この不可解なる教理を定めることは、一に其の主權者の意思に任せて置いてよいのである。従つてその教理を默認し、法律の定めた教條を信奉することは、國民たるものの義務でなければならぬと、然う考へた。辭典學者連との往來が繁くなつてからも、信念は容易に動かされず、論議や黨争の如きも、もとより自分の忌み嫌ふ所であるから、反つて一層その念を堅くした。人間の研究、乃至宇宙の研究は、其等を支配する窮竟因若しくは大精神を、始終我が眼の前に展げて見せた。聖經殊に福音書を、四十年前から熱心に讀んでゐたところ、本當に其の眞髓を理會し得べき柄でないやうな連中が、耶穌基督に遇つても來たやうに、下らない煩瑣極まる解釋を下してあるのが唾棄してやりたくなつて來た。一言で言へば、宗教の眞の光を蔽はむがために、人間がいろいろと作り設けた、あらゆる煩瑣な注疏や敷衍から脱けて出て、唯其の精髓を掴まうとするやうになつたのは、眞理の洞察に潛心した結果であつ

1754(43)-1756(45)

た。理性の鋭い人間が基督信者となるに二途ある道理はあるまいと気が注くと同時に、すべての儀典教義に關することは、其の國國の法律の權能に屬せしむべきであるといふことをも曉つた。この聰明な、社交的な、平和な意見、そして彼の殘忍な迫害を私に蒙らせたこの意見の結論は、斯ういふことに歸着した。——即ち此のジッネエツの市民になりたければ新教へ改宗して、祖國が定めた教派に復歸せねばならぬといふことであつた。私はいよいよ然う決心して、進んで自分の居た市外の法區の牧師について説教を聴いた。唯長老會へ出る事だけは望まなかつた。但し、此のことは、教規として、なかなかやかましかつたのを、特に私のために其の規程を枉げて、その代り五六名の委員會を召集して、私の改宗の誓願を聽くことにした。生憎宣教師のペルドリオオ Perlinus は私の相識の溫柔しい人で、其の人が偶と思ひ立つて、今度の小集會で私が演説するのを、皆待ち兼ねてゐると、然う言つた。然う期待されて、ひどく胸騒ぎがして、豫ねて準備して置いた短い演説を、夜晝なしに三週間も稽古して出たのに、いざとなるとまるで目眩つて、一言も口が利かれず、終まで最劣等の學校兒童といふ見得で通した。委員たちが何かと話し掛けて來

1754(43)-1756(45)

ても、唯、はい、はいと口の中で返辭するばかりであつた。まづ那樣ことで聖餐式も許され、續いて市民權を回復することも出來た。私は公民や市民だけで組織する守備兵の中に加へられ、又臨時市會へ出て市吏員のミッサール Messager から誓詞を受けた。市會長老會の此の際に私へ與へられた深切政府、市民の懇篤な、行き届いた扱ひ振りに、感謝の言葉も出なかつた。其處へドリック Dalio といふ深切者が、口も息めずに私を引きとめようとしたり、自身の偏向までが手傳つたりして、巴里へはもう歸りたくなくなつた。若し、爲方なしに歸るとすれば、家庭の解散を斷行するか、些細な出入の整理を附けるか、テレエズの兩親に糊口の途を立ててやる位の事をしに行くだけで、それが落著次第、すぐとジッネエツへ引き返して來て、テレエズと二人、此處で樂樂と餘生を過したいといふ希望ばかりに捉はれてゐた。斯う決斷をして、さてそれから愈、出發をするまでの間は、大切な用も抛棄つて置いて、唯友人達とぶら／＼遊んでばかりゐた。いろいろ面白い事があつた。中にも、これは格別と思つたのは、ドリックの父親の方と、その嫁と、二人の息子と、それにテレエズと、斯ういふ連中で、端艇を艤装して、湖水めぐりをして遊んだこ

とであつた。晴れた明い空の下で、満一週間といふものは、この舟遊びで暮してつた。湖水の向う岸の撲たれるやうな眺め、その鮮彩な印象がしつかりと胸に刻まれてゐて、何年かの後に「ヌウヴェル・エロイズ」を書いた時、この印象記を使つたことがある。

ドリウツク一家の人達との外に、ジウネエツで近しくしたのは、ヴェルヌ Verne といふ年若な宣教師であつた。曾て巴里で懇意にしたことがあり、後日はとにかく、此の時は私の方から好意を以つて迎へた。當時は、田舎の牧師、今日では文學教授をしてゐるベルドリオオ氏、此の人は其の後私との交際を避ける風に見えなければ、私に取つてはあの可懐しい温かな會合の折折を憶ひ出すことが、甚だ心に慰まれる原因になつたであらう。ジアラベエル Jalabert 氏は初め物理學の教授であつて、後には市の評議員や官吏にもなつた人である。この人に私は「不均等論」を獻呈文だけ抜きにして讀んで聽かしたら、さもさも氣に入つた風を見せた。リッラ N. Lullin 教授とは其の人の死る迄手紙の往復を續けた。この人は又圖書館へ藏める書籍を、私に取り寄せさせたこともある。ヴェルネ H. Verne 教授には、私の方か

1754(43)-1756(45)

1754(43)-1756(45)

ら十分の景慕と信頼とを捧げたのに、尙且世間並に、私に裏切をするやうになつた。如何に神學者であるからと言つても、人間としての神経が分布してゐるならば、あれ迄にした私の心が解らぬといふ法はない筈だ。シヤッポイ Chapuis といふのはゴオフクウルの番頭なり、相續人でもあつたが、ゴオフクウルを排擠けることを謀つて、忽ち自分が叩き出されて了つた。マルセエド・メジエール Marcet de Mézières は私の父の舊友で、私にも親しくしたが、祖國のために盡した後、戯曲家になつたり、又二百議員の候補者になつたりなどして主義を一變した爲に、他から笑はれながら、死んで行つた。斯ういろいろあつた中で、特に私の多く期待したのは、年若て希望に充ちて、燃ゆるごとき情熱を蓄へた、ムウルツウ Moulou であつた。私への仕打には、時とするといふか、いふか、事もあるたけれど、私の友情には、毫も渝りがなかつたばかりでなく、暴戻な私の敵人と彼との間に結びつきがあるのも厭はずに、何時か私の記憶の辯護人、親友の復讐者となるべき人と思はずにゐられなかつた。

這麼たのしみがあつた一方でも、單獨の散歩の興味と習慣は、依然失はなかつた。湖水の岸に沿うて、遠く遠く獨りて彷徨ひ歩いたこともあつた。然ういふ時にも、



活動好きの私の頭腦は、決して無事ではゐなかつた。腹案中の「制度論 Institutions politiques」も研究した。それは追つて話をする。ブレエ州の歴史も考へて見た。ルクレチアを主人公にした散文劇の脚色も練つた。佛蘭西の執の劇場でも採用されなかつた時に、あくまでもこの不幸な女主人公を上場させる爲に、どのくらゐ骨を折つても、きつと成功させて見せようといふ考を持たせた。同じ頃、ダッキヌを研究し出して、其の歴史の第一巻を翻譯した。草稿の中にそれは這入つてゐる。

ジッネエでの滞在は凡そ四箇月位にもなつたらうか。十月といふ月に這入つてから巴里へ歸つて來た。ゴオフクウルと連れて歩くのがいまいましいから、里昂へは寄らずに了つた。ジッネエへ還るのは、來春になつてからでよいことになつたから、此の冬中は静として爲事をすることにした。爲事といつても例の「不均等論」の校正をすることがあつた。是は今度ジッネエで相識になつたライ Roy といふ書店の手で、和蘭で出版させることになつたからである。この

1754(43)-1756(45)

1754(43)-1756(45)

書物は瑞西共和國に獻呈したが、其の政府には喜ばれる筈がないと思つたから、まづジッネエで甚だ反響が起るか、それを待つて其の市へ還りたいと思つた。ところが結果は面白くなかつた。純粹な愛國の情から出たその獻呈も、唯政府の中に敵を造り、市民の中に嫉視者を喚び起したに過ぎなかつた。其の時の首座吏員であつたシウエエ Chonet 氏から、丁重てはあるが冷い書狀が來た。それは草稿の中の、書翰束の第三號に入れてある。ドリツクやジャラベエルなどからの私信には、嬉しい挨拶の言葉も出てゐたけれど、唯それだけの事であつた。ジッネエ人は誰一人として、此の著作に依つて感じられる熱烈な情を抱ひ者はなかつた。其の冷冷たる有様を見て愕かぬ者はなかつた。斯ういふことがある。或る時クリシイ Clidhy のヂバン夫人の處で、共和國の辨理公使クロムラン Cromelin、それからメエラン氏等と會食してゐると、メエラン氏は四下かまはず、共和國政府は宜しく著者に對して報酬と名譽とを支拂ふべきで、若しそれを怠るなら、政府自らの醜陋を暴露するに外ならぬと、斯う出た。クロムラン公使は腹の底の知れぬ品性の下劣な小人であつた。けれども私を前に置いてあるから、何とも返辭はしない

て、唯一種險惡な濫面をつくつてゐた。その恰好を、デッパン夫人が見て、くすくす笑つた。この著作から得た私の利益といへば、心の満足といふことを除いては、唯公民の名を取つただけであつた。この名前は、最初友人達から附けられて、それがまた公然の名前となつたのであるが、その後私が公民たる資格を辱めたといふので、到頭また其の名さへ失つて了つた。

此の事で失敗を招つたからと言つて、ジッネエツへ隠遁するのを廢しにする氣もなかつた。ところが、或る力強い誘ひのために、その方は中止になつた。エビネエ夫人がシッレットの別荘に翼が無いのを残念がつて、今度澤山な金をかけて建増しをした。或る日夫人に連れられて建物を見に行つた。其の序に、散歩がてら其處から四半リウも先の方へ行くと、公園の貯水池のある處へ出た。此處はモンモラシの森つづきで、見事な蔬菜園が劃られてある。そして其の傍に仙居と名のついた荒廢した一軒の四阿様の建物が立つてゐた。ジッネエツへ族行前、始めて此の住居の状態を見た私は、その物靜かな、いかにも心行くと言つた様子に呀と撲たれた。私は恍然となつて、

1754(43)-1756(45)

1754(43)-1756(45)

「奥さん！ 何て好い住居でせう。私には詭向きの隠遁所だ。」

斯ういふ言葉が我知られず唇を洩れて出た。その時は夫人も別段この言葉を捉まへて何とも言はなかつた。今度二度目に此處へ来て見て驚いたのは、先の舊びた破家が、何時の間にか悉皆見違へるほど新しい、手入れの行き届いた家に変つて了つてゐたことだ。一家三人ぐらゐて暮しをするには、此の上もないやうな處に見えた。これこそエビネエ夫人が私へは無言で、自分の別荘の方へ使ふ用材と職工を幾らかつた此方へ引いて、金は餘計出さずに斯ういふことにしたのであつた。驚いた私の顔を夫人は燭と見て、

「さあ、貴下の隠遁所ですよ。此處が好いといふお見立てでしたから、ほんの微衷で、これを貴下に差し上げたいと存じますの。どうか私を見棄てようなんて罪な考は起さないで下さいましな。」

この時ぐらゐ、烈しい刺戟を受けて酔ひ癡れたやうになつたことは、おぼえがない。私はわが女友の情に溢れる手を涙で濡した。そして縦し此の時すぐにうち負かされて了はなかつたにしても、私の足元は餘程怪しくなつて來た。夫人は固

1754(43)-1756(45)

より何でもかでも意に従はせなければ承知の出来ぬ質で、一刻も速く、急ぎ立つて、様様と手段をめぐらし、いろいろの人を使つて私を屈服させた上に、テレエズ母子まで此處へ運び込ませるやうなことにして了つた。是て私の決心も甘甘と破られた譯になつた。祖國に滞留することは全く思ひ切つて、此の仙居の方へ腰を据ゑることを誓つた。夫人は又新家の造作が乾上がる間に、家具建具類をあれ是と氣を配つて取りそろへて、來春私の移轉すのを待ち構へてゐた。

もう一つ、此の覺悟を助けたのもな原因は、ザルテエルがジッネエツの近くに住居を構へたことであつた。私は斯う考へた。此奴、此處で謀反を起すにちがひない。私共其處へ顔を出すのは、前に巴里から逐ひ立てられたと同じ様な氣風や習俗に、自分の生國ながら、撞著りに行くやうなものだ。絶えず苦しい戦闘を續けなくてはなるまい。して、自分の立場として何が出来るかと言へば、多寡が小煩い、街學家か、羞恥家か、又は不埒な市民か、それより外に、何の知慧もない。斯う考へた。今度の自分の著作物に對してザルテエルから寄越した手紙は、端なくも自分の憂慮を返事の中へそれとなく書き込ませるやうな機會を作つた。そして其の結果

1754(43)-1756(45)

は果して憂慮した如くであつた。其からは、最早ジッネエツを失はれたる市府として見てゐた。そして私は自ら知るの明あるものと氣づいた。若し自惚れて、この此市へ出掛けて行つたところ、屹度颯風に吹き捲られたことは知れてゐる。其の時に此の小膽者が、唯手一つで何が出来よう？ 然も敵手は悪く言ふと傲慢な、金満家の、確乎した黒衣が附いてゐたからではあるが、辯舌にかけても立派な、そして既う女連や青年から偶像の如くに奉られてゐる、然ういふ人間だ。そんな危険な境へ盲目に突進してみたところ、何の功德になるものかと思つて、漫ろに怖毛を振つた。唯性來の平穩無事に、安易を欲して已まぬだけの大ごと守つた。若し是が其の時は私の勘ちがひであつたにしても、今でも尙だ同じ事て私は瞞されてゐる譯だ。ジッネエツへ隱遁してゐたら、或は大した禍は招かなくて了つたかも知れぬ。が熱烈な受郷心を傾けつくしたところで、それが果して國家のために著大な貢獻になり得たか、奈何かは疑問である。

それと同じ時分に、トロンシアンもジッネエツで住居をしてゐたが、少し後に出稼ぎに巴里へ來て、珍からぬ金を掠め奪つた。彼はジッネエツと連れて早

1754(43)-1756(45)

速遇ひに來た。エビネエ夫人は窃と彼に相談したい事があつたが、多忙でその機會が得られなかつた。夫人は私にその事を申し込んだ。私はトロンシオンに勸めて、夫人の邸へ連れて行つた。斯うして私の力で二人は互ひに結びつくやうになつた。それから後は私を犠牲にして、互ひに親密の度を増して行つた。何時でも斯ういふ工合になるのは私の運命なのであらう。自分の友人二人を兩方から結び合せて遣つたと思ふともう其の二人は必と申し合してぢき私に背を向けるやうになる事に極つてゐた。その頃からトロンシオン家の人達が祖國のためといつて隠謀を企んでゐたから、皆一樣にしつかり私を憎むべきであつたらうのに、此の醫者だけは獨り別になつて、長いこと私に好意を寄せてゐた。ジネエツへ歸つてからなども、わざわざ手紙で、圖書館の名譽館員の位置に就かぬかと言つて寄越してくれたことさへあつた。しかし最早私の量見が決つてゐた時であつたから、そのために動かされなかつた。

其の頃また私はオルバック邸を訪ねた。私がジネエツへ行つてゐた間に、フランキエ夫人も、オルバック夫人も、前後して世を去つたと聞いて、それてまた男爵の邸

1754(43)-1756(45)

を見舞つたのである。デドロオから男爵夫人の死去の通知が來たときに、その良人が喩へがたき悲愁に閉ぢられてゐるといふことも言つてあつた。其の心の裡を想ひやつて、私は胸を刺された。私自身にして見ても、この可憐な夫人を奪はれた憾みは決して淺くなかつた。オルバック氏にはすぐ弔慰狀を出した。この哀れな出來事はその、良人に對する私のあらゆる怨を忘れさせた。私は丁度ジネエツから歸つた處であり、男爵はまたこの新愁を忘れようがために、グリュムやなにかと一緒に佛蘭西を旅行して歸つて來たところであつたから、早速訪ねて行つたのが始まりで、私が仙居へ引つ込むまでは出入りを續けた。

エビネエ夫人が私のために住居を装へる、然ういふ話が未だ夫人を知らぬ男爵を中心とした交友界に知れ渡ると同時に、皮肉な噂が霰の如くに私へ降りかかつて來た。那樣ところへ引つ込むには引つ込んでも、すぐ又都會の媚や悦樂が戀しくなつて來て、とても半月と辛抱が續くものかと、然う言ふ想像が噂の源になつてゐた。私は現在の立場を考へて、他には何とも好きなやうに言せて置いて、自分

1754(43)-1756(45)

事がないではない。即ちテレエズの父のルヴスウルが、齡も八十以上の老翁になつて、荷厄介で爲様がないから、何とかして邪魔にならぬやうにして欲しいといふことを、テレエズの母が掛つて私へ依頼であつたから、その可哀さうな父親に落ちつき場所を見つけてくれたのがこの男爵であつた(原注)。男爵が私の利益を謀つたといふ事は、全く自分の記憶の悪戯であつた。この本文を書いて久しく経つてから、私は自分の妻と雑談の折に、偶と父親の話が出たので、よく聽いて見ると、父を世話して救済院へ入れるやうにしたのはこのオルバック男爵ではなくて、實は當時オオテル・ヂウ Hotel-Dieu (巴里最古の救済院で、ノートル・ダムの境内)の理事をしてゐたシノンソ氏(前篇一七四二年の條に出て居る)であつたといふことが始めて分つた。其の時の事情を悉皆忘れて、一圖にオルバック氏の力だとばかり信じ切つてゐた。若しこの真相が知れなかつたら、私はこの人の爲に謝恩の祈禱をも爲兼ねないところであつた。父は救済院へ入れられたけれど、齡の寄りさまに、暖い家庭から遠のけられて了つたといふことが、入院するとすぐこの老人を墓石の下へ送ることになつた。彼の妻も、多勢の子供も、誰あつて少しでも可傷しい容子

1754(43)-1756(45)

を見せる者がなかつた。が敬愛の情に満たされたテレエズばかりは、いつまでもこの損失から自分を慰す術を知らなかつた。どちら道老さきのない身體を提げて、わざわざ死にに可愛い娘の傍を離れて行くのを見殺しにして置かなくてもよかつたではないかと、我と彼女はわが身を責めつけ責めつけして、止めどもなく口惜しがつた。

やはり同じ時分意外な人が訪ねて來た。もつともそれは昔の相識ではあつた。或る朝だしぬけに、舊友のヴンテウルが這入つて來て吃驚させられたのである。同伴が一人あつた。何と容子も變れば變るものだ！昔は随分綺麗な男であつたのに、見るから破落戸然として、迂闊にうち解けて物も言へなかつた。然う見たのは私の見損ひであつたのであらうか、或は放縱の結果が彼の精神まで味くして了つたのであらうか、或は以前の彼の美しさは全く今は昔の盛春がさせた業であつたのであらうか。遇つて言葉は交して見たけれど、何等の暖味も感ずることが

1754(43)-1756(45)

出来なかつた。そしてその儘冷く別れて了つた。が彼が然うして立ち去つた後になつて、二人が當時の事を憶ひ出して見ると、聯想はそれからそれへと繋がつて行つて、花の如き青年期の思ひ出が鮮明に浮んで来る。其の頃の我が生涯は、全くかの天使のやうな女人、ワレンス夫人に獻げて了つて、自分は處女の様に優しいものであつた。その天使も今は老い衰へて、この男にも劣らぬほどに塗り果てた。幸運な私のその時分の逸話、二人の嬌容な少女と交つて、無邪氣に笑ひさざめいて過したあの浪漫的なツウヌの一日、しかもたつた一度の手の接吻が、唯一の慶福であつたと言つては詰らぬが、それである。若い心が、高い感興にうち顫ふ力をば、その時分にはしんみりと感覚することが出来た。けれども、思つて見ればもう其の季節は遠い遠い昔に過ぎ去つて了つてゐた。斯ういふ軟かな、いろの回想から滲み出る涙の點滴は、凋落し切つた盛春の上に、又その時を最後とした盛春の興會の上に、はらはらと落ち垂つた。噫！ その盛春、その興會は去つて復た歸らぬのに、その返報として多くの可憐しい禍は、徐徐に犇犇と私に壓迫して來た。それ

1754(43)-1756(45)

が初めからわかかつてゐたら、いかに多量の涙をその上に瀧ぐべきであつたらう！

巴里を去る前、隱遁に先だつ冬中に、私は一種の心の悦樂を感じて、その淨い味を十分に味うたことがある。ナンシイの大學教授パリスオ Palisot とらへば、幾らか劇詩で名の聞えてゐた人であつたが、丁度この時リッネヴィルで其の一篇を演じて波蘭土王の御覽に入れた。この劇詩を演じた動機が、王と筆戦を交へるやうな無鐵砲な一人の人間を捉へて來て、それを諷刺して王の御機嫌を迎へようといふのであつたことは、歴史と分つてゐた。スタニスラフ王は固より寛宏で、諷刺などは大嫌ひであられたから、眼前斯ういふ人身攻撃にわたる演技を見せつけられて、以つての外のお怒りであつた。トレンサン Trossan 伯爵は王の命を受けて、ダランベエールと私へ手紙を寄越された。その文面に據ると、陛下はパリスオ教授に罷免を仰せつけられさうだといふことが書いてある。私は返事を書いて、どうぞパリスオ教授の罪の赦されるやう、王へ執成を頼み上げるといふ意味のことを哀訴した。

1754(43)-1756(45)

この願は聴き届けられた。そして其の達しが來たと同時に、教授の今度の所業を大學の記録に載せて置くことにすると書き添へてあつた。それでは罪は赦されても、汚名は永續する理に當るから、それもつらいといふことを答へた。再三の哀願で、到頭私の言ふとほり、記録の事も罷めになり、此の事件に關する一切の證據はすべて採み消されて了ふことになつた。トレッサン伯は言ふまでもなく、陛下の方に於いても、その約束には推尊重敬の意味が伴つてゐたことは確かだから、私は無上の満足を感じた。眞價ある人の尊敬が、心の中に優しい氣高い感情を起させることは、到底虚榮心に伴ふ感情の比てないといふことを思つた。私はトレッサン伯の手紙も、自分の方から行つた返事も、皆文集の中へ書き込んで置いた。その原文は書翰束の第九、一〇、及び一一號となつてゐる。

若し斯ういふ記事が、何時か世に出るものとすれば、自身に採み消して了ひたいと思つてゐることを、却つて自分の筆で永く傳へるやうなことをしたに當る。それはよく承知してゐる。がしかし、此の人の事ばかりでなく、未だ外にも自分では不本意と思ひながらも、思ひ切つて書き残したことが随分ある。此の著述に筆を

1754(43)-1756(45)

執るに至つた大趣意は、始終眼の上に懸つてゐるから、當然の義務として出來得るかぎり微細な點まで、餘さず洩らさず書き出さなければならぬ。少しばかりのことを氣にかけてゐては、此の著述の目的は何處へか行つて了ふ。そんな不都合なことは許されない。斯う私のやうな、一種異常な特別の境涯にゐる者に取つては、倚り頼むべきは唯眞理あるばかりだ。其の他は顧慮する邊がない。遺憾なく私を観察するには、善惡と言はず、有らゆる材料に基いて調査せねばならぬ。私の懺悔は、他のいろいろの人達の懺悔と斷ち難い關係を持つてゐる。私と交渉のあつた以上、他人に關する事でも、自分の告白と同様の誠實さで書き立てたく思ふ。自分の心では、他人に關する事實だけは、幾分の手心を加へたいと思はぬでもないが、しかし決して自分よりも以上に、他人を寛容せねばならぬ義務があるとは思はぬ。何にせよ、私自身には始終正しく且眞であることを望み、他人に就いては出來るだけ善美な點を擧げて、私自身に關係のあること、言はずに置けないこと、置ければ、その人の醜惡な點は表さぬ、といふことを望んでゐる。斯うした境涯に私を置きながら、誰が私からは以上の事を要求する權利を有つてゐるものがあらう？

1754(43)-1756(45)

この懺悔録は私の生きてゐる中に、——いや私ばかりでない、此の本のために氣を悪くさせられさうな人達の生きてゐる中に、世間へ出さうと思つて書いてゐるのではない。若し私にわが運命を支配し、この書物を左右する力があるなら、私も死に、其の人達も死んで了つた遠い後の世になつてからでなくては、決して世間に出さうといふことを思はない(譯者云。「懺悔録」十二卷の中、最初の六卷は英吉利のウ、トンド、一七六六—六七の間に書かれ、後の六卷は佛蘭西のドォン、ネ、Dauphinéとトリイとて、一七六八—七〇の間に書かれた。書中人物の生存中であることを憚つて、一八〇〇年までは出版させたくないといふのが、ルソオの本意であつたのに、原稿を保管してゐた人達が焦つて、著者歿後未だ三年をも隔てぬ一七八一—八二の間に、最初の六卷を出版して了つた。一七八八年の新版で、全部十二卷が完成した。しかし、眞理が可怖しさに、強暴な私の敵人どもは、さまざまと心を碎いて、正しい行實を湮滅させようと思つてゐるから、私も已むをえずそれを保存するため、堂堂たる権利と、嚴肅な正義との許す限りの事はせずに行はれぬ。若し又私といふものが、死んでさへしまへば誰にも忘れられて了ふといふものなら、一人でも

1754(43)-1756(45)

餘計迷惑を掛けなくて、誤つた侮辱でも何でも唯一時の事と我慢して、黙つて受けてゐればそれでよいかも知れぬ。しかし、どうせ私の名が後代に残るものとして見れば、静とはしてゐられぬ。其の名と俱に、生前の事歴をも傳へなければならぬ。此の可憐しい人間の眞相は斯う斯うであつた、決して彼の邪心を抱いた敵人どもが、一生懸命に捏造したやうな、那樣人間ではなかつたといふことを明瞭に知らせなければならぬ。



一七五六。

早く仙居の方へ移つて住みたい一念で、翌年の春の復つて来るのを待ち兼ねた。住居の準備が整つたと聞くとすぐ、其處を占領しに大急ぎで走つて行つた。オルバック組の連中は皆一同にわあつと言つて嘯し立てて、一人法師で三月もあんな處に居ればもう懲り懲りして、すぐ皆のゐる巴里の方へ悄悄舞ひ戻つて来ることは

第九卷



第九卷

1756(45)

眼に見えてゐるなどと、預言めいたことを言ひ合つてゐた。十五年の間も、好きな住居に這入る事の出来なかつた私が、たまたま斯うした工合のよい隠遁所を見つけたのだから、甚だ冷評を受けようとも、一切無貪著であつた。氣は進まぬが、せう事なしに騒擾な世界へ立ちまじるやうになつてからは、可憐しいシムルメットと、其處での生活の情味を、片時も忘れることが出来なかつた。私は斯う考へた。大方自分は逃避的な、野趣的な人間なのであらう。だから其以外の土地へ行つて、幸福に生活するといふ事は不可能である。ヴェネチアでは奈何であつたか。公務鞅掌の間でも、接衝應對の間でも、昇給榮轉の希望の間でも、一むら木立、せせらぎ水、野路のそぞろあるき、然うしたものの姿が何時と擇ばず、心の裡に浮び出では、わが思想をひつ攪拌したり、暗い影を投げ入れたりするので、戀ひしい戀ひしいと思ひ悶へる一念の遣り場がなかつた。巴里に居てサロン生活の盤渦におし揉まれ、晚餐會の實感を放縱にし、劇場の輝かしさに目を眩し、虚榮の煙に噓せ入つてゐるその間でも、この心は尙且前に言つたやうな、山村水郭に憧れ歩いてゐたのではないか。不本意な、いろ／＼の努力に齟齬するもの、——折にふれては氣まぐれに、彼だそれ

1756(45)

だと言つて野心を燃して見たりするものも、畢竟は何日か安易な田舎生活に入る方便にしたいばかりであつたのだ。その田舎生活が是から出来るといふ場合になつたのであるから、私の喜びは言ふ迄もない。この目的に副ふやうにするには、不自由なく暮らせるだけの資産がなくてはならぬ。しかし他とは異つた境涯だ。別に然ういふ資産はなくとも、全く反對な或る手段で、同じ目的が達しられるものやうに考へられた。私には定まつた収入といふものはない。けれども、名前は賣れてゐるし、技能は確かにある。自身には何の贅澤もなし、費用のかかる要求や、習慣から來る奢侈は、全く廢して了つてゐた。それに隨分と怠惰者ではあるが、それでもさあと言つた時は、他一倍勉強もする。怠惰と言つても、天性無爲を欲する人のそれではなく、寧ろ獨行自營の力があつて、氣の向いた時だけ爲事をするといつた人のに近いものであつた。樂譜書きも決して立派な儲けの多い商賣ではないが、手堅くて信用がある。然ういふ商賣を擇んだ私の勇氣は、明かに世間から認められた。この爲事があれば、大丈夫生活に困るやうなことはあるまい。しつかり勉強さへすればよいのだ。「村の卜者や、その他の著作から得た金がまだ二千フ

1756(45)

ラン(約計八百圓)ばかり残つてゐるから、忽ち自由を失ふといふほどのことはない。それに今著手中のいろいろの著作物も、本屋から金を強奪するやうなことはしないで、ゆるゆるの楽しみながらペンを運ばして行けばよい。決して散歩時間まで犠牲にして、身體を使ひ壞したりなどするには當らない見込みである。家族三人暮しの其のめいめいが孰れも相應な爲事をしてゐるのであるから、喰ひ住しが三人居るのとは譯が違ふ。約めて言へば、私の財源は自分の要求や欲望を差引いても、私の性向と一致するやうな生活を、樂にやつて行くのにもちつとも差向へはなかつた。

若し操觚者として、面白い書物の出版といふことを考へる氣が、少しでも私にあつたら、随分利益の多い位置に就くことが出来たかも知れぬ。既に得た名聲は容易に墜ちさうな氣づかひもないから、それを利用することを考へて、このペンを樂譜の謄寫などに使はずに、全きり外の物を書くことに使つたならば、金が十分獲れて、大富豪にもなれぬことはなかつた。しかし私の考はそれになかつた。麴包のために書くといふことは、天才を殺して、技能を潰すやうなものである。天才、技能

1756(45)

は必ずしも筆さきに宿るものでない。高い、尊貴な思考作用、それがあつて始めて其處から生れ出て、育て上げられたものである。買収されたペンの尖端から、何て力のあるものが出よう、何て大なるものが出よう。必需若しくは貪婪は、私に良く書かせようとはしないで、速く書けばよいと迫るにちがひない。成功の一語に渴すると、量が寡くても優れた真味のある物を書かうとはせず、筆は曲げないまでも俗受一方のものばかり書きたくなる。優れた作家になり得べき人間も、それがために駄作家の羣に入らねばならぬ。いやそれのみでない。著者の位置といふものは、商人根性を離れば離れるだけ、其だけ優れた貴いものになり、又ならねばならぬといふことを、始終自分は感じてゐる。生活問題に追ひ窘められてゐる中は、尊貴な思考に耽らうとて耽られるものでない。大なる真理を語る氣なら、——又語れるやうにならうと思へば、成功といふ一念を抛棄つて了はなければならぬ。私が種種の物を書いて世に出した時の心の裡には、人類に對して良い奉獻をしたといふ確信だけがあつて、其以上に何等の利害心も潛んでゐなかつた。もしその著者が顧みられなければ、それは其の書物から得べき利益を吸収する氣のない人

達が、自分でそれだけの損をしてゐるのだと思へばよい。此方の知らない事だ。故らに好評を取つて、生計の補足にする。那樣考はさらにないのだ。本は賣れななくても、一方に口を糊すだけの手爲事はある。又それがために、書物が需要されるのである。

市中ではもう住居はしない。然う腹をきめて愈、此處を去ることになつたのは、一七五六年の四月九日といふ日であつた。其の後巴里や倫敦や、その外の都會で、極短い滞在はしたことはあるけれども、何時も後から逐つ蒐けられるやうな、それはした、不本意な假の寓居であつた。實際住居といふ名を興へることが出来なかつた。エビネエ夫人はわざわざ迎へに来て、私達三人を自分の馬車に乗せてくれた。百姓が一人荷搬人をやつて、それでもう其の日の中に落ちついた。隱遁所の模様を見ると、質素は質素だが、なかなか行き届いた、しかも相應に凝つた設備がしてある。あの手でこれだけの設備をしたかと思ふと、私は非常に高價なものやうに感じずにはゐられなかつた。特に私のためにと言つて、私の見立てに仍つて、普請までしてくれた家て、わが女友の賓客として住居することは、羨られるほど嬉

1756(45)

1756(45)

しいことだと思つた。

未だ可なり冷い時分、雪さへ彼處此處に残つてゐた。が、草地にはもう青いものが芽んで見えた。莖櫻草もちらほら顔を出しかけた。大木には嫩芽が持ち上げさうになつてゐる。着いたその晩から、丁度窓の下あたり、檐と摺れ摺れの森の中で、鶯のささ啼きに不意うちを喰つた。少し假睡んで、偶と目を寤した時に、移轉のことはすつかり忘れて、やはり自分はグルネル町の家に居るのだとばかり思つてゐると、突然この囁りが耳に這入つたので、おもはず身體が顫いて、驚喜の聲が口から衝つ走つた。

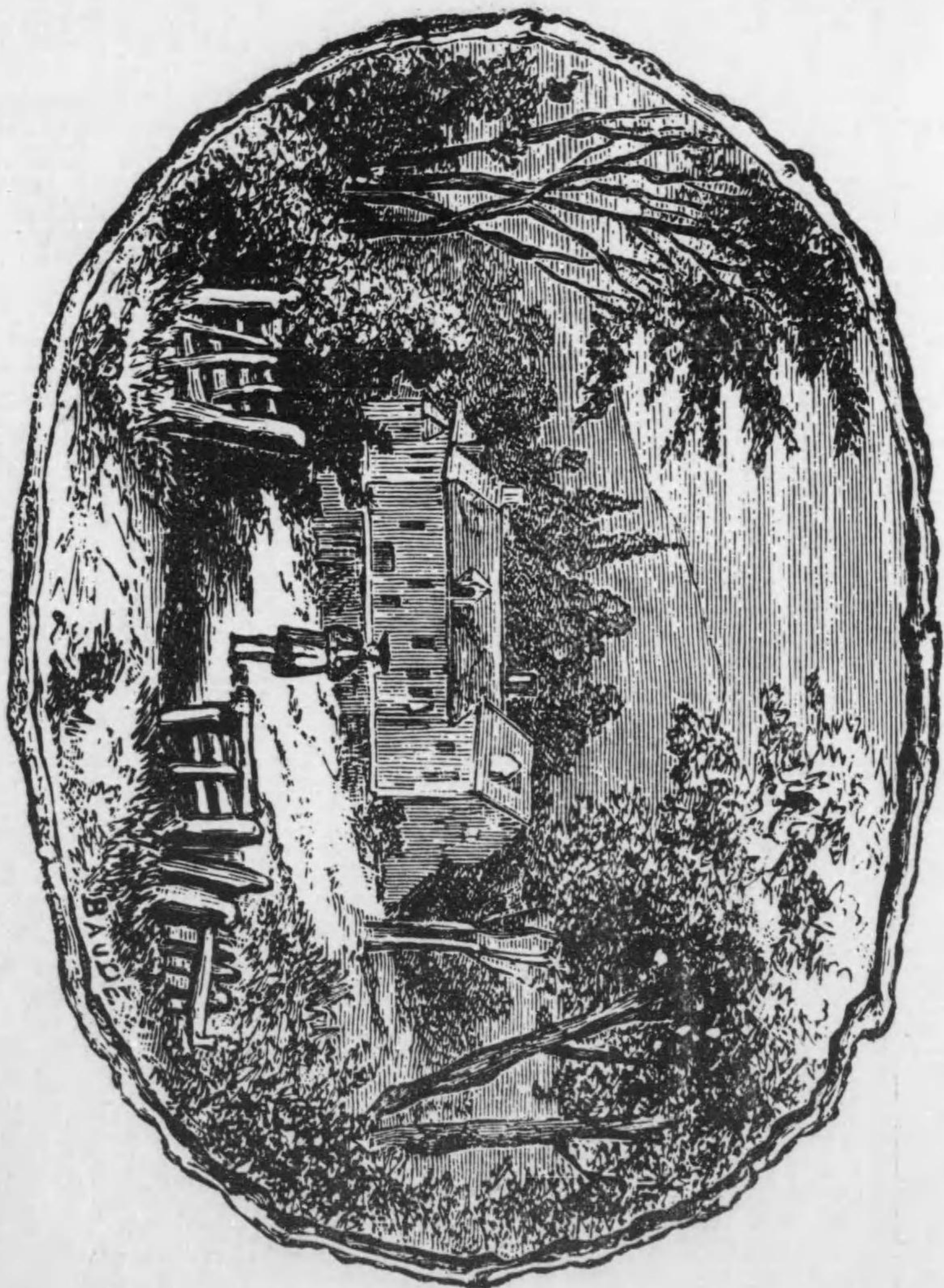
「やれまあ、是て俺の願ひも慥つた！」

自分の周圍を取り捲いてゐる自然の風物からの印象を、飽くほどに受け込むこと、これが私の手始めにすべき爲事であつた。新家の取片附こそ、眞最初に済ましてはなればならぬのに、其はしないで、散歩に出かける準備に忙しかつた。家の近處の草徑、培養林、灌木林、幽處、一つとしてその翌日に駈けまはつて見て來ないところはなかつた。細く觀て行けば行くほど、ますますこの隱遁所の自分のために造

1756(45)

られたといふ感じを深くした。未開地といふよりも寂寥と形容すべきこの地区は、まさしく世界の根であらうかといふやうな考を抱かせた。斯うした、ぞく／＼するやうな數數の美は、とても何處の都會の近處にだつて見られる譯のものではない。今もし突然身體を斯ういふ土地に搬んで來られたら誰にしてもこれが巴里から精精四リッ(約計四里)ぐらゐの處だとは、どうしても思へぬであらう。

しばらくの間は何事もうち忘れた。唯もう跳び廻つて田舎の悦樂に耽つた。聴てぼつぼつ古反古を調べたり、爲事の準備に取りかかつたりし始めた。また何時もの様に、午前中は樂譜を寫し、午後は手帖と鉛筆を提げて野歩きをすることに極めた。碧空の下でなくては沈著いて書くことも考へることも出來ない私は、この方法を更へる氣は無かつた。そして、ぢき門の外に見えるあのモンモランシイの森が、今から自分の書齋になつたといふ考へて、無上に樂まされた。いろいろ書きかけた原稿に一一目を通して見た。創新な題目は豊かに蓄へてたが、都會の騷擾に邪魔されて物にすることはなかなか容易でなかつた。幾らか然うした邪魔を遠ざけることが出來たら、もつと勉強しようと豫て考へてゐたので、その豫期は



居仙のインソラモンモ

十分に果された。病氣と根競べをしてゐながら、——又、ラ・シッヴレットだ、エビネエ Epinay だ、オオボンヌ Faubonne だ、モンモランシイの別荘だと、彼方此方へと歩き廻つてゐながら、——又夫人の家で、のらくら者の通人どもに引つ懸つては、始終時間を奪られてゐながら、——それに一日の半分は樂譜の方へ持つて行かれてゐながら、仙居とモンモランシイで六年間に書き上げたものを分量に積つて見れば、この間に費した時間は、決して無意味でなかつたといふことが解る。

著手しかけた原稿の中でも、長いこと興味をもつて練つてゐたのは、かの「制度論」であつた。これならわが名譽に封印を置くに足るものだから、生涯かかつて書き上げてよよいと思つた。十三四年前、ヴェネチアに居た時分、あれほど評判のあつた其の國の民政上に、種々な関典があるのを見ると、もなしに氣附いて、それからほじめて斯ういふ腹案が組み立つやうになつたのである。それから後、道德を歴史的に研究して行くうちに、だんだんと私の視圈が擴がつて來た。私は斯う思つた。

何物も根柢に於いて政治と交渉を持たぬものはない。如何なる方法に據るかを問はず、一國民はその國の政府が限定したより以外の者であることが出来ぬ。そこで最善なる政府の大問題を約言すると、次のやうになるのであらうと思つた。『最も有徳な、最も光輝ある、最も聰明な國民、つまり最大の意味でいふ最善な國民といふものを造るに適した政府の資格とは何であらうか。此の問題を裏返して考へて見ると、幾らか異なる點はあるか知らぬが、如何なる政府が、その本質上、常に法律と最も親善なのであらうかといふのと同じ意味に當るのでないかと思つた。』法律とは何ぞといふこと、及びその外同じやうな重要な問題は、皆此處から産み出されるのである。この問題を闡明することは、大真理に到達する所以で、人類社會に無上の慶福を齎すのみならず、殊に私の祖國に對する至大の貢獻となる所以であると思つた。自分の郷國へ旅行をして行つた時にも、正しい法律とか、純粹な自由とかいふ、然ういふ觀念を全く見出すことが出来なかつた。この觀念を彼等に與へるために、斯ういふ間接な手段を取つたところで、彼等の自尊心を毀ふ憂もあるまい。随つて彼等自身に思ひも寄らない真理が、私によつて發明されたからと

1756(45)

1756(45)

言つて、感觸をわるくする道理もなからうと信じたのである。

此の著述を始めてから、彼是五六年にもなるが、些とも抄取らなかつた。斯ういふ類の物を書くには、靜かな場所で暇に飽かして、ゆつくり氣を沈めてかからなくてはならぬ。それに、この書物を書くにも、俗に謂ふ拔け駈けをするつもりで、一切誰にもこの計畫は話さなかつた。ヂドロオにすら話さなかつた。今のやうな時代に、また今私の居る此の國で、斯ういふ物を書くといふことは常識が無さ過ぎるといふ虞があつた。況して友人達が吃驚して、私に干渉を試みることも思つてみなければならぬ(原注)。この疑懼を吹き込んだのでは、ヂクロオが聰慧立つて嚇したのが一番の原因であつた。ヂドロオとは私が議論を交へると、どういふものかきつと私は持前以上の皮肉屋にされて了ふ癖があつた。それがために今度のやうな激情や偏癖の痕は些とも見せず、唯理性の力量のみで押し通さうとするやうな著作物について彼に相談を持ちかけることは、廢めにした。この著作がどういふ調子で行つたかといふことは、それから約めて來た「民約論 *Contrat social*」を讀んでみるとよく解る。好い時分に是が脱稿するであらうか、自分の存生中に世に

1756(45)

出るやうになるであらうか、然ういふことは未だ全く見込が立たなかつた。諷刺の意味もなく、爲にする所があるのでもなしするから、何處から觀ても攻撃の持つて來やうはあるまいと信じて、出來得る限りは大膽に、問題が要求するだけのことは何物でも犠牲にしやうといふ考を持つた。自分の戴く官府に對しては勿論尊敬を拂ひ、法律に對しても決して從順を失はずにゐて、そして自分の生れた時から賦與されてゐる思想の權能を飽くほどに、少しの狐疑もなしに、行使しよう、人民の權利は間違つても侵害せぬやうに注意を加へつとも、要らぬ心配のために自分の思想から得來るべき利益を放棄するやうなことはしたくない。然ういふことが私の望みてあつた。

自分は他國人として佛蘭西に住んでゐる者であるから、思ひ切つた眞理を吐くには、大層都合がよいと思つた。私の望むとほり、一一佛蘭西で認可を取つて出版してさへぬれば、その外では、誰にも、自分の主義や出版の事を辯疏する必要はないといふことを知つてゐた。ジ、ネ、エ、ウへ行つては、もつと自由が利かない。何爲と言つて彼處では、何處で出版したのも、一一檢稿官が手に取つて、煩く非難する。

1756(45)

エビネエ夫人の言ふなりになつて、ジ、ネ、エ、ウへ落ちつかうといふ考を棄てて了つたのも、以上言ふとほりの原因が尠からず手傳つた。「エミール」の中にも言つたやうに、眞に祖國の幸福のために著書を獻呈しようと思へば、何事か爲にする所がない以上は、決してそれを自國で出版してはならぬといふことを感じた。

未だその上に、自分の境涯を有り難く思つた事がある。佛蘭西政府が鋭い眼で私を觀てゐるやうなことは多分あるまい。保護とまでは行かなくとも、少くも私の靜穩を亂すやうなことはすまいと、斯う考へた。つくづく思ふに、大勢から觀て到底禁壓することの出來ぬやうな言論が顯れて來たときに、それを寛容して置くのが、一番骨が折れずにゐて、それで最も巧妙な爲政者の態度と謂はねばならぬ。現に私にして見ても、何處の政府でもすることだが、もし佛蘭西から退去を命ぜられたとしても、それがために私の著書は何等の痛痒も感じない。否、却つて一層過激の度を増したかも知れぬ。それとは反對に、何の危害も自分の上へは落ちて來ないといふ極まつてゐれば、著者たる人は、自己の著書に對する全責任を背負つて立つことになり、又民權の尊重すべき所以が、始めて明かになつた嬉しさに、歐羅巴全洲



1756(45)

が抱いてゐた根深い偏見は、綺麗に跡を隠すやうになつたであらう。斯う私の考へたことを、其の結果から判断して、自ら欺く者であると言ふ人があつても知れぬ。併しそれは然ういふ人達自身が認めてゐるのでなからうか。其後私の身の上に、颯風が吹き落ちて來た時に、其の原因には私の著書がなつたのだと言はれてゐたが、その實、目指すところは私といふ個人に對してであつた。その時には、誰も著者といふものを念頭に置いてゐなかつた。唯「シンジック」といふ一個人を陥れさへすれば、それでよかつたのだ。だから彼等が私の著書から穿り出して、此處のところ不可いのだと言つた其の部分は、やがて私に名譽を與へるものであつた。いや斯う一跨ぎに先の事まで言つて了つてはいけない。今でも私には一個の謎になつてゐるこの秘密を、これから先わが讀者たちが明かに領解されるかどうかは疑問である。がしかし、私にはこれだけのことが言へる。若しも私の發表した説がああいふ酷い虐げを値するほどのものであつたのなら、もう少し早く自分は其の説のために殉じなければならぬ所であつたのだ。それは、私の説を最も露骨に……と言つてはよくないか知らぬが、随分大膽に表白した著書「不均

1756(45)

等論」が、仙居へ隠遁前に出てゐるのに、それに對しては誰も非難の聲を放つ者がなかつたばかりか、その書物の頒布を佛蘭西で差し止めようとする人さへなく、和蘭で弘まつたほど此國でも賣れて、大した評判を取つたといふ事實があるのである。引續いて「ヌウザエル・エロイズ」が出た時も、やはり同じやうに無事に濟んで、しかも前程の好評を得た。殊に不思議なのは、このエロイズが臨終の信仰告白は、「サヴァアの司祭のそれと全く同一轍であつたのである。」「民約論」の中で大膽だと思はれるやうな思想は、すでに皆「不均等論」の中で言つて了つたものばかりである。「エミール」の中で大膽だと思はれるやうな思想も、すでに「エロイズ」の中で言つて了つたものばかりである。前に出した二作に對しては、思想の大膽といふことは何の累ひにもならなかつた。だから後に出了た著作が累ひを受けたのは、決してそれに含まれた思想からでなかつたことは明かである。

それとは同じやうなものだが、近頃になつて思ひついた計畫がもう一つあつて、

1756(45)

其處へ注意が行つた。それはサン・ビエール師の著書を拔萃することであつた。それを今までは外の話に牽かされて、言ひ出す折がなかつた。ジ・ネエツから歸つて來た時に、マブライ師の意嚮をデッパン夫人が聞いて、それは一番私にさせたら面白からうといふので、夫人から私がかりを捉へたのである。夫人は巴里三美人の中の一人で、老サン・ビエール師はこの夫人の掌中のものとなつてゐた。縱しこの人を明かに最負するといふことでなくとも、エエギイヨン Aignillon 夫人との間に、幾らか競争の氣味があつたことは否まれぬ。彼女はこの惜むべき師に對する記念として、絶えず敬愛の情を獻げた。それがとりも直さず雙方の名譽であつた。であるから、其の師の死産兒とも謂ふべき未定稿が彼女の書記の私の手で蘇生することが出來たら、彼女の自負心は本望に感ずるのであらう譯者云。サン・ビエールの名は、前に一七四二年の條に一度出た。詳しくは Abbé Charles-Iréné de Saint-Pierre 云々。一六五八—一七四三。

原稿を見ると道がにうまい事が言つてある。けれどもその言ひ現し方が、ゆるしく拙くて讀みづらい。それにこの著者は、讀者を學生と見做してゐるやうな

1756(45)

態度でゐながら、とんと大人を相手にしたやうな、無興味千萬な書きぶりがしてゐるには驚かされた。然ういふ譯から、この爲事を私にして見ぬかといふ事になつた。もつとも其には、此の爲事その物に價値があるといふだけでなく、原稿書きはするが創作は面倒臭い、感想を頭の中で捏ね返すのは億劫だから、自分で新しい物は書きたくないけれど、他人の搾り出した思想に面白いのがあれば、それを潤飾するか敷衍するか位なら引き受けてもよい、といふやうな人間には、至極適當な爲事だといふ意味も這入つてゐた。而已ならず、ただ單に翻譯するだけといふのも、ないのだから、場合に仍つては自分の意見を加味しても、差向はない。それゆゑ何か自分の説が發表したければ、ずん／＼書き込んで行つても、表向きはサン・ビエール師の署名なのだから、自分の名で出すよりは、ずつと安全に通るといふものである。ところで此の爲事は全體然う手取り早く出來さうもない。原稿が皆て二十三卷ある。それを片端から讀んで行つて、考へ考へして、その中から書き抜きをせねばならぬ。原稿は驚くほど紛糾と冗漫で、檢束がなくて、處處に重複があつて、淺薄な謬つた説も尠くない。さういふ間から摘むやうにして、優れた旨い處を取つ

て来て、それで辛うじてつらい爲事の興味を繋いで行くやうにしないでならぬ。幾たびか私はこの爲事を抛棄つて了はうかとも思つた。けれども、體好く逃げる手段がなかつた。併し私がサン・ランベール Saint-Lambert の世話で、この原稿全部をサンビエール師の甥のサン・ビエール伯から受け取つた時には、とにかく一度當つ見てた上で、不可なかつたら突つ返して了ふし、然もなかつたら、立派に物にしようとならう覺悟した。仙居へ来る時に、それを持ち込んだのも然ふいふ見込があつたからだ。此處で到頭、閑日月を犠牲にして、始めてこの爲事に取りかからうとした。三つ目にもう一つ新計畫がある。これは私が自己解剖の結果思ひついたもので、是こそ眞に人生に福利を供へるものだと思つた。若しこれが豫想どほりに行けたら、恐らく世界最有用の書物に數へられると思つただけ、それを書くのが心から愉快で堪らなかつた。人間が生を續けて行く間に、だんだんとその本色から遠かつて来て、終には全く異なつた、別な人間に變り果るといふ事實は誰も知つてゐる。今書かうと言ふのは、其の普通の事實ではない。私の目的はもつと新しい、しかももつと重大なものであつた。即ち此の變種の生ずる原因を

1756(45)

1756(45)

究めようとするのである。其の原因はまさしく人間に在るものと假定して、奈何いふ場合に此の原因を導びいたならば、一層優良な人間が出来るか、又一層安全な道を歩むことが出来るか、それを私は究めて見たいと思つた。欲望がすてに一定の形を取つてから後に、それを殺さねばならぬと言つては、なかなか困難だ。此處で若しこの欲望の源頭に、溯ることさへ出来たら、其の源を下らぬ前に當つて、豫防するとも、取り替へようとも、善導しようとも、然う骨の折れることでない。一度誘惑されても、静と踏み堪へてゐるのは、其の人が強いからだ。けれども後になつて、弱くなつて了へば誘惑に勝てない。初めの時のやうに強くてさへゐれば、決して降伏することはないのだ。

斯う種々な性行の人間が出来るのは、奈何いふ譯かと思つて、自分をも觀察して見たり、他人の上に就いて研究もしてみた。どうも其の原因といふのは、大部分は外界の事物から受ける最初の印象 *l'impression antérieure des objets extérieurs* といふやうなものであるらしい。吾儕の感覺や覺官は、絶えずこれに手加減を加へて、そして、其の手加減した結果をば、しらずしらずの裡に、知識感情、行爲の中までも持ち込

んでゐるやうである。私の蒐めた澤山な顯著な観察は、決して議論を容さぬやうなものであつた。この生理上の土臺から、一個の法則を歸納してみたらと思つた。それに仍つて人の心意は種々な境遇に應じて、道徳を成ずるに最も都合のよい状態に置かれもするし、維持されもすることであらう。動物界の理法のために、道徳律の犯されることは太甚しいものである。今若し此の禍が福と轉じ得たならば、理性はどんなに煌きを見せて來ることであらう。また惡の苗の芽ひ間も待たずに枯れ伏す態が見えるやうだ。氣候季節、音響、色彩、幽暗、光明、元素、營養、喧噪、沈黙、運動、靜止、いづれもみな肉體に影響を與へぬものはない、随つて心意に作用を及ぼさぬものはない。吾儕の言動を支配する感情——其の感情の根本は、皆如上の要素に支配されたものに外ならぬ。これが私の根本の思想で、これだけはさぼさ書きにして置いた。此の輪廓に依つてずつと書いて行くのは、いかにも面白さうであるし、讀んでも面白い本が出来さうであつたから、一番纏めて、天性率直で、道徳を愛しながら、心の弱いために自棄してゐるやうな人達に、しつかり讀んで貰ふやうにしたいと思つた。書名も、感覺的道徳、一名、賢者の唯物主義 *La Morale sensitive, ou*

1756(45)

1756(45)

*le Matérialisme du sage*) と附してゐた。併し、眞箇に此の爲事を續けて行くことは出来なかつた。だんだん話すやうな種々な障礙が起つて來て、到頭、それに邪魔されて了つたのである。其の覺え書きが終に奈何いふ成行になつたかといふことも、其の時になれば分らうと思ふ。實はその覺え書きの成行といふよりも、私自身の成行と言つた方が早く解る位のものである。

以上話した外に、以前から多少教育組織のことも考へてゐた。これはシノンソオ夫人が自分の良人の教育に胸を痛めた例があるので、何卒息子のために適當な方法を調べて欲しいと、私への頼みがあつてからの事であつた。私の興味から言ふと、此の方は餘り好きな爲事でもなかつた。が、友誼といふ權威に壓へられてゐるために、外の孰れよりも一番氣になつた。今話して來た中で、とにかく計畫どほりに出来あがつたのは、此の書物だけであつた譯者云。これは一七六二年に出た「エミール」である。此の書物を書いた時の私の懷抱が、ああいふ危禍を買ふことにならうとは奈何して思はれよう？ 此處では未だ其の悲劇に筆を下すのは少し早い。先へ行けば可厭でもその次第を話さずに置けぬやうな場合に迫られる。

1756(45)

斯うさまざまと研究問題が重なつて來てゐるので、散歩の時の頭腦はなかなか忙しかつた。前にも言つたと思ふが、私は歩きながらでなくては、物が考へられな。佇立つたと思つたら、思考もぼつたり止まる。頭は、足の動いてゐる時だけ動いてゐるのである。けれども一つだけ、雨の日に、書齋ですることに極めて置いた爲事がある。それは「音樂辭典」だ。初めに出來たのは材料が不統一で、片輪で、益に立たないから、もう一度悉皆書き直さなければならぬ事になつてゐた。必要な參考書は幾らか手許にもあつた。其の上に、王室圖書館の藏書を大分借り出して來て、二月ばかりかかつて書き抜きをやつた。其の書物の中の幾部かは、特許を得て、仙居まで提げて來た。であるから、どうかして外へ出られない時でも、樂譜の謄寫で氣がくさくさして來た時でも、爲事に不足はなかつた。仙居でも、モンモランシイでも、後にはモチエエでも、何時も爲事の配當は斯ういふ工合にした。それで自然と氣が換るやうになつて、骨が折れずに抄が行くといふ、うまい理窟になつた。

— 154 —

1756(45)

この辭典なども、モチエエで、外にいろいろの爲事をしてゐる最中に脱稿したのであつた。

斯うしてしばらくは、せつせと豫定の爲事に取りかかつて、面白く其の日を送つて行つた。ところが麗しい季節がやつて來て、エビネエだ、シッレットだと、引切りなしにエビネエ夫人を連れ出すやうになつて來たので、其の方へ注意が行つて、外の目的は壊されがちになつて了つた。私としては稀しくもない事であるが、それを豫定の中へ組み込んで置かなかつたのが不覺であつたのだ。エビネエ夫人に可憐しい種類の氣質があるといふことは前にも話した。誰彼と言はず、友達には優しくする。熱心に世話をする。彼等のためには時間も勞力も厭つてゐない。そこで又其の返報には、友達の方からも、彼女に對する義務として、機嫌を損ねないやうにしなくてはならぬ。今までは別に義務だなどといふ考もなしに、自然と彼女の機嫌に適ふやうになつてゐたが、終には、自分の身に鎖が投げ懸けられてゐる。其の重量があまり感へないのは、唯友情の所爲に過ぎぬといふことが解つた。しかも可好しからぬ多くの交際社會といふものの爲に、尙一層その重量を増させる

— 155 —

やうになつた。其處を夫人が考へて、私に都合のよいやうな工夫をしてくれた。けれども實は私の爲よりは、夫人自身の都合を圖つたものとしか見えなかつた。それは何かと言ふと、一體何時頃が夫人の獨りてゐる時か、客の少い時か、それを私に知らせるといふことであつた。この爲にどの位自分が損をしななければならぬかといふ事は氣づかずに早呑込みに結構だと言つて了つた。それからは、自分の都合のよい時間に訪問するといふことはまるで出来なくなつて、常も夫人の方に差問のない時ばかり出掛けることになつて了つた。孰の一日だつて、本當に自分の物と思つて安心してゐることも出来ぬやうな境遇へ陥つて了つた。是迄夫人を訪問した時の楽しい心持は、この束縛のために何處へか去つて了つた。夫人が那程堅く約束した私の自由といふものも、有名無實な、何の値もないものであつたと氣附いた。たつた一度か二度、遮莫といふ氣で狡猾を構へてゐると、身體でも悪くしたかと言つて使が見える。手紙が来る。如何にも心配してゐるといふ風が見えたので、これは堪らぬと思つて、忽忽床を延べて其の中へ潛り込んで、それと勤を免れることが出来た。奈何してもこの軛には敵はない。私はそれに屈

1756(45)

服した。しかも、私は飽くまでもエビネエ夫人が可憐しかつたればこそ、あまりつらいと思ふやうなこともなくて、つとめて自分の驕蹇を壓へ壓へしてゐられたのである。彼女も其て不斷の仲間と會合せぬ折の所在無さを醫することが出来た。もとよりそれとても、彼女に取つてはほんの蟲押へぐらゐにしかならぬのであるが、全く獨りて投つて置かれては、到底堪へられぬことは知れてゐるから、それから思へば未だ優な所があつたに違ひない。けれども彼女が文學に心を入れて、小説なり、書簡なり、劇なり、物語なり、然らういふ種類のもを善悪構はず書かうとし始めてからは、もつと優な怠屈凌ぎがある譯であつたのだ。が、彼女は然らういふ物を讀むことなら格別だが、書く方にはあまり樂みを感じなかつたらしい。僅か一度に二頁か三頁書くにしても、その時には二三人でもよいから、義侠的にそれを聽いてやらうといふ者がないと、其の勞作に酬いられたとは思へなかつたのである。其の二三の選ばれたる人の中へ這入らうと思へば、他人に引き立てても貰はないと、行けなかつた。私一人では何時も大抵能無しと見られてゐた。能無しは管にエビネエ夫人の連中の時ばかりでない、オルバットの連中の時でも、また何處でも、グ

1756(45)

1756(45)

リムが模範を見せるやうな處では、必と然うであつた。能無しも便利でよいが、二人の會合の時だけは困つた。其の時には、柄にもない文藝の批評を試みるでもなければ、羞恥家が生意氣な通がかつた口を利くてもあるまい。本物の苦勞人に聞かしたら、さぞなに洩垂らしが！と言つたやうなやつを浴せ掛けられることであらうと可怕さも可怕く、奈何してゐたらよいのか、途方に暮れて了ふのであつた。だから、夫人と會合の時に、斯ういふ考が起りもしなかつた事は固よりの話である。恐らく、生涯夫人と一緒にゐても、然ういふ考は一度も起らなかつたらうと思はれる。それは彼女の容貌が、私の氣に入らぬといふやうな譯からではない。却つて友として愛し過ぎたので、戀人としては愛することが出来なくなつたのであらう。彼女の顔を見て彼女と話を交へるといふことは、私に歡喜を與へた。彼女の對話は多勢の時は面白いけれど、一人の時はさつぱり氣乗りがしない。私の話はまた一倍乾燥で、とても彼女の慰めになる道理がなかつた。長い間無言であるのがつらいから、精氣を張つて座を賑かさうとすると、何時でも必と疲れたやうになることはさまつてゐたけれど、それが可厭になつたといふ事は一度もなかつた。彼

1756(45)

女に眞心を見せて兄弟としての接吻を迫るのが嬉しかつた。その接吻も、彼女の方では一層淡泊な意味に取つてゐたらしい。ただそれだけの事であつた。彼女はおそろしく瘦せぎすて、色も蒼く、胸の肉つきなども、私の掌のやうに扁平かつた。この缺點だけでも、私の熱情を冷却すに十分であつた。乳房の無いやうな女は、女とはどうしても解れなかつた。その外にまだ、話しても無益なやうな或る原因から、彼女が異性の人であることを、私はいつても忘れてゐた譯者云。其の原因といふのは、多分夫人がフランキエとの關係から來た一件であらうといふことである。前篇第七卷の末と参照。

然ういつたやうな譯から、爲方なしにお勤をすることに決心して、少しも反抗の意味を見せずにゐた。と、それは少くも最初の一年間は、想つた程に面倒なものとも思へなかつた。エビネエ夫人は大抵夏中を田舎で暮すことにしてゐたのに、今度は奈何いふ譯か、暫くの間しか滞在しなかつた。巴里の方の用が棄てて置けなかつた爲か、グリムが居ないから、ラ・シッレットの轉地も餘り面白く思はなかつたか、孰方かであつたらう。彼女の居ない間が私の敏伸しをする時で、交友が澤山に夫

1756(45)

人の處へ集まつて來ると、私は溫柔しいテレエズや、その母親と一緒になつて、物やかな幽居の味を縦にするにした。過去幾年の間に、田舎行きをした事もたびたびであつたが、何時もきまつて田園を味ふことが出来なかつた。其のたんに大抵仔細らしい人間が同行して、可惜興味を殺されるので、田園に對する持前の嗜好をば、ますます鋭くさせずに已まなかつた。ことさら楽しさうな其の面影が、ちらりちらりと眼に映るだけ、それだけ心の悶へに堪へられなかつた。サロンや噴水や、遊園や、土間や、然うしたものを看せつけようとする、煩い手合には、飽きあきさせられた。際物の出版物、クラザン、合唱曲謎とき、駄洒落、齒の浮くやうな狎戯、みじめな講談家、大晚餐會、それらにも勞倦れ切らされた。だから見窄しいやうな荆棘垣根、納屋、牧場などを瞥と眼尻で睨んだ時、或る田舎の村を通つて行つて、偶としやく入りの、うまいオムレツの匂に芬と鼻を撲られた時、牧童がうたひ流す小唄の遠音に耳を弄られた時などには、何時も馴れてゐる臍脂や、女服や、香油や、残らず鬼にでも與れてやりたいやうな心持になる程であつた。田舎の家婦の料理、濁酒の方がどの位か可羨しく思はれて、不斷の庖廚長や、給仕長などの頬邊を撲り

1756(45)

曲げて了つてやりたくも思つた。何爲と言つて、然ういふお役人達は、夕飯頃になつてやつと晝食が出来たと言つて來たり、もう寝るといふ時分にもならないと、夕飯を喰はせようともしなかつた。それよりも、もつと酷しいのを頬邊へ見舞つてやりたいと思つたのは、給仕の奴等だ。他がむしやむしや喫つてゐると、傍からじろりじろりと可嫉しさうな眼附で覗き込んでゐたり、咽が渴いて堪らないと、主人の酒の味の變になつたやつを寄越して置いて、目玉の飛び出すほど強奪つたりなんかする。居酒屋へ行つたつて、未だまだ佳いのが、もつと廉くて飲めるものを、到頭この住み心地のよい、閑寂な庵室を見るやうな所で、自分の本意とする不羈な、順調な、平和な生活の中に、わが殘年を思ひの儘に過すことの出来る安定な位地を得たのである。私に取つては、新しき生活である。この新生活が私の心に、奈何いふ影響を持つて來たかといふことを話す前に、便利のため、まづ私の心が何處まで此の境涯へ陥り込んでゐたか、それを一と掴みに話して見よう。然すれば讀者は後の新生面を釋ね、溯るに都合がよからうと思ふ。



1756(45)

テレエズと私との結びつきが成り立つた日は、やがて私が道徳的生活に入る日であつたといふことは今までよく考へた事である。自分の愛著心を傾ける目的物が非常に欲しかつた。それは、私のためにその目的となるべき筈のものが、喩へやうもなく可憐しい最期を遂げたからである。幸福の憧憬といふものは、決して人間の胸臆から掻き消されて了ふものではない。可憐しい母は年の波に揺り流されて、今はあさましくも漂落果てた。とても此の世で彼女が幸福になられようといふことは、望みがたい事である。斯うなれば彼女の幸福を分け前する途も盡きた。私一人て私相應の幸福を捜して廻るより外に爲方がない。それからして私は種種の思量や、種々な計畫を、あれ是と掻き捜して見た。ヴェネチア行きの事に就いても、彼處で心にもなく長官と敬つてゐた那の人間に、幾らか常識でもあつたら、其から私も社會の人となれたかも知れなかつた。が、何分根氣の續かぬ人間てはあり、況して面倒な何處まで行つても、際のないやうな爲事は、眞平といふ方である。彼處で失敗を取つてから後は、もう外の事は何もかも皆可厭になつて了つた。

— 162 —

1756(45)

昔の癖で、遠い處に吊下つてゐるやうなものは、いづれも、牽きつけて置いて、刎ね飛ばす魂膽のあるものと、一圖に思ひ込んで、何も死に身になつて努力するが物はなない。唯その日暮して澤山だといふ氣になつて了つた。テレエズと近しくするやうになつたのは、丁度斯ういふ時であつた。この娘のふうわりとした氣質が、いかにも自分のと緊乎適つてゐるやうな氣持がした。それ以來、時の力でも、禍の手でも破れないやうな、又引き裂かうとするだけ一層堅く結び附くやうな、然ういふ愛著心を彼女に寄せたのである。この愛著心の力の強味は、だんだん話して行く中にも解つて来る。例へば、私の慘狀が極度まで行つた時分に、私の心の上へ尋常ならぬ大創傷を彼女から附けられたけれど、それすら斯うして此の話を書いてゐる瞬間までも、一言も怨みがましいことを他人に洩らしたことがないくらいである。

彼女と離れまいためには、さまざまな勞苦を経て來た。運命や人間に妨げられながらも、二十五年を彼女と共に暮して來た。しかし其の間に正式の結婚に就いては、別に彼女が強つて待ち望んでゐたといふてもなく、私の方でも、式を擧げると

— 163 —

1756(45)

いふ約束をしたこともなかつた。ところが、其の揚句の老後に及んで、始めて彼女を正當の妻といふものに引き直したのであるから、然う知れば、世間では多分斯う推察するであらう。最初から熱烈な戀に陥つてゐたのが、到頭何時しか然ういふ最後の手段を取らせるやうなことになるのであらうと。して又永久に然ういふ手段を私に取らせなかつた筈の、或る特殊な強い理由のあることが分つたならば、世間では、一層自分等の推察の誤つてゐなかつたことを確めるであらう。そこで私は眞實の打明け話をして、實際彼女に遇つた最初から今日まで、彼女に對して戀愛の一闪をも感じたことはなかつた。ワレンス夫人にはまゐつて了ふとも、此の女にばかりは、惚れる氣づかひは決してなかつた。彼女から得た欲情の満足も、つまり單に私の「男性」といふものが感じたただで、私の個性が決してそれで満足したわけではなかつた。と、斯う聞けば、諸君は何と思はれるであらう。すると、私の身體は他と異つてゐるから、戀を感じるといふことが出来ないのである、私が最も可憐しいと思ふ女達に牽かされる感情と、この戀とは別物であるから、と然ういふ風に考へられるかも知れぬ。まあもう少しの間、辛抱して居て貰はう。其の中に

1756(45)

此處だと言ふやうな場合が來て、何もかも獨手に解けるやうになる。

同じ事を繰り返すやうだとは思ふが、しかしそれが必要なら爲方もあるまい。私の欲求の第一のもの、最も大なるもの、最も強いもの、最も壓しがたいものといふのは、全く心の裡に在つた。何かといふと、親み——最高の度合での親みといふものに外ならぬ。斯ういふ譯から、特に私には男よりも女が必要であつた。男の友よりも女の友が必要であつた。何が異つてゐると言つて、此の欲求ぐらゐ異つてゐるものはあるまい。身體と身體との抱擁などは、どのくらゐ緊密であつたところで、とてもとても私の思つてゐる欲求の半分も満足させどころでない。同一體の中へ同時に二個の靈を併せ宿す、然ういふのでなければいつまでも空虚を感じさせられる。その空虚、孤獨の感が、もう自分から離れてもよい頃であらうと思つてゐた。限りなく美しい性質の、しかも未だ其の頃は容姿までが、唯可愛さ一方で、技巧矯飾といつたやうなもの、淡影さへ雜らぬこの年若な少女の全心身を、若し私が望んでゐたやうに、自分の全心身と抱合させることが出来さへしたら、自分の全心身を彼女のそれと抱合させる事は譯もないことであつた。男の方には心配

1756(45)

せねばならぬ人間は一人もなかつた。私は彼女に愛された唯一の男であると信じてゐる。彼女の穩かな欲情は、私の方で自分の貞操を破つた時ですら、他に愛する男を求めるといふ必要を感じさせなかつた。私には家族がなかつた。彼女にはそれがあつた。そして其の家族も、いろいろ氣質の違つた、まるで懸絶れて、どうしても自分の家のものに出來ないやうな人人から成り立つてゐた。それがそもそも不幸のはじまりであつた。私も其の母親の子になれることならば、甚麽事をして、何が可能からう！ 然うならうためばかりに、甚麽に骨を折つたか知れぬが、どうしても效驗が見えなかつた。無益と知りつつも、利害を共同にしようと思つたが、それもまた不可能の事であつた。彼女は私のと異つた、むしろ私のと利害相反するやうな収入をもつてゐた。自分の娘のとも利害を異するところから、到頭それを捲き上げて了つた。母親も、外の子供等も、孫等までが、みんな蛭みたらうな者ばかりで、テレエズの物を盗むぐらゐは、まだまだ餘程罪の輕いところであつた。慣れつこになつて、姪どもに迄自由にさせてゐるこの哀むべき少女は、自分の物を竊まれようと、所好な様にされようと、黙つて見流してゐた。傍にゐる私は、

1756(45)

自分の財布を拂いても、いくら警戒の言葉を盡して見ても、とてもテレエズの利益になるやうなことはないと思つて、いたいたしい心でそれを見てゐた。寧ろ彼女を母親と断れさせようともして見た。其のたんびに彼女は左右を振つた。私はその量見を見あげたものだと思つて、ますます彼女を尊む心を加へた。しかし、その左右のために、テレエズも私も損害を受けることは、依然前と少しも變らなかつた。母親やら、外の家族の者等に、すつかり身をうち任せてゐて、私の事も、自分の事も抛棄つて置いて、専ら然ういふ人達の爲に立ち働いてゐた。彼等から來る入れ智慧が、彼女に有毒であつたと同じやうに、彼等の貪慾も、また彼女を窟地へ陥れることに於いて、譲るものでなかつた。とにかく、彼女の天賦の順性なり、又私に對する愛の力で、全然彼等の奴隸となるやうなことはなかつたにしても、私の頻りと注ぎ込んだ教訓の効果が、大半殺がれて了つたことは疑ひない。出來得るかぎりの手段を取つて、二人が同一體にならうとして、藻掻いても、それがために、何時までも引き別れてゐなければならなかつたのであることも疑ひない。

私の優しい心を傾け盡して、誠實な愛を注ぎ向うからもそれに應ずるだけの情

1756(45)

を寄せて来てゐるにも拘らず、私の心の空虚は、依然として空虚のままで棄てられてゐた原因は、全く茲に在るのであつた。子供でも出来たら、この空虚が充たされるであらうと思つた。その子供も出来るには出来たが、それがますます面白くなかつた。斯うしためちやめちやな家庭で育てられたならば、甚麽ひどい人間に仕立てられて了ふことかと思つて慄へた。それから見ると、育児院で教育された方が、どの位危険が少くて済むか知れぬ。フランキイユ夫人に出した手紙にも、子供を入院させた理由を細細と書いて行つたが、實際最も有力であつたこの一つの理由だけは、態と書かずに置いた。私の心では、餘りな恥を辯明しようために、自分の愛する女の家族を悪者にして、了ふのが、いかにも忍びないやうに思つたからである。が、現にその家族の中から、何と言譯をしても救ひ得られぬあゝいふ碌でなしの兄弟が一人出てゐるのであるから、それでも尙且、その兄弟などと同じ様な教育を受けさせるために、生んだ子供は家へ置いておいた方がよかつたらうと、眞逆誰も言ふ人はあるまい。

強い欲求は感じてゐながら、この親みの味を心一ばいに味ふことは、到底わが力

— 168 —

1756(45)

に能はぬことだと思つた。其處から爲方なしに種々な補充を盡つて見た。が、やはり空虚はその儘であつた。唯幾らかそれを忘れるやうなことにだけはなつた。全く私と一つ心の友といふものがない以上、已むを得ず、私の情性を刺撃してくれ、るやうな友を擇ばねばならぬことになつた。斯ういふ譯から、デドロオや、コンヂヤックとの交情を拓き且温めるといふ方針を取つた。グリムとも新たに交誼を結んで、是はまた格別懇親な間になつた。そして其の末には、前に話した論文の所爲で、今まで自分が然ういふ方面とは永久絶縁になつてゐたと思つた文壇の眞中へ、知らぬ間にまたしても引つ張り出されるやうな、憂い目を見なければならぬことになつてゐた。

私の初めての發足は、一つの新しい道を展げて、他の一つの知識界へと私を導いた。その世界の組織の純一、崇高なのに出會した私は、心に一種の熱を起さずにはなれなかつた。聽てその組織を研究して行く間に、私の眼へ這入つて来るものは、ただ傳習思想の誤謬と愚昧、社會狀態の壓抑と悲惨、然ういふものばかりであつた。愚かな迷ひの心から、自分こそすべて是等の幻影に類するものを滅盡せしむべき

— 169 —